

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第 14 号

Japanese Studies in East Asia

No.14

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2025 年 9 月 20 日発行

巻頭言

東アジア日本学研究学会

会長 李東哲

数年前、現勤務校の「学術活動月」（中国の多くの大学で、主に院生を対象に行われるおよそ1カ月間にわたる学術的行事）において日本語学科の学部生を対象に「読書と学術研究」というテーマで講演を行ったことがある。講演では孔子、マルクス、フランクリン・ルーズベルト、シェークスピア、杜甫など、国内外における歴代の名だたる思想家、政治家、文学者たちの読書に関する名言、そして、日本ソフトバンク創業者兼取締役の孫正義社長が2年間で4,000冊の本を読み、成功への道筋を示した（中国のマスコミによる説）という話をしたが、それはいうまでもなく、現今、ほとんど読書をしなくなってきた大学院生や学部生に読書の重要性をアピールするという強い願望があったからだ。

ところで、かつて日本語を教えたり、縁があって知り合った修士・博士課程の在校生や若者の日本語教師が「先生、日本語の論文を書きたいのですが、どう書けばいいですか」としばしば問うてきたり、場合によっては実際に書いた論文を見てもらうために送ってくれたりすることも多々ある。でも、日本語学科を卒業したならば、学部時代に「日語写作（日本語の作文）」やら「研究方法と学術写作」やらの授業科目でとくに習っており、実際卒業論文または修士論文を書いているはずだから、理屈から言えば論文の書き方がわからないわけではないだろう。にもかかわらず、何故いまさら書き方云々の話が出てくるかというと、やはり論文を含めて読書量が足りないからだと思われる。

およそ半世紀にわたる私個人の日本語学習や教授ならびに日本語の論文を書いてきた経験からすれば、学術研究の基礎は何よりも原文（日本語）で本を読むことから始まるといっても過言ではない。ジャンルを問わず、原文でたくさんの本を読むことを通して、自然な日本語を身につけることができるし、森羅万象の幅広い知識も得ることができる。また、場合によっては論文を書くもっとも重要なポイントの1つである論文テーマの発見も可能で、書き方も自然と身につく。私がおよそ40年前に書いて発表した最初の論文「谈谈‘～を好きだ’句型（『～を好きだ』文型について）」（『日語学習与研究』1985年第六期）も日本語の小説を読んでいるうちに、伝統的文法では間違いとされている「～を好きだ」という表現が多すぎることに気が付き、「太平学校」第四期在学時（1983年9月～1984年6月）にレポートとして提出したものを後日中国語に書き直して投稿したものである。

冒頭に挙げた杜甫には「読書破万卷、下筆如有神」という詩句があるが、これは単に詩や一般文章に限ったものではなく、論文にも適用するものである。学問の研究は蓄積であると言われているが、このような蓄積は一朝一夕にしてなるものではなく、時間・労力や弛まぬ努力を要する「万卷の読書」によってなされるものであろう。

目次

巻頭言	李東哲（東アジア日本学研究学会会長）	1
【論文】		
杜沁桓	日本語のコト連用形名詞に対応する中国語表現に関する一考察 —事態把握の視点から—	3
石澤瑋	上代日本語における「とりもつ」の多様性に関する研究	21
黄少安	中国人・韓国人学習者による日本語破裂音の音響的特徴に関する対照研究 —語頭破裂音音節のF0を中心に—	37
郝文文	機能動詞「与える」の共起名詞と構文について	51
郭佳麗	日本語の「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴について	69
劉怡	いわゆる様態の「ソウダ」と推量の「ヨウダ」の異同 —中国語“好像”との対応関係を中心に—	85
福田翔・張正	日本語と中国語の所有構文と存在構文 —連続性と二分性に基づく構文意味論的分析—	103
許娜・周堂波	夏目漱石『草枕』における「逸民」の表象 —陶淵明『桃花源記』との比較を中心に—	119
蔡少峰・周堂波	新文科構築における理工系大学の日本語専攻の課題と展望 —「日本語＋」複合型人材育成モデルの実践—	131
林子愉	近代中国の作文教育における「写生」の受容と展開	147
学会役員		161
学会動向		162
会員消息		163
東アジア日本学研究学会会則		164
『東アジア日本学研究』投稿要領		167
『東アジア日本学研究』執筆要領		170
『東アジア日本学研究』査読要領		171
編集後記		173

日本語のコト連用形名詞に対応する中国語表現に関する一考察 —事態把握の視点から—

杜 沁桓（名古屋大学大学院生）

要旨

日本語には、「笑い」や「戦い」など、出来事を表す連用形名詞が存在し、影山（1999）では「デキゴト名詞」、上原（2010）では「動作名詞」と呼ばれている。一方、中国語にも出来事を表す語はあるものの、日本語の連用形名詞に相当する名詞表現が常に備わっているわけではない。例えば、「窓拭き」や「ゴミ拾い」は、中国語では「擦窗户」「捡垃圾」のように動詞句によって表す必要がある。本稿では、日中辞典におけるこれら連用形名詞の中国語訳を例に取り、それに対応する中国語表現の品詞的特徴を分析するとともに、日本語がこうした出来事が名詞で言語化され、中国語では主に動詞で言語化される理由を考察した。さらに、Langacker（1987a, 1987b, 2008）の品詞に関する定義を踏まえ、日本語は概要走査（summary scanning）を通じて出来事の時間的側面を相対的に捉えにくく、出来事全体をひとまとまりとして把握する傾向があるのに対し、中国語は連続走査（sequential scanning）を好み、出来事の進行にかかわる諸要素の観点から順次的に出来事を理解する傾向があることを指摘した。

キーワード： 名詞化、品詞、事態把握、認知言語学、日中対照

はじめに

日本語には、動詞の連用形を用いてコトを表す名詞が存在し、名詞化の一形態としてしばしば論じられてきた。たとえば、「歩き」「笑い」「泳ぎ」などは典型的な例であり、デキゴト名詞（影山 1999）、動作名詞（上原 2010）、あるいは動詞的な名詞（金 2003）と呼ばれている。また、単一の連用形だけでなく、複数の連用形（出入り・貸し借り）や連用形と名詞の組み合わせ（戸締り・窓拭き）で構成された名詞も見受けられる。これらも一般に「連用形名詞」と総称され（西尾 1961、岡村 1995）、名詞化の表れとして広く取り上げられている。本稿では、この種の名詞を「コト連用形名詞」と呼ぶことにする。一方、中国語においても、動作・作用（以下では、便宜上、有生物によるものか否かを問わず、一律に「動作」と称する）を表す一部の語が名詞としての機能を兼ね備えており、『現代汉语词典』などの辞書では、これらの語を動詞と名詞の両品詞として扱う旨が記載されている

（「建設」「研究」「学習」）。しかし、日本語で連用形名詞によって表される概念が、中国語において必ずしも名詞形式で表現されるとは限らない。例えば、「窓拭き」や「ゴミ拾い」などは、「擦窗户（「窓を拭く」）」「捡垃圾（「ゴミを拾う」）」のように、動詞句とみなされる表現に訳されるのが一般的である¹⁾。このような不対応は他の言語との間にも見られ、日本語における事態把握の特異性を指摘した研究がある。例えば、池上（1981）は「（日本語は）出来事全体を捉え、ことの成り行きという観点から表現しようとする」と指摘した。また、金（2003）は日本語と韓国語における名詞構造と動詞構造の対応関係を数量的に比較検討し、日本語が名詞構造を好み、韓国語が動詞構造を好むという結論に至った。さらに、新屋（2014）は、名詞が担う文法機能を考察する際に英語との対照を行い、日本語が命題を名詞で収め、動態より静態を指向し、事態を名詞的に捉える側面があると指摘している。

従来の研究では、名詞化に基づく表現と事態把握との密接な関係が繰り返し指摘されてきた。そのため、日本語と中国語におけるこの種の語の対応不一致も、両言語間の事態把握の相違に起因する可能性が高いと推察される。しかし、対訳コーパスの不足や中国語の品詞の曖昧さなどが影響しているのか、日本語のコト連用形名詞に対応する中国語の名詞表現が見つかりにくい、あるいはそもそも存在しないという現象の原因については、筆者の知る限り十分に検討されていない。そこで、本稿はこれを研究対象とする。無論、翻訳には一定の恣意性があるという問題がある。また、中国語の品詞判断も長年にわたり議論が続いている²⁾。したがって、比較の際には適切な方法を用いることが求められる。

従来の品詞の判定は、多くの場合、語の統語的機能に基づいて行われてきたが、Langacker（1987a, 1987b, 1999）は、品詞を意味的カテゴリーの拡張と捉え、スキーマに基づいて品詞というカテゴリーを定義している。品詞は捉え方の違いと考えることができ、そのため、典型例や非典型例を含む幅広い現象を説明することが可能となる。これにより、ある言語単位のカテゴリーは排他的ではなく、ある程度の連続性を持ち、それぞれに典型性の違いが存在することが示される。これを踏まえることで、中国語の議論においてしばしば課題となる品詞判定の問題を解決することができる。

本稿では、対訳コーパスの不足や翻訳の恣意性といった問題に対しては、ある程度典型的な対応関係を示す日中辞典の例文を主な参考資料とすることで対応する。3.1 で詳述するが、本稿の目的は翻訳研究ではなく、辞典に掲載された一定の典型性をもつ翻訳例を手がかりとして、事態把握の違いに関する大まかな傾向を探ることである。

そこで、本稿では、コト連用形名詞とそれに対応する中国語表現の違いを、日中辞典の語釈を対象として比較し、その違いがどのような認識上の違いを反映しているのかについて認知言語学的観点から考察する。第1章では、Langacker による名詞と動詞および名詞化の定義を導入し、その仕組みを概説する。第2章では、日本語の連用形名詞の種類と構成および中国語の動名両用の言語単位についての先行研究を検討し、本稿の比較対象と比較

方法について述べる。第3章では日本語コト連用形名詞とそれに対応する中国語表現を対照し、その違いがどのような認知的違いによって引き起こされたものであるかを解釈する。「おわりに」では全体をまとめる。

1. 理論的枠組み

認知言語学では、名詞や動詞のようなカテゴリーはプロトタイプ (prototype, Lakoff 1987, Taylor 2004) を中心にカテゴリー化という基本的認知能力により構成されると考えられている (Langacker 1987b)。Langacker (1987a, 1987b, 1999) は、プロトタイプをカテゴリーの典型例とみなすだけでなく、カテゴリー成員に共通する特性に基づいた抽象的な共通性としてスキーマ (schema) の概念を提唱している。Langacker によれば、名詞は実体 (entity) として認識されるモノ (THING) とされる。一方、動詞などはプロセス (PROCESS)³⁾であり、時間的変化を伴うモノ間の関係に焦点を当てるという。図1は、プロセスを連続走査 (sequential scanning) としてとらえる例を示したもので、例えば「球が斜面を転がる」という事態を時系列的に捉えるイメージである。

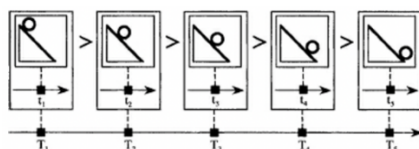


図1 プロセスの捉え方 (Langacker 1999:109)

このような捉え方は、図2でスキーマに抽象化される。図中の円は、注視の対象となる実体 (trajector、以下 tr とする) を示し、正方形は関係変化の参照対象 (landmark、以下 lm とする) を示している。点線は両者の関係を、下部の矢印は時間を表している。

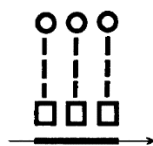


図2 プロセスのスキーマ (Langacker 1987b:75)

一方、同じ事態でも、名詞化に基づく表現では概要走査 (summary scanning) が行われ、時間的変化を一括して捉え、心理的に1つのまとまりとして認識される (図3)。

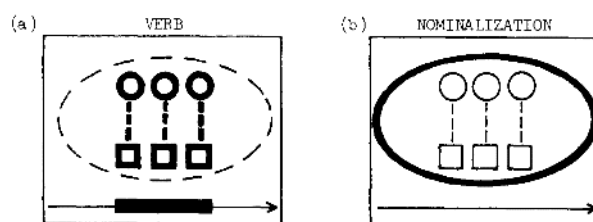


図3 動詞と名詞化による名詞のイメージスキーマ (Langacker 1987a:90)

動詞と名詞化された名詞のスキーマにおいて、要素は同じであり、唯一の違いは焦点にある。認知言語学では、背景となる概念構造を「ベース (base)」、そこから焦点づける部分を「プロファイル (profile)」と呼ぶが、動詞と名詞化された名詞の違いは、ベース（ここでは、出来事における lm と tr、両者の関係性、時間性）は同じでもプロファイル（動詞は時間性と関係性、名詞化による名詞は関係性が構成する抽象的なモノ）が異なる点にある。本稿でも、この「捉え方の差異」を前提として議論を進める。

2. 先行研究

西尾（1961）および岡村（1995）は、連用形名詞を(1)のように、「単一の連用形」「複数の連用形」「連用形+他要素」の3種に分類している。影山（1999）が示すコト名詞の一部や、金（2003）が指摘する「動詞的な名詞」も、ここでいう連用形名詞に含まれる。

- (1) a. 1つの連用形からなる連用形名詞：笑い、走り、扱い
- b. 複数の連用形からなる連用形名詞：出入り、貸し借り、売れ行き
- c. 連用形が後項としての連用形名詞：火入れ、雪解け、遠回り⁴⁾

さらに(c)については、その前項が「内項」であるか「付加詞」であるかによって、以下のように区別される（杉岡 2002）。

- (2) 内項：ゴミ拾い、窓拭き、人殺し など
- 付加詞：遠回り、犬掻き、胸騒ぎ など

一般に内項連用形は生産性が高く、付加詞⁵⁾連用形はそうではないとされるが、一定の条件下で付加詞連用形も新しい語を生む場合がある（葉 2012）。また、連用形名詞の使用に際しては、特に次の点が注目される。沈（2013）によれば、連用形名詞は必ずしも自立名詞として機能するとは限らず、「自立（遊び・泳ぎ）」「構文補助（～のあたり・～の転がり）」「複合語（～明け・～過ぎ・～沿い）」の3段階に分けられ、それぞれ自立度⁶⁾に差異があるという。また、西尾（1961）、岡村（1995）、沈（2013）などは、連用形名詞の多くが動作の「具合・加減・有様」を表すと指摘する。しかし、Langacker（1999）の名詞化モデルに基づけば、名詞化とはあくまでプロファイルの変化に関わるものであり、意味内容そのものに直接的な影響を与えるものではないとされる。したがって、このモデルを前提とする場合、影山（1999）が指摘するような語幹に2モーラ以上が求められるといった音韻的制約などの外的要因を除けば、連用形名詞の自立度は、元のプロセス概念における参与要素への依存性によって説明できると考えられる。たとえば、「沿う」の場合では、その対象が一般的に関心の所在であり、「～に沿う」などの形で言語化する必要がある。それに対応する名詞化表現「沿い」も、同様に何らかの形で対象を明示することが求められる。一方、「泳ぐ」の場合、動作の主体や行為の場所を言語化せずとも文として成立し得る⁷⁾。そのため、その名詞化表現「泳ぎ」も、単独で用いられる。

同様に、名詞化が意味内容に影響を及ぼさないという前提に立つならば、連用形名詞がしばしば動作の「具合・加減・有様」を表すという傾向も、プロセス概念に対する認知的な傾向に起因すると考えられる。すなわち、プロセス概念において、「具合・加減・有様」は知覚可能性の高い側面 (facet)⁸⁾ であるため、言語表現においてこれらの側面が選ばれやすいのである。Langacker (1987b:64-65) は、“Harvey’ s taunting of the bear was merciless” という表現において、“taunting” が「行為の仕方」として解釈される点に関して、一般名詞である “party” が文脈に応じて (e. g. The party was boisterous.) 仕方や継続時間など異なる側面を取り立て得る例を挙げ、このような側面の取り立てはあくまで文脈によるものであり、“taunt” が “taunting” として名詞化されたことによって特定の意味を持つようになったわけではないことを指摘している。

一方、中国語にも日本語のコト名詞に相当する概念があり、(3)のように動詞と名詞の両機能をもつ語が存在する。

(3) 建設 (建設する・建てる→建設)、学习 (勉強する・学ぶ→学習、勉強・学び)、調査 (調査する・調べる→調査・調べ) など

これらは「兼類語 (兼类词)」と呼ばれる場合もある (呂 1979、林 1982、陆 1994)。ただし、中国語の品詞認定については諸説あり (王 2001、高 2007、2008 など)、王 (2001) は、「語用上の指示化・概念上の事物化・統語上の名詞化」のいずれも捉え方の転換として説明可能だと主張している⁹⁾。また、高 (2007、2008) は、中国語の動詞-名詞の兼類現象を自然なものとしつつ、カテゴリー区分は完全に重複しない限り依然として有効であるとする。両者は従来「統語的」とされてきた名詞化と「語彙的」とされてきた名詞化が、本質的には同一の原理に基づく現象だと見なしており、本稿もこの見解を採用して、動詞句が主語や目的語として機能し得ることを名詞化とみなす立場をとる。

以上の日本語の連用形名詞と、中国語において主語や目的語として用いられる動詞 (いわゆる兼類語を含む) は、連続走査から概要走査への捉え方の変化を反映する言語単位であると考えられる。しかし、日本語のコト連用形名詞が中国語では必ずしも名詞表現に対応しない例が多い。次章では、両言語における具体例を比較し、その対応関係を提示するとともに、両者の相違がどのような要因に起因しているのかを検討する。

3. 先行研究

前章では、日中両言語の表現には連続走査と概要走査を反映する表現が存在することを確認した。本来ならば、ある言語の表現において概要走査が必要とされる場合、他言語への翻訳においてもその捉え方が反映されるべきである。しかし、前述のとおり、すべての場合において両言語の表現が完全に対応するわけではない。したがって、本稿は、概要走査を反映する言語単位における日中両言語の対応関係を中心に据え、両言語における事態に対する捉え方の傾向を検討する。

3.1 比較方法

日本語から中国語への大規模対訳コーパスを用いた研究は現時点で困難であるため、本稿では代替的手段として、日中辞典の記述をもとに両言語の対応関係を観察する。もちろん、辞書の記述が現実の用法を完全に反映するわけではなく、翻訳も唯一絶対ではない。しかし、対訳辞典は語義理解を容易にすることを主要な目的とし、比較的典型的な例を提示するという性格をもつ。そのため、対訳辞典に示される対応関係は、ある程度典型的かつ一般的な用法の反映とみなせると考えられる。

使用する辞書は小学館（2017）『日中・中日辞典』第三版である。ここで対象とするのは、辞書に見出し語として掲載されている日本語単語とその対訳ではなく、日本語の例文とそれに対応する中国語訳である。これは、日本語単語の対訳が必ずしも例文に直接適用されるわけではないためである。たとえば、日本語の単語「笑い」は中国語で「笑」と訳され、《笑うこと》という補助説明が示されているものの、例文「笑いが止まらない」では中国語で「笑个不停（直訳：止まらずに笑う）」という動詞的表現が用いられている。すなわち、単語のみではなく文脈中の用例を検証することで、より具体的で正確な用法が把握できると考えられる。

なお、紙幅の制約があるため、本稿では無作為に抽出した 120 例の連用形名詞の用例と対応する中国語表現を分析対象とする。具体的な抽出手順は以下のとおりである。

（ア） 「中納言」データの短単位語彙表において、Excel のフィルター機能を用いて、名詞属性の日本語単語を選び出す。

（イ） その中から、語彙素の読み方に基づいて、-i/-e で終わる和語名詞を選び出す。

（ウ） これらの名詞に rand 関数を用いてランダムな番号を割り当てて並び替え、単語の順序をランダムにする。

（エ） ランダムに並べ替えた単語リストの単語を、リストの上から下の順に『日中・中日辞典』で検索し、対応する動詞形の有無を問わず、コトを表す名詞であるかどうかを判断する。収録されていないものと辞典の記述からコトを表すとは言えないものは除外する。

（オ） 典型的な名詞の働きをするコト連用形名詞を考察対象とするため、辞典における例が文になっていないものと、「～（が／を／に）する」のような軽動詞との組み合わせで 1 つの意味を表す表現（取引をする、大笑いする、鵜呑みにする など）になる用例は除外する。

（カ） 例文が全て不適格の単語も除外する。

（キ） 選ばれた単語を抽出対象として保持して、その用例と訳文を記録する。

（ク） その後、（エ） から（キ） までの手順を繰り返し、条件を満たす日本語例文が 120 例前後になるまで続ける。

3.2 日中表現の比較

上述の手続きを経て、以下の条件を満たす 40 個のコト連用形名詞とその例文及び中国語訳を収集した。

当たり、刷り、運び、やり直し、扱い、一人暮らし、引越し、雨混じり、泳ぎ、暇つぶし、回り、乾き、巻き、帰り、休み、降り、高まり、取り扱い、取引、手当、手入れ、受け付け、出会い、笑い、伸び、申し込み、進み、先駆け、戦い、騒ぎ、昼寝、働き、付き合い、暮らし、味付け、無駄遣い、問い合わせ、夜明け、踊り、流れ

以上 40 の単語について、合計 120 の用例が存在し、辞書には 129 の訳語が示されている。そのうち、原文における連用形名詞が訳文中で名詞として表現されているものの、意味において原文とずれが生じている例は 11 例（部分的に対応）であり、訳文中で名詞として表現され、意味が原文と一致している例は 26 例（完全に対応）であった。また、訳文中で対応する概念が名詞ではなく、意味も一致していない、もしくは他の表現によって表現されている不一致の例は 92 例（不対応）であった。以上の 3 つの関係はそれぞれ 10%、20%、70%を占めており、表現上で不対応の例が多数を占めていることが分かる。

以下では、まず対応例を取り上げ、その後に部分的対応例、そして不対応例の順に典型的な例を提示しながら分析する。紙幅の関係で全ての語彙や用例を網羅的に示すことは困難であるが、代表的な事例を通して、日中両言語における対応関係とその背景にある認知的要因を明らかにすることを目指す。

3.2.1 完全対応

まず、「完全対応」とは、「日本語のコト連用形名詞」と「中国語の名詞表現」が対応し、意味的にもほぼ等価である場合を指す。該当する 26 例のうち、特定の動作に対するコメント（動作の状態や有無、得意・不得意など）を示す用法が 14 例と最も多かった。そのほかには、他の名詞を修飾する用法が 4 例（「動作＋ほかの名詞」）、動作の開始または終了を表す用法が 3 例（「動作＋を＋開始／終了の動詞」）、動作の受容を表す用法が 2 例（「動作＋を＋受ける」）、原因を表す用法が 1 例（「動作＋が＋動詞」）、同定述語としての用法が 1 例（「X＋は＋動作＋である」）、そして他の動作が行われる場面を表す用法が 1 例（「動作＋に＋動詞」）あった。以下では、最も多くの例が属する「特定の動作に対するコメント」を中心に挙げる。

(4)は、動作「泳ぐ」を指すコト連用形名詞「泳ぎ」が日本語で主語の位置に置かれ、述語（～がうまい／得意など）によって評価を示すものである。中国語でも「游泳」という名詞的用法を用い、「会＋動作名詞」の形で同様に得意・不得意を表すことが確認できる。

(4) 彼は泳ぎがうまい

他 很会 游泳

彼 ～にたけている 泳ぎ

(5) は、動作概念「付き合う」を「付き合い」として名詞化し、「広い」という形容詞述語で評価する一例である。対する中国語は、「交际」という名詞表現を取り、「广」という述語を用いて同様に「付き合いの広さ」を評価する。

(5) 付き合いが広い

交际 广

付き合い 広い

このように、日本語では、連用形名詞を主語位置に立てることで「動作の特性や評価」を簡潔に示せる。一方、中国語で対応する表現を観察すると、大きく2つのタイプに分かれるように見受けられる。

1. (4) のように「很会 + 名詞 (游泳)」の構造をとる場合：これは「動賓構造 (動詞+目的語)」を名詞的に捉える形とも考えられ、能力・技能の高さを強調する。

2. (5) のように「名詞 (交际) + 形容詞 (广)」という構造をとる場合：これは日本語の「主語+述語」に相当し、特定の動作に関する評価を表している。

注目すべき点として、王 (2001:113) はすでに、中国語においてはコメントや評価を行う文体において名詞化が多く用いられることを指摘している。本稿における中国語の名詞化の用例がこの種のテキストに多く見られたという観察結果とも、この点は一致している。特に、ここでのコメントや評価は、目の出来事に対する即時的な判断ではなく、動作や出来事全体に対する一般的な評価である。第1章で紹介した名詞化の説明によれば、名詞化は、プロセス概念のある段階を際立たせるのではなく、プロセス全体をひとまとまりのものとして捉える心的過程である。したがって、日中両言語がこのような文脈においてともに名詞化表現を選択するのは、当該文脈における記述の要請と名詞化の性質とが合致しているためであると考えられる。

しかし、両言語で同じく名詞化が行われるからと言って、構文自体が全く同形・同語順であるとは限らない。日本語は「泳ぎが得意だ」「付き合いが広い」のように「名詞+が+形容詞」形式を取りやすいのに対し、中国語では「很会游泳」「交际广」のように、「動詞+名詞」あるいは「名詞+形容詞」など多様なパターンが見られる。しかし、いずれのパターンでも、焦点は「動作の特性や状態」であり、両言語とも「動作の進行」や「時間的变化」ではなく「動作をまとめて1つの概念としてみなす」点が共通している。その結果、両言語の名詞化表現が互いに対応可能となっているのである。ただし、これは両言語で名詞化表現を選択する原因であり、「名詞化の使用の絶対条件」を主張するわけではない。

以上より、日中両言語が共にこの際に名詞化に基づく表現を用いるのは偶然ではなく、名詞化の意味的特性が認知上の需要に適合しているためであると考えられる。ほかの日中両言語の用例 (名詞の修飾、動作の開始・終了、動作の受容等を表す用例) から見ても、名詞化に基づく表現が使われているのは、「動作の各段階ではなく、全体を一括把握・評価したい」という認知的モチベーションがあるためだと考えられる。

3.2.2 部分対応

一方、品詞が一致しているにもかかわらず、語義が原文とやや異なる、あるいはコト（動作・出来事）そのものを指していない例が7例あった。これを本稿では「部分対応」と呼ぶ。収集例全体における比率は約10%と高くはなく、(6)～(8)に示すように、中国語は日本語とは異なり、プロセスをモノとして捉え直す過程を経て表現されてはいない。

(6) 足の運びが遅い

a. 步伐 慢

足取り 遅い

b. 脚步 慢

足取り 遅い

(7) ちょっとした騒ぎが起こった

闹 出 一点 小 乱子

起こす 生じる すこし 小さい 騒ぎ

(8) 多くの申し込みがある

报名的 人 很多

申し込む 人 多い

これらの例において、日本語では「運び」「騒ぎ」「申し込み」など、動作や出来事そのものを表す連用形名詞が用いられている。一方、中国語の対応表現では、「步伐」「脚步」などの属性や能力を示す名詞、「乱子」のように出来事を直接指す名詞、あるいは「报名的人」のように動作の実行主体を指す名詞句が用いられている。具体的に(6)では、「步伐」「脚步」は「人の歩行能力（歩幅など）」を指し、身長や体重と同様に属性として捉えられる。これらの語は「歩行動作のあり方」をある程度示唆するものの、それ自体が出来事概念を構成するわけではない。(7)の「乱子」は「揉め事」や「トラブル」に相当し、出来事を表す語ではあるが、「事故」のように本来的に出来事を表すコト名詞に近い。そのため、「名詞化」による表現とは言いがたい。また(8)では、日本語の「申し込み」は名詞化によって動作そのものを表しているのに対し、中国語では「报名的人」（申し込む人）のように、名詞的に表現されているものの、日本語のように出来事自体をモノとして捉え直す心的過程は反映されていない。

このように、中国語に名詞化に基づく表現が存在しない場合、既存の名詞化によらない名詞を用いるか、あるいは(8)のように、焦点を移し、出来事の意味内容を迂回的に表すことになる。結果として、日本語のコト連用形名詞と中国語の名詞が一見、品詞上は対応していながら、実際には語義にずれが生じるわけである。

これら「部分対応」7例はいずれも、前節の「完全対応」とは異なり、日本語の名詞化概念と中国語の名詞表現とが完全には重ならないことを示している。ただし、文法上はい

ずれも「名詞対名詞」であり、(6)や(7)のように「出来事」に近いニュアンスを部分的に含む例もあるため、「完全に不对応（中国語で動詞句や別の品詞で表現される）」とまでは言えない。

3.2.3 不对応

本稿で「不对応」と分類した例は、合計 92 例に上る。主に日本語原文ではコト連用形名詞が使われているにもかかわらず、中国語訳では動詞、あるいは他の非名詞表現が用いられているケースである。ここでは、先に見た「完全対応」や「部分対応」と対比しながら、不对応の特徴を具体的に考察する。

まず注目すべきは、同じ「動作の評価」という文脈であっても、不对応となる事例が多い点である。本稿で収集した資料では、こうしたパターンが 35 例に上った。以下に代表例を示す。

- (9) 弾のあたりが悪い

子弹 打 得 不准

弹 うつ “得” 正確ではない／正しくない

- (10) 今日は洗濯物の乾きがよかった

今天 洗的衣服 干 得 很快

今日 洗濯物 乾く “得” 早い

(9) と (10) の日本語原文はいずれも連用形名詞(「あたり」「乾き」)を主語位置に置き、その動作や状態を評価している。一方、中国語の訳文では、主語は「子弹」「洗的衣服」といった動作に関連する「モノ」であり、評価の中心は動作結果や程度(“打得不准”“干得很快”)を示す動詞述語に置かれている。

さらに、不对応の例を詳しく見ると、多くが具体的・臨場性の高い事象に関する記述であることがわかる。例えば「弾のあたりが悪い」は、射撃が行われたという明確な出来事を踏まえ、それに対する評価を述べている。これは一般的な法則ではなく「今まさに起きている」か「起こったばかり」の具体的な場面である。同様に「洗濯物の乾き」も、「今日は」という時点を明示することで特定の出来事を強調している。

本来、臨場性が高い出来事は時間的変化や動作の連続性が強調されやすいため、連続走査で捉えるのが直観的には自然である。実際、中国語では動詞を中心に、「動詞+得+形容詞」などの構文を用いて「動き」や「出来事による結果」を描写することが多い。一方、日本語では、こうした具体的な出来事であっても概要走査を好み、コト連用形名詞によって出来事をひとまとまりのモノとして捉える傾向が見られる。

この違いにより、臨場性の高い場面であっても日本語が「事態をモノ扱い」しやすいのに対して、中国語は「事態を動作中心に描写」する傾向が強く、結果として両言語で品詞構成が食い違う「不对応」事例が増えると考えられる。

また、連用形名詞が述語として用いられている表現については、本稿で収集した翻訳例のうち 12 例が、ほとんど普通の動詞述語表現で訳されていた。以下に例を示す。

- (11) なんという騒ぎだ！

真 够 闹 的！
 実に十分に 騒がしい 主観評価マーカー

- (12) 今日はお得意回りだ。

今天 去 各处 拜访 老主顾。
 今日 行く 各所 訪問する お得意様

- (13) 今会社からの帰りです。

现在 正在 从 公司 回家。
 今 している から 会社 帰る

(11) は感嘆文であり、日本語原文の感嘆は「騒ぎ」の「性質」に向けられているのに対し、中国語訳では程度副詞＋動詞（または形容詞的用法）を用いて「動作の程度」¹⁰⁾を表現している。(12)と(13)では、日本語原文が名詞述語（「お得意回りだ」「帰りです」）によって事象を述べているのに対し、中国語は普通の動詞述語（“去…拜访”“正在…回家”）を選択している。

以上の例に見られる日本語の原文は、基本的に出来事の属性を語り、「これはどのような出来事であるか」を叙述するものである。一方、中国語では、出来事の進行を叙述し、「出来事がどのように展開するか」を表現するものである。両者は述べている客観的事実自体は共通している（すなわち、「ひどい騒ぎが起こったこと」「本日の予定がお得意回りであること」「現在帰宅中であること」）が、認知言語学の観点からすれば、表現の違いは、概念化者（conceptualizer）による事態把握のあり方の差異を反映していると考えられる。このような、出来事の種類・性質を叙述する文脈において、日本語では名詞化によって出来事を表現する傾向が見られるのに対し、中国語では、12 例中 11 例において動詞形式の表現が選択されていた。このことから少なくとも、こうした文脈における事態の把握のあり方について、日中それぞれに一定の傾向が存在すると考えられる。

とはいえ、(14) のように、中国語でも名詞述語が使えないわけではない。

- (14) 今いないものを買うのは無駄遣いだ。

买 现在 不需要的东西 是 浪费
 買う 今 いないもの だ 無駄遣い

これは「完全対応」の中で唯一、訳文にも名詞が述語として現れた例である。しかし、この例には特殊性が認められる。(14)の日本語原文は同定文であり、A と B の属性の等同を断定している（3.2.1 における動作の具体的実現に関するコメントや、(11)～(13)の動作内容の叙述とは異なる）。これは、具体的な出来事ではなく、「モノ」としての動作の性質について論じたものである。このような場合では、捉え方の選択肢は存在しない。同定

文自体が「モノ」の同定を意味するため、中国語では自然に名詞的表現が用いられるのである。なお、(14)の中国語訳における名詞化表現の使用は、中国語が名詞化不可能なわけではなく、基本的に必要な箇所でのみ名詞化が用いられることを、側面から裏付けていると言える。

なお、これまで見てきた不对応の例の中には、体系的な説明が難しいものも少なからず存在する。以下にそのいくつかを示す。

- (15) 大したふりではない

雨 下 得 不大

雨 降る “得” 大きくない

- (16) 聴衆の笑いを誘った

逗 得 听众 大笑 起来。

起こさせる “得” 聴衆 大笑いする ～だす

- (17) この成功はまったく彼の働きによる

这次 成功 全 要 仰仗 他。

今度の 成功 まったくすべき 頼る 彼

- (18) 問い合わせの手紙を出す

发出 信件 咨询

出す 手紙 問い合わせる

(15) では原文が「雨の勢い」を断定しているのに対し、訳文では「雨が降っている状況」を動詞中心に表している。(16) は「笑いを引き起こす」という行為自体を述べている原文に比べ、訳文は「観衆に焦点が当たる」形になっている。(17) の「働き」は、訳文では登場すらせず、結果的に「彼のしたこと」という彼の行為ではなく、「彼」という人に視線が向かう。一方、(18) の「問い合わせ」は手紙の内容を限定する役割を持つのに、訳文では「手紙を送る目的」として描かれている。いずれの例も、訳文で焦点が変化している点が特徴的である。(15)から(18)までの例だけではなく、3.2.2 の例にも類似の現象が見られる。(7) は原文が「出来事自体がどうなったか」を述べているのに対し、訳文では「省略された主語が事象を引き起こした」という描写に置き換わっている。(8) は原文が「多くの出来事が発生した」ことを強調しているが、訳文では「その出来事を起こした人物」を前面に立てている。これらは、日中で焦点化する対象が異なることを示唆する事例と言える。

3.3 対応関係から見る両言語の事態把握の特徴

名詞化に関わる概念の物象化 (conceptual reification, Langacker 1999) は、カテゴリ化という認知能力の一形態であり、このすべての人間に共通する認知能力によって、日中両言語において名詞化表現が可能となっていると考えられる。この点は、本稿における

観察結果とも一致しているが、一方で、日中両言語における表現が常に完全に対応するわけではないことも観察された。このことは、両言語の使用者がこの認知能力の使い方に違いがあることを示唆していると考えられる。中国語にも名詞で訳される例はあるものの、それらは日本語のコト連用形名詞のように、日常的に広く使われているとはいいがたい。高(2008)は、『現代汉语词典』において、一部の語が中国語コーパスで主語や目的語などの要素として用いられる頻度が、述語として用いられる頻度を上回るにもかかわらず、なお名詞としてのみ標記されていると指摘している。これは、中国語において主語や目的語などの位置に現れる「動詞」が、慣習的には名詞とは見なされていないことを示唆する。一方、日本語では、多くのコト連用形名詞が辞書において独立した見出し語として掲載されている。このような慣習の違いは、日本語に比べて中国語の名詞化の使用が比較的少ないことを反映しているとも考えられる。

また、多数の不对応例から見てくるのは、両言語の話者がコトを捉える際の焦点化の違いである。本稿の分析では、特に「動作の評価」に関して、対応例がある程度存在する一方で、不对応例の方が多いことがわかった。たとえ名詞化の心理的合理性があったとしても、中国語は依然として「コトの参加者や結果」に焦点を当てる連続走査を選好し、日本語原文のように「コトそのものがどう変化したか」をまとめて描写する形（概要走査）を取らないケースが多いのである。

この傾向は、池上(1981)が論じたナル型言語とスル型言語の違いとも軌を一にする。ナル型言語はコト全体を一括して扱い、スル型言語はコトの要素や主体の動きに注目する。名詞化と動詞化を認知的観点から捉え直すと、動詞はコトの諸要素を連続的に描写するのに向いており、名詞化はコトを1つのまとまりとして扱う。このため、ある言語における名詞化の積極的な使用は、その言語がナル型言語的な特徴を持つことの一端と考えられる。

実際、日本語では多くのコト連用形名詞が既に慣用化され、文章中で頻繁に用いられている。この点は、ナル型言語としての特性が明確に示されているといえよう。一方、中国語は、少なくとも、動作や出来事の主体・客体・結果など、コトを構成する要素に焦点を当てやすく、動詞を中心とした表現が圧倒的に多いことから判断するかぎり、スル型言語としての傾向が強いと考えられる。

おわりに

本稿では、連用形名詞を中心に日本語と中国語の対応関係を検討し、形式面および意味面の違いを指摘するとともに、認知言語学の観点からそれらの差異が生じる要因について説明した。対照分析の結果、日本語で「コト」を表す連用形名詞が、中国語では必ずしも同様に名詞として対応せず、一部には名詞化表現で対応する例もあるが、全体としては非対応の例が顕著に多いことが明らかになった。

Langacker の語彙カテゴリーと名詞化の定義に着目すると、両言語の間に走査の好みの

違いがあると推測される。日本語は概要走査を比較的積極的に用い、コト全体をひとまとまりの概念として捉えやすいのに対し、中国語では、必要な場合にのみ名詞化を行い、通常は連続走査によって事態の進行や結果を重視する傾向が強い。これは、従来の研究が示唆してきたように、日本語が中国語や英語に比べて「コト全体」に視点を置いて事態を把握する、いわゆるナル型言語的な特徴を持つことと一致する。

もっとも、ここで示したのはあくまで大まかな傾向にすぎず、厳密な境界づけを行うものではない。実際には、より多様な表現が可能であり、文脈や話者の意図、翻訳の工夫次第では、日中それぞれで名詞化表現が用いられる場合も考えられる。しかし、「ある表現が使える」という事実は、その言語で頻繁に使われることを必ずしも意味しない。複数の選択肢がある場面で、どの表現が主流となるかを観察することで、当該言語における典型的な事態把握のパターンを把握できると言えよう。本稿では、辞書から無作為にサンプルを抽出し、一般的な対応傾向を把握することを目指したが、実際の会話や文章を含む大規模翻訳コーパスを用いた分析には踏み込めなかった。したがって、本稿は初期的な観察にとどまる。

今後は、より豊富な日中対訳コーパスや実際の使用場面を収集し、名詞化と動詞化の使用頻度やその背後にある認知的動機を定量的・定性的に検証する必要がある。これにより、両言語のコト捉え方の詳細なメカニズムがさらに解明されることが期待される。

注

- 1) 小学館（2017）『日中・中日辞典』第三版による。
- 2) 主要な論争点は、品詞の判断に関するものである。中国語には形態的变化がないため、同一形式が体言と用言の両方として使用されることがよくある。したがって、そのように使用される語の品詞の判断には異なる見解が生じており、その議論は主に体言用法（主に名詞的な使い方、例えば主語・目的語での使用を指す）が一時的な用法であるのか、それとも語自体が本来持っている属性であるのかに集中している。詳細は、呂（1979）、朱（1983、1985）、林（1982）、張（1991）、陸（1994）等を参照されたい。
- 3) 認知言語学においては形式のレベルには本質的な違いがないと考えるため、動詞から動詞句に至るまで、すべての述語的表現 (processual predication) がこのカテゴリーに含まれる。
- 4) 西尾（1961）の研究では、「干し草」「届け先」などを含め、連用形を含む名詞を全て扱うが、このような名詞は本稿の中心である「コト名詞」には該当しないため、考察の対象外とする。
- 5) 内項は、主に他動詞の目的語や非対格の主語に相当するものである。それ以外のものは、付加詞とされている。
- 6) 沈（2013）によれば、ガ格、ヲ格などの格に立つことができる表現は、自立性が最も高い。
- 7) ここで述べているのは、動詞文の成立が参与要素への依存性に関係し、その性質が名詞化にも引き継がれること、また、名詞化における側面の取り立てが名詞化自体によるものではない

いという点に限られる。それ以外にも動詞文の成立に影響を及ぼし得る要因の存在を否定するものではない。

- 8) これは、独立した意味に達しておらず、一般的にはある意味の下位分類である「準語義」である。ここでの「動作の具合・加減」などは、「動作」という意味の側面と見なすことができる。詳細はCruse (2004、2006) を参照されたい。
- 9) 中国語において、「名詞化」という用語の使用をめぐる論争がある。例えば、朱 (1983) は、主語や目的語に現れる動詞は名詞化とは呼べないとし、「動詞本来の性質である」と解釈している。なお、中国語の場合、「名詞化」は統語的概念を指し、「名物化」は語義的概念を指すという使い分けがある (胡・范 1994)。本稿では、認知言語学的観点から問題点を検討するため、このような現象を一括して「名詞化」と呼ぶことにする。
- 10) ここでの「闹」は形容詞と見なされることが一般的である。しかし、述語として使われる中国語の形容詞も、動詞として扱われることもある (王 2001)。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論 (日本語叢書)』大修館書店。
- 上原聡 (2010) 「名詞化と名詞性」『日本語学』(29)、24-38 頁。
- 岡村正章 (1995) 「「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」『上智大学国文学論集』(28)、73-89 頁。
- 影山太郎 (1999) 「日英語の名詞化と有界性」『人文論究』(49)、105-119 頁。
- 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』(118)、1-83 頁。
- 沈晨 (2013) 「日本語連用形名詞の自立性の段階について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』151-158 頁。
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房。
- 杉岡洋子 (2002) 「複数のレベルにまたがる語形成」伊藤たかね・杉岡洋子編『語の仕組みと語形成』研究社、69-145 頁。
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』(43)、60-81 頁。
- 葉秉杰 (2012) 「用法基盤モデルによる[[X]動詞連用形]複合語の生産性に関する考察-付加詞複合語と解釈されるものを例に-」『日本文法』(2)、145-161 頁。
- 高航 (2007) 「概念物化与名词化」『解放军外国语学院学报』(30)、14-18 頁。
- 高航 (2008) 「概念物化的心理现实性与认知语法中名词范畴的界定」『外语学刊』(6)、34-38 頁。
- 胡裕树・范晓 (1994) 「动词形容词的“名物化”和“名词化”」『中国语文』(2)、81-85 頁。
- 林立 (1982) 「名词动词兼类和辞典标注词性问题」『辞书研究』(1)、66-72 頁。
- 陆俭明 (1994) 「关于词的兼类问题」『中国语文』(1)、28-34 頁。
- 吕淑湘 (1979) 『汉语语法分析问题』商务印书馆。

- 王冬梅（2001）『现代汉语动名互転的认知研究』中国社会科学院研究生院博士学位论文。
- 张学成（1991）「动词名化和动名词」『语法研究与探索（五）』语文出版社。
- 朱德熙（1983）「自指和转指 汉语名词化标记的“的、者、所、之”的语法功能和语义功能」『方言』（1）、16-31 頁。
- 朱德熙（1985）「关于向心结构的定义」『中国语文』（6）、401-402 頁。
- Cruse, A. (2004) *Meaning in Language* (2nd Edition), Oxford, England: Oxford University Press.
- Cruse, A. (2006) *A Glossary of Semantics and Pragmatics*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. (1987a) “Nouns and Verbs,” *Language* (63), pp. 53-94.
- Langacker, R. (1987b) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1, Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. (1999) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2, Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
- Taylor, J. (2004) *Linguistic Categorization* (3rd edition), Oxford, England: Oxford University Press.

用例出典

- 商務印書館・小学館（2017）『日中・中日辞典』第3版、小学館／北京：商務印書館。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室（2016）『现代汉语词典』第7版、商务印书馆。
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ
- 北京语言大学语料库中心（BCC）语料库
- 本論文は、国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発した NINJAL-LWP for BCCWJ を利用した。

A Study on the Chinese Expressions Corresponding to Japanese *Ren'yōkei* Event Nouns: From the Perspective of Construal

DU, Qinhuan

Abstract

In Japanese, there are *ren'yōkei* nouns (nouns derived from the continuative verb form in Japanese) such as *warai* (“laughing, laughter”) or *tatakai* (“fight, battle”) that express events. These have been referred to as “event nouns” by Kageyama (1999) and “action nouns” by Uehara (2010). While Chinese also has lexical items that express events, it does not always possess noun expressions that directly correspond to these Japanese *ren'yōkei* nouns. For instance, expressions

like *mado-fuki* (“window cleaning”) or *gomi-hiroi* (“trash picking”) must be rendered as verb phrases in Chinese, such as *cā chuānghù* (“to clean the window”) or *jiǎn lājī* (“to pick up trash”). This paper examines the Chinese translations of these Japanese *ren'yōkei* event nouns: found in Japanese-Chinese dictionaries, analyzing the part-of-speech characteristics of the corresponding Chinese expressions. It also explores why Japanese tends to nominalize such events, whereas Chinese tends to express them primarily through verbal constructions. Drawing on Langacker’s (1987a, 1987b, 2008) definitions regarding parts of speech, this study points out that Japanese, due to its reliance on summary scanning, tends to construe events as unified wholes instead of capturing their temporal progression. In contrast, Chinese prefers sequential scanning, and tends to construe events by sequentially processing the elements that constitute their progression.

Keywords : Nominalization, Parts of Speech, Construals, Cognitive Linguistics, Japanese-Chinese Contrast

上代日本語における「とりもつ」の多様性に関する研究

石 澤瑋（北京師範大学大学院生、衢州学院）

要旨

本研究は、奈良時代を中心とする上代日本語における複合動詞「とりもつ」の多様性を解明することを目的とする。国立国語研究所『日本語歴史コーパス(CHJ)』を用いて収集された30例の用例を①意味カテゴリー(物理的保持・受領・摘み取る)、②表記形態(漢字表記・万葉仮名)、③文脈要素(政務・祭祀・自然描写)という基軸で分類する。語構成と意味拡張パターンの観点から、類似している文脈の複合動詞「かたねもつ」「にぎりもつ」「いただきもつ」と対照して、以下の要点を整理した。第一に、「とりもつ」は「とる(V1)＋もつ(V2)」の動詞接続型と漢文訓読型「取以...」の二種類に分類され、前者が多数を占めたが、後者の異なる構造は軽視されていた。第二に、意味体系は「物理的把握」「抽象的獲得」「摘み取る」の三層構造を有し、「現象素」理論によって統合された。第三に、表記の多様性と意味関係は「とる＋もつ」語彙化の初期段階を反映していた。

キーワード： 複合動詞、とりもつ、上代語、取以、現象素

はじめに

「とりもつ」について、『時代別 国語大辞典 上代編』には、二つの意味項目が設定されている。すなわち、①「手に持つ。取り上げて保持する」(物理的保持義)と②「政事を執り行う」(抽象的遂行義)である。また、『日本国語大辞典 第十五巻』には五つの意味項目があるが、上代の用例に限定すると、ほとんど前者と同じである。そのうち、②「政事を執り行う」の意味項目には、『万葉集』から次の二例が挙げられている。

- (1) 食国の事登里毛知(とりもち)て (『万葉集』4008番)
- (2) 大君の任きのまにまに等里毛知(とりもち)て仕ふる国の年の内の事かたねもち
(『万葉集』4116番)

阿部(2011・2015)の研究でもこれら二例が引用され、「政事を行う」を独立した意味項目と認定されている。同氏は、「とりもつ」が「とる」「もつ」とは異なり、「複合動

詞としての独自性」を有すると論証している。一方、青木（2013）は例（2）を分析し、「とりもつ」が「とる＋もつ」の構造を脱却し、「政事を遂行する」という抽象的意味として語彙化したと主張している。

しかし、これら二例を検討すると、後述するように先行研究の解釈には再検討の余地がある。また、同じく君命・政事を後接する「動詞連用形＋動詞」構造には、「とりもつ」の他にも、「戴きもつ」「取以」などの派生形態が確認される。もし「とりもつ」を「政事を行う」という固有の意味項目とするならば、「戴きもつ」「かたねもつ^り」についても同様の解釈が可能となるはずである。しかし、実際には、例（3）（4）の「戴きもつ」は「受け取って保持する」という原義を維持しており、抽象的遂行義への拡張は限定的である。これにより、「政事を行う」は文脈に依存した派生的意味であり、語彙としての固有義とはいえないと考えられる。

（3）家の子と選ひたまひて勅旨戴き持ちて唐の遠き境に遣はされ（『万葉集』894 番）

（4）朝庭の立て賜へる食国の政を戴き持ちて明き浄き心を以て（『続日本紀』巻 17）

（5）大嘗の政事を取り以て供へ奉る（大嘗乃政事乎取以天奉供）らしと念行して
（『続日本紀』巻 26）

特に例（5）の「取以」について、阿部（2011・2015）は「とりもつ」の用例とみなしているが、これは漢文「取以（取って）」の訓読であり、日本語固有の複合動詞とは異なる文法的性質を有する（詳細は 2.2 節参照）。また、「とる」の多義性（把握・獲得・摘み取るなど）が「とりもつ」の意味拡張に与えた影響は、「とりもつ」の理解においても不可欠な要素である。

以上の観点から、本稿では以下の手順で分析を進める。

- ①先行研究の検討を踏まえ、CHJ（日本語歴史コーパス）奈良時代編に収録されている 30 例の用例を定量分析する。
- ②『日本国語大辞典』『時代別 国語大辞典 上代編』の意味分類との整合性を確認する。
- ③同時代の類似動詞（「戴きもつ」「かたねもつ」「取以」）との比較を通じ、「とりもつ」の語構成と意味を解明する。

1. 先行研究と研究方法

1.1 「動詞連用形＋動詞」の構成について

本研究を進めるにあたり、日本語複合動詞の歴史的発展を俯瞰することは不可欠である。「動詞連用形＋動詞（V1＋V2）」構造の複合性は、現代日本語では「複合動詞」として捉えられるが、古代語は形態のみで断定することはできない。この問題を巡って、金田一（1953）は早く、アクセント分布に基づき、古代語の「V1＋V2」が複合語ではないと主張

している。その後、学界では以下の四つの否定的根拠を巡って議論が続いた（青木 2013:217）。

- ①複合語特有のアクセント分布が認められない
- ②連濁（連続助詞）が発生しない
- ③V1 と V2 の間に助詞が介入する例が存在する
- ④V1 と V2 の順序を入れ替えても意味が変わらない例がある

青木（2013）はこれらの観点を逐一検討し、①—④の四点が古代語複合動詞否定論の根拠となり得ないことを論証している。同氏は、古代語を「複合動詞化の萌芽期」と位置づけ、基本的には「（項+V1）（V2）」の動詞句連接構造（例：「花を取り | 持つ」）から、V1 と V2 の「語」としての凝固性が徐々に強まるプロセスを提案した。この変遷は、中世室町時代頃に現代的な複合動詞（例：「取り持つ」）へと転換するとされる（青木 2013:215）。

この見解は、阿部（2015）が整理した三つの先行研究の分岐（①古代語複合動詞否定論、②中古語のみ認める論、③上代語から認める論）を間接的に説明するものである。特に青木（2016:215）は、V1・V2 が共に語彙的意味を保持する複合²⁾、例えば、「取り持つ＝取る＋持つ」を、古代語と現代語の両方に認めることで、時代間の連続性を強調している。この点は、本稿が「とりもつ」を「V1（とる）の多義性+V2（もつ）の結果性」の二層構造と位置付ける根拠となる。

また、複合動詞の語構成には日本語固有の発展だけでなく、外部からの影響が関与している。劉・王（2015）は、漢文の「並列」「手段－結果」構造が日本語複合動詞に与えた影響について注目し、中古以降の和文用例（例：「取り以て奉る」）を漢文訓読の痕跡と解釈している。藤井（2019）はさらに、同義的複合動詞（例：「執持」「取持」）の多くが漢語翻訳に由来すると主張し、古代語「V1+V2」分析には言語接触の観点が不可欠であることを強調している。

1.2 「動詞連用形+動詞」の意味

多くの古代語複合動詞研究は、巨視的に V1・V2 の構成関係や「V1—」「—V2」グループに焦点を当ててきた（例：奥田 1985）。奥田（1985）は、多義語の意味構造を「固有義」と「構文依存義」の二層に区分し、前者は語彙としての固定的意味、後者は文脈に依存した臨時的意味であると主張している。しかし、微視的な語彙分析の不足は、意味把握の不徹底を招く。特に 1.1 節で論じたように、V1 と V2 の「語」としての凝固性は発展途上にあるため、有効な分析手法で V1 と V2 の意味を確認する必要がある。関（1993）は『源氏物語』を対象に、後項が同一動詞の複合動詞（例：「おしもつ」「ひきもつ」）を抽出し、「接頭語化」プロセスの相違（「とり」「かき」など）を明らかにしている。本稿ではこの対比分析による手法を参考とした。

阿部（2011・2015）は、「とり—」の語彙的機能（動詞 vs. 接頭辞）を判定するため、

「とる」の単独使用例と複合例を比較している。同氏は、「とる」の核心的な意味を「外部から内部への移動（手を介した獲得）」と規定し、これが単純動詞と複合動詞間の意味連続性を担保すると論じる。ただし、「とる」自体の多義性（把握・獲得・除去など）を分析対象から除外した点には検討の余地がある。

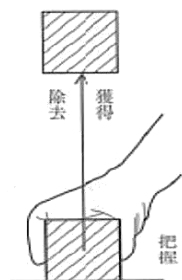


図1 「とる」の現象素（国広 1997:227）

国広（1994）は、多義語の異なる意味が、同一の「現象素（phenomeneme）」³⁾を基盤として派生すると提案している。さらに同氏（1997）は、「とる」の現象素を「置かれた対象を手でつかみ、元の場所から引き離す」と定義し（図1）、「獲得」と「除去」の相反する二義を一つの動作パターンに還元している。この分析は上代語動詞の研究に対し、多義性の体系化と文脈依存性の解明という二重の意義を提示する。具体的には、①上代語「とりもつ」の各例は、「とる」の現象素（引き離し動作）が「もつ」（保持）と組み合わせることで、三つの意味カテゴリー（物理的保持・受領・摘み取る）に分化している可能性がある。したがって、すべての「とりもつ」における「とる」を単に「外部から内部への移動（阿部 2011・2015）」と解釈することは不適切である。②「枝をとる」のような「とる」の意味の曖昧さは、「とる」の現象素と前後の文脈を分析することで、解き明かすことができるという点がわかる。ただし、「とる」の多義性と「とりもつ」の関連性をさらに探求するためには、現象素分析以外の手法も併用する必要がある。この点については、次節において詳述する。

1.3 研究方法と研究資料

1.3.1 研究方法

本稿では、以下の二層による研究方法を展開する。第一に、国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』の奈良時代編（697-794年）から、「とりもつ」の表記形態（取持・執持・万葉仮名など）をキーワードに30例を収集した。収集データは以下の基軸：①意味カテゴリー（物理的保持・受領・摘み取る）、②表記形態（漢字表記・万葉仮名）、③文脈要素（政務・祭祀・自然描写）でそれぞれ分類した。そして、この統計に基づき、先行研究（阿部 2011・青木 2013）の定義との整合性を検証した。特に「とる」の多義性（把握・

獲得・除去)が「とりもつ」に与える影響について対比した。

第二に、類似複合動詞「かたねもつ」「にぎりもつ」「いただきもつ」を抽出し、以下の観点：①語構成（V1の意味特性）、②意味拡張パターン（物理的から抽象的へ）から対照分析を行った。関（1993）の「後項同一動詞比較法」を参考に、「―もつ」系列の複合動詞に共通する「保持」の核心的な意味と、V1による意味分化（「把握する」「摘み取る」など）を明らかにする。

1.3.2 研究資料

本稿は『万葉集』28例、『続日本紀宣命』及び『延喜式祝詞』から各1例、合計30例の「とりもつ」を確認した。また、『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典上代編』によると、『日本書紀』『古事記』『祝詞中臣寿詞』『記神代』『舒明前紀』などにも同語の用例が散見されたが、既存の用例と内容的に有意な差異が認められないため、本研究の対象から除外した。

次に文献学的基盤として用いたテキスト、すなわち小島憲之他（1994-1996）『新編日本古典文学全集 6-9 万葉集（1-4）』、北川和秀（1982）『続日本紀宣命 校本・総索引』、沖森卓也編（1995）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』は、いずれも「とりもつ」に関する語釈分析を欠いている。厳密に言えば、通釈は存在するものの、原語をそのまま転記するケース（「とりもつ」）と、「とる」または「もつ」に置き換えるケースが混在しており、体系的な語彙的解釈は見出されない。よって、個々の語例を踏まえる具体的検討が必要である。

ただし、表記研究においては、上代の言語実態を直接的に示す一次資料が現存せず、写本や注釈書など後世に伝わる資料に頼らざるを得ない。このため、本稿は史料上の制約を免れない。

2. 語構成の二重性

2.1 動詞連接型「とる+もつ」

2.1.1 物理的保持（把握する）

CHJから収集された30例中、「執持」による表記は1例のみ確認された。この唯一の例である例（6）を取り上げる。

（6）山吹の花取り持ちて（執持而）つれもなく離れにし妹を偲ひつるかも

（『万葉集』4184番）

通釈：山吹の花を手にして、さっぱりと離れた貴女を偲んでいる

（小島憲之他 1996:313）

この歌は、大伴家持の妹が坂上大嬢への思慕を詠んだもので、「花を取り持つ」が「思いを馳せる」の随伴する状態を表している。「執持」の表記は、「執」が「手に強く握る」ことを強調し（「執刀」「執筆」）、「取り持つ」よりも物理的把握のニュアンスが濃い。『日本国語大辞典 第十五巻』（小学館 1975）は、「手に握って持つ。身近に保持する」を「とる」の第一の意味項目とし、以下の例（7）を挙げて、「玉箒を手に握り、玉のひもが揺れる」という状態を描写している。

（7）初春の初子の今日の玉箒手に取るからに揺らく玉の緒（『万葉集』4493 番）

「とりもつ」が「手にある状態」を表す用法は 24 例（80%）を占め、以下の文脈で顕著に現れる（表 1）。祭祀儀礼、相思・愛慕のカテゴリでは、例（6）（8）のように、「とりもつ」は主動詞（「偲ぶ」「祈る」「立ち向かう」）の副詞節として機能し、以下の特徴を有する。

①状態性＞過程性

「取る→持つ」の動作連続ではなく、「手にある」という結果状態に焦点を当てる。

②同義的結合

「とる」と「もつ」が並列的に機能し（「把握して保持する」）、語彙化（複数の形態素が結合し、単一の語彙項目として定着すること）の初期段階を反映する（青木 2013）。

表 1 文脈カテゴリによる「とりもつ」の用例

文脈カテゴリ	用例数	特 徴	代表例（『万葉集』から）
祭祀儀礼	4	神事道具の保持（木綿・鏡）	380 番、443 番、904 番、3286 番
相思・愛慕	12	花・植物を手にして感情を表す	210 番、408 番、1792 番、2502 番、2633 番、 3185 番、3778 番、4192 番、4184 番、4192 番、4415 番、4449 番
武装描写	6	武器（弓・剣）の装備状態	199 番（2 例）、230 番、804 番、4094 番、 4257 番
自然観賞	2	花・木の枝の一時的保持	420 番、4184 番

例（6）は先に述べた通り、「執」の字が「手に強く握る」「しっかりと把握する」といった意味合いを強調する。例（8）は、大伴三中将が亡き丈部龍麻呂を弔う挽歌として位置付けられる（参照：小島憲之他 1994：246）。「片手には……」と「片手には……」の二つの部分は構造が似ており、並列の形で両手がそれぞれ行う動作を記述している。この歌は、死者への祈祷を行う巫祝の装束を具象的に描いている。特に注目すべきは、「執る・所持する・祈る」という一連の身体動作が、空間的並置（片手ともう一方の手）によって同時

的狀態へと変容している点である。本歌の文脈では、「取り→持ち→祈る」という時間的連続を強調するよりむしろ、両手による道具の保持状態（左右対称の装束）が、巫祝の神聖な役割を象徴していることが明らかになる。

- (8) 片手には木綿取り持ち 片手には和たへ奉り平けくま幸くませと天地の神を乞ひ
 祷みいかにあらむ（『万葉集』443 番）

次に、武装描写例における「とりもつ」の意味を確認するために、例（9）—（12）の同一文脈下の「握り持つ」「取り佩く」との比較分析を行う。

- (9) 梓弓手に取り持ちて（取持而）ますらをのさつ矢手挟み立ち向かふ
 （『万葉集』230 番）
 (10) 梓弓手に取り持ちて（等里母知弓）劔大刀腰に取り佩き朝守り夕の守りに
 （『万葉集』4094 番）
 (11) 劔大刀腰に取り佩きさつ弓を手握り持ちて（尔伎利物知提）（『万葉集』804 番）
 (12) 皇祖の神の御代よりはじ弓を手握り持たし（尔芸利母多之）（『万葉集』4465 番）

これらの表現はいずれも、兵士などが弓矢を手にして戦闘態勢に備える様子を描写するものである。この点から、「とりもつ」が「握り持つ」「取り佩く」と同様の意味を有することが明らかとなる。なぜなら、意味上の差異はあるものの、「握り持つ」「取り佩く」は、その表現内容から明確に「手にある」という意味合いを含んでおり、これにより「とりもつ」も同様に「手にある」という意味を有することが間接的に裏付けられるからである。また、例（13）のように、修飾構造となっている特殊な例もある。これは「取り持てる」が連体修飾語として用いられ、状態性を強調している。なお、小島憲之他（1995:93）は、「鏡を手に取り持つ」を「神事の儀礼の一環」と注釈している。

- (13) 娘子らが手に取り持てる（取持有）まそ鏡。二上山に木の（『万葉集』4192 番）

2.1.2 連続動作（獲得する）

本節では、「とりもつ」が「取る」と「持つ」という連続動作（獲得過程）を表す場合について分析する。（14）（15）の用例を通じて、対象物を手に入れ保持する一連の行為を検討する。

- (14) 大君の命恐み 食す国の事取り持ちて（登理毛知弓） 若草の足結たづくり 群鳥の
 朝立ち去なば 後れたる我や悲しき（『万葉集』4008 番）
 (15) 大君の任きのまにまに取り持ちて（等里毛知） 仕ふる国の年の内の事かたね持ち

玉梓の道に出で立ち 岩根踏み 山越え 野行き 都辺に参みし 我が背をあらたま
 の年行き反り 月重ね 見ぬ日さまねみ 恋ふるそら安くしあらねば
 （『万葉集』4116 番）

まず、両歌の創作背景を確認する。例（14）は伴池主作とされ、題詞に「忽見入京述懷之作生別悲」と記されており、大君の命を受けて「食す国」の政務を引き受け（登理毛知互）、入京して報告する過程を背景としている。例（15）は伴家持作で、題詞「國掾久米朝臣廣繩以天平廿年附朝集使入京」からは「入京」の要素が確認され、大君の任命を受けて（等里毛知）、「仕ふる国」の年次政務を整理して報告に旅立つ経緯が読み取れる。両歌とも「若草の足結たづくり」「玉梓の道に出で立ち」などの表現により、政務執行に伴う旅の苦労と離別の悲しみが強調されており、これらの文脈から「取り持つ」の語義解釈が規定される。

次に、「取り持つ」の語義分析に移る。両歌の「大君の命恐み 食す国の事取り持ちて」「大君の任きのまにまに取り持ちて」は、直接的な「政事執行」を表すのではなく、『日本国語大辞典 第十五巻』第二意味項目「自分の物になるように、また、自分の物として持つてするようにする」と合致する。この第二意味項目は、「とる」の「獲得・受領」という原義を継承したものであり、後続の「もつ」との連用により、「受け取り保持する」という複合的な動詞の意味形成がなされている。

この解釈を裏付ける事例として、（16）（17）の用例を挙げる。

（16）家の子と選ひたまひて勅旨戴き持ちて唐の遠き境に遣はされ（『万葉集』894 番）

（17）朝庭の立て賜へる食国の政を戴き持ちて明き浄き心を以て（『続日本紀』巻 17）

例（16）の「勅旨戴き持ち」は「勅命を受け保持する」、例（17）の「食国の政を戴き持ち」は「政務を受領し保持する」と解釈され、「戴く（いただく）」と「持つ」の連用が「受け取り保持」という語義構造で共通している。

したがって、（14）（15）の「とりもつ」は、希薄化した接頭辞的用法ではなく、「受け取り保持する」という原義的な動詞連用として捉えるのが自然である。具体的には、（14）では「大君の命で食す国の事を受け取り保持し」と、（15）では「大君の任を受け取り保持して年次政務を」と解釈される。これにより、目的語（政務）との関連から「政事を行う」という派生的な意味が生じている。このように、「とる（受領）＋もつ（保持）」の二動詞連用構造は、古代日本語における動作の継起・完了を表す典型的な派生パターンに該当する。

以上の分析から、2 例の「とりもつ」は、「受け取り保持する」という原義的な動詞連用として捉えるのが妥当であり、この解釈は同時代の「戴き持つ」という類似構造の用例

分析とも整合性を持つ。これにより、「取り持つ」の語義史研究において、平安時代以降の「幹旋・世話」という派生義とは異なる、律令官人の政務執行に特化した用法が確認される。

2.1.3 連続動作（摘み取る）

30 例の分析を通じて、「とる」の「除去する」という原義を明示的に継承した例は確認されない。しかし、「把握する」や「獲得する」とは次元の異なる語義パターンが (18) (19) に見出される。以下、個々の用例を詳細に検討する。

(18) 春の日に萌れる柳を取り持ちて（取持而）見れば都の大路し思ほゆ
（『万葉集』4142 番）

(19) 梅の花取り持ちて（取持而）見れば我がやどの柳の眉し思ほゆるかも
（『万葉集』1853 番）

例 (18) は一見、2.1.1 節で示した表 1 の用例と同様の「手にする→感慨」の構文を踏襲しているようだが、「萌れる柳」という修飾関係から、対象は生きた樹木に属する「柳の枝」であることが推察される。具体的にいえば、「取り持つ」は「柳の木（起点）→柳の枝（分離対象）→手（保持）」という空間的移動を含む二動詞の連用であるということである。後続の「見れば」は、「摘み取り（とる）→保持（もつ）→鑑賞（見る）」という動作系列を強調し、特に「分離（摘み取る）」の過程は、抽象的な受領と区別される。これにより、「取り持つ」は「物理的に分離して保持する」という具象的な意味構造を獲得している。

例 (19) は題詞から「梅の花」を媒介とした柳への連想が確認されるが、構文上は (18) と同一の「分離+保持+視認」の三階層構造を備えている。すなわち、梅の木から花を摘む（「とる」の「除去・分離」義）こと、摘んだ花を手にする（「もつ」の「保持」義）こと、そして保持した花を見て柳を連想する（季節的類比）ことである。なお、「柳」「梅」は共に季節の象徴であり、この種の自然物を「摘み取り保持する」行為は、古代歌人の「物のあはれ」観を反映する典型的表現である。

類義例には、(20) — (22) の「折り持つ」がある。「折り持つ」は「取り持つ」と同じく「分離+保持」の二動詞連用であるが、分離手段が「折る」である点で相違する。

(20) 冬ごもり春咲く花を手折り持ち（手折以）千度の限り恋ひ渡るかも
（『万葉集』1891 番）

(21) 故郷の初もみち葉を手折り持ち（手折以）今日そ我が来し見ぬ人のため
（『万葉集』2216 番）

(22) 「秋萩を散り過ぎぬべみ手折り持ち（手折持）見れども」（『万葉集』2290 番）

これらの例で共通するのは、目的語が「花・葉・萩」といった分離可能な自然物であること、「分離＋保持」という動作の継起構造で、分離・保持行為が感情表現（恋・郷愁・物の哀れ）の契機となること、そして「取り持つ」と「折り持つ」はいずれも「対象を起源から切り離して保持する」という上位の意味パターンを共有しつつ、分離の態様によって下位分類が可能であることの三点である。一方、2.1.1 節の把握義との最大の相違点は、摘み取り（分離）の動作を強調することに加え、摘み取りの起点（木）を暗黙的に含む点にある。よって、絶対的に区分することはできない。

2.2 漢文訓読型「取以…」の構文分析

2.2.1 『続日本紀』用例の解析

本節ではまず、阿部（2015:29）が「とりもつ」の用例とみなした『続日本紀』巻26の例文を再検討する。原文は図2に示す通り表記形態を呈している。

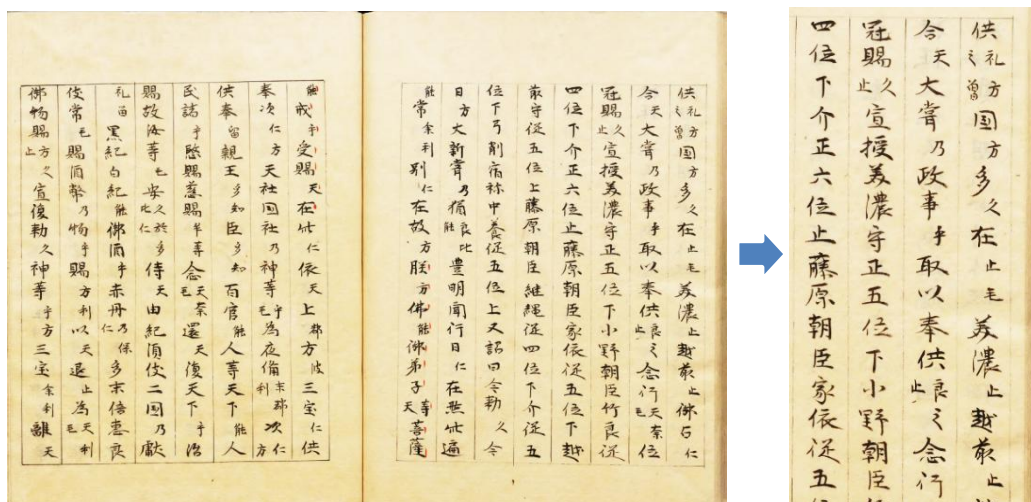


図2 『続日本紀』における「取以」（CHJにリンク付きの画像）

(22) 朝廷の護りとして関に供へ奉ればこそ、国は多く在れども美濃と越前と御占に合ひて、大嘗の政事を取り以て供へ奉る（大嘗乃政事乎取以⁴⁾奉供）らしと念行して、なも位冠賜はくと宣りたまふ（『続日本紀』巻26）

通釈：朝廷の防護として関所に供え奉るなら、国は多くあれども美濃と越前を占い合わせ、大嘗の政事を取って供え奉るべきだと念じ、位冠を賜ると宣えられた（筆者訳）

阿部（2015）は例（23）の「取以」を「とりもつ」の同義語とし、「政事を行う」と解

積するが、これには以下の矛盾点がある。

①文法構造の相違

「とりもつ」：複合動詞（「取る＋持つ」）→目的語の直後に続く（例：「政事を取り持つ」）。

「取以」：連動構文（「取る＋以て（接続詞）」）→目的語を挟んで「取る」「奉る」が分離している（例：「政事を取り、以て奉る」）。

②意味の整合性

「供へ奉る」の二重出現：前文の「関に供へ奉れば」と後文の「政事を取り以て供へ奉る」は、同一述語（供え奉る）の反復であり、「取以」が副詞節（「取って」）として機能している。

2.2.2 構文原型：中国古典漢文訓読

『論衡』『左伝』などの中国古典5例（表2）を分析した結果、「取以」は以下の特徴を共有していることが分かる。①構造の共通性：「取る」（獲得）＋「以」（接続詞「て」）→目的語は前文に省略されている（例：「雷取〔龍〕以升天」）。②文法化の段階：「以」はもはや動詞ではなく、接続詞として機能し、「取以」は「取って」という副詞節へと転化している。

表2 漢文の「取以…」の用例

	出典	原文	漢文訓読	通釈
24	論衡・上：425	龍見、雷取以升天	龍の見（あら）はるるや、雷取りて以て天に升ると	龍が出てくると、雷は連れて天に昇るのだと。
25	春秋左氏伝・二：730	（子反欲取夏姫、巫臣止之）遂取以行	遂に取（めと）りて以て行（さ）る	やがては巫臣自身が妻にして晋に逃げのがれた。
26	国語・下：719	毛以示物、血以告殺、接誠拔取以献具	毛を以て物を示し、血は以て殺すを告げ、誠を接し拔取して以て具を献じて	いけにえの毛はその色を示し、血は正しく殺したことを告げ、誠を神に捧げ、毛を抜き血を取って純潔完備のいけにえを献じて
27	世説新語・中：426	（謝公聞羊綏佳、致意令來、終不肯詣。後綏為太學博士）因事見謝公、公即取以為主簿	事に因つて謝公に見（まみ）ゆ。公即ち取りて以て主簿と為す。	なにかの折に用があつて謝公に会うと、謝公はすぐさま彼を主簿にとりたてた。
28	『淮南子・下』1034	孟孫怒逐秦西巴、居一年、取以為子傳	孟孫怒りて秦西巴を逐（お）ふ。居ること一年、取りて以て子の傳と為す。	孟孫は〔その時は〕怒って秦西巴を追放したが、一年の後、取り立ててわが子の家庭教師とした。

2.2.3 「取り以て」と「とりもつ」

例（23）を改めて検討すると、この文脈における「取り以て（とりもって）」と「とりもつ」は、ともに「取る」を語幹に含むが、文法的性質と機能が異なる別の表現である。

「取り以て」は動詞「取る」の連用形「取り」に格助詞「以て（もって）」が付接した形式で、「大嘗の政事を手段として」という手段・方法の修飾句を形成し、後続の「供へ奉る」の動作の遂行方法を明示する。一方、「取り持つ」は「取る＋持つ」から成る複合動詞で、具体的な「把握・獲得」行為や比喩的な「政務処理」を表す独立した述語として機能する。両者は形態的類似性を持つものの、前者が助詞付接による連動構文であるのに対し、後者は動詞表現である。なお、今後の課題として、『続日本紀』をはじめとする文献史料における「以て」の前接用法を分析するが、本稿ではこれ以上の展開を行わない。

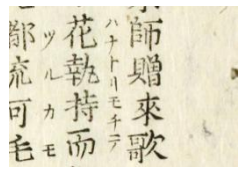

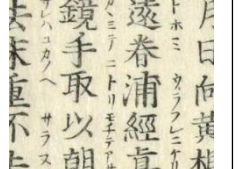
以上、「取以...」は漢文連動構文の訓読例であり、日本語固有の複合動詞「とりもつ」とは異なる。構造の区別は、連動構文（漢文）と複合動詞（和文）にある。意味的には、「取って奉る」（手段・目的）と「取って持つ」（動作・結果）という差異がある。

3. 漢字表記の体系化分析

上代文献における「とりもつ」の漢字表記は、以下の四種類に分類される（表3）。分析には国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』のテキスト（小島憲之他 1994-1996、北川 1982、沖森 1995）を用いた。

漢字表記について、「取持」の分布特徴は和歌（18 例）、祝詞（1 例）に集中し、文脈

表3 「とりもつ」の表記分布（29 例）

寛永二十年（1643）本『万葉集』にある四種の表記					
					
表記カテゴリ	具体的表記	用例数	割合	代表出典	意味カテゴリ
漢字表記	取持	20	66.6%	『万葉集』（19 例） 『延喜式祝詞』（1 例）	物理的把握（18 例） 摘取連鎖（2 例）
	執持	1	3.3%	『万葉集』	物理的把握
	取以	1	6.7%	『万葉集』（1 例）	物理的把握（1 例）
万葉仮名	登利毛知・等 里母知など	7	23.3%	『万葉集』	物理的把握（5 例） 抽象的獲得（2 例）

の種類としては祭祀（4例）・相思（9例）・自然描写（4例）に多用される。意味関連は、物理的把握義（「手にある状態」）で、『万葉集』380番「木綿取持而祈ひなむ」のような17例がある。それ以外の2例は『万葉集』4142番「柳を取持而…」のように、「摘み取って保持」することを表す。語彙化指標から言えば、最も固定化した表記であり、「取り持ち」「取りもつ」の活用形が確認される（19例中17例が連用形）。

次に「執持」は一例のみであった。すなわち、『万葉集』4184番「執持而」で、これは以下の特徴を有する。①表記の特殊性：「執」は「手に強く握る」を表す漢字（例：「執刀」「執筆」）で、把握するという意味が確認される。②文脈の適用：貴女への思慕歌で、「花を執持した状態」が感情の象徴として機能している。

第三に、「取以」の2例は、『続日本紀』の例は漢文訓読型（「取って」）で、連動構文である。『万葉集』の例は和文固有型（「取り持つ」）で、物理的把握義である。

万葉仮名表記は、「登利毛知」「等里母知」など7例がある。これは字義を無視し、「トリモチ」の音節を表す表記である。5例は物理的把握義で、2例は抽象的獲得義である。

表記から見ると、現代語の「取り持つ」と比べて形態が多様であり、語彙化途上の証左となる。意味との関係については、表4のように統計したところ、①漢字表記「取持」「執持」は物理的把握義に集中している（94.7%）。②万葉仮名は抽象的獲得義のみを含む（2例）ことが確認された。今後は、表音表記が意味拡張を許容するのかという点について、他の複合動詞との比較分析を行い、検証する予定である。

表4 「とりもつ」の表記と意味（29例）

表記カテゴリー	物理的把握	抽象的獲得	摘み取る	合計
取持	18	0	2	20
執持	1	0	0	1
取以	1	0	0	1
万葉仮名	5	2	0	7
合計	25 (86.2%)	2 (6.9%)	2 (6.9%)	29

おわりに

本研究は、奈良時代を中心とする上代日本語における複合動詞「とりもつ」の多様性を、国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』の30例を基に分析した。その成果は以下の通りである。

①語構成の二層性：「とる＋もつ」の動詞連接型（29例）と漢文訓読型「取以…」（1例）に分類され、前者が圧倒的多数を占めた。動詞連接型は「とる」の多義性（把握・獲得・摘み取り）に基づき、「把握」（25例）、「抽象的獲得」（2例）、「摘み取る」（2例）の三層構造を形成していた。

②表記の多様性：「取持」（63.3%）が最も固定化しており、万葉仮名（23.3%）は語彙化途上の状態を反映していた。「執持」「取以」は特殊例で、表記が意味を限定する傾向を示している。

③漢文訓読の影響：1例のみであった「取以…」は日本語固有の複合動詞とは異なる連動構造であり、語彙化には至らなかった。

本研究は以下の諸点で先行研究を補充した。意味体系の再構築において、阿部（2011）が提示した「政事義」を「抽象的獲得」として再定位し、「とる」の多義性が「もつ」との関係性を規定するメカニズムを明らかにした。また語構成の明確化において、青木（2013）の「萌芽期」説を定量的に裏付け、「取持」の凝固度と万葉仮名の曖昧性を語彙化段階の指標として提案した。さらに漢文訓読の面から阿部（2015）の「取以＝とりもつ」説を修正した。今後は、引き続き系列動詞と複合動詞との比較研究を進めることで、より詳細に複合動詞の歴史を解明していきたい。

注

- 1) 「かたねもつ」について、阿部（2011：11）、阿部（2015：29）は言及しているが、研究対象とはしていない。その理由は「ほかの類例のない動詞接続であることから、「持つ」の単独例からは除外する（2011：11）」ということである。「持つ（かたね持つ）」は「事」を目的語としているが、そのような例はこの1例のみである。抽象的な事柄を対象として取りうるという特徴は、動詞接続「トリ持つ」においてより顕著であると言えよう（2015：29）。
- 2) 青木（2016：215）は現代語の「恋い慕う」「焼け死ぬ」「転げ落ちる」「切り倒す」、上代語の「洗ひ濯ぐ」「思ひ死ぬ」「騒き泣く」「焼き滅ぼす」を例示している。
- 3) 国広（1994）は、ある同一の現象に基づく認知的多義性が認められる場合、一つの語が複数の意義素を持ち得ると指摘し、この基盤となる現象を「現象素（phenomeneme）」と命名した。ただし、現象素の本格的な定義は、国広（1995：40）において初めて「五感で直接捉えられる外界の物体・動作・属性など、ある語が指示する対象」として明確化された。
- 4) 「て」の音仮名。図2未記載。CHJ テキスト（サンプルIDと開始位置：10-宣命 0797_26037、760）参照。

参考文献

- 青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」（影山太郎『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房）、215-241 頁。
- 青木博史（2016）『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房。
- 阿部裕（2011）「上代日本語の動詞接続『トリー』について—複合動詞の存否を中心に」『Nagoya Linguistics』（5）、1-14 頁。
- 阿部裕（2015）『古代日本語における動詞接続の研究』名古屋大学博士学位論文。

- 奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房。
- 金田一春彦（1953）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（金田一博士古稀記念論文集刊行会『言語民俗論叢 金田一博士古稀記念』三省堂）、329-354 頁。
- 国広哲弥（1994）「認知的多議論—現象素の提案」『言語研究』（106）、22-44 頁。
- 国広哲弥（1995）「語彙論と辞書学」『言語』24(6)、38-45 頁。
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店。
- 関一雄（1993）『平安時代和文語の研究』笠間書院。
- 藤井俊博（2019）「『源氏物語』の翻読語と文体—連文による複合動詞を通して」『同志社国文学』（91）、1-14 頁。
- 劉洪岩・王燦娟（2015）「漢文訓読における複合動詞の語構成および和文への影響」『芸術工学研究』（22）、11-23 頁。
- 国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス（CHJ）』（中納言 2.7.2 データバージョン 2024.3）。
- 上代語辞典編集委員会（2001）『時代別 国語大辞典 上代編』三省堂。
- 日本大辞典刊行会（1975）『日本国語大辞典 第十五巻』小学館。
- 日本大辞典刊行会（1976）『日本国語大辞典 第十九巻』小学館。
- 小島憲之・木下正俊・東野治之（1994）『日本古典文学全集 6・萬葉集（1）』小学館。
- 小島憲之・木下正俊・東野治之（1995）『日本古典文学全集 7・萬葉集（2）』小学館。
- 小島憲之・木下正俊・東野治之（1995）『日本古典文学全集 8・萬葉集（3）』小学館。
- 小島憲之・木下正俊・東野治之（1996）『日本古典文学全集 9・萬葉集（4）』小学館。
- 北川和秀（1982）『続日本紀宣命校本・総索引』吉川弘文館。
- 沖森卓也（1995）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院。
- 目加田誠（1976）『新釈漢文大系 77 世説新語 中』明治書院。
- 大野峻（1978）『新釈漢文大系 67 国語 下』明治書院。
- 鎌田正（1974）『新釈漢文大系 31 春秋左氏伝 二』明治書院。
- 楠山春樹（1988）『新釈漢文大系 62 淮南子 下』明治書院。
- 山田勝美（1976）『新釈漢文大系 68 論衡 上』明治書院。

A Study on the Diversity of *tori-motsu* in Old Japanese

SHI, Zewei

Abstract

This study aims to clarify the diversity of the compound verb *tori-motsu* in Old Japanese, focusing on the Nara period. Using the Historical Corpus of Japanese (CHJ) by the National

Institute for Japanese Language and Linguistics, 30 examples were collected and classified according to three key criteria: (1) meaning categories (physical holding, receipt, and picking), (2) orthographic forms (kanji and man'yōgana), and (3) contextual elements (administrative affairs, rituals, and natural descriptions). From the perspective of word composition and meaning extension patterns, a comparison with similar compound verbs like *katane-motsu*, *nigiri-motsu* and *itadaki-motsu* revealed the following key points. First, *tori-motsu* is classified into two types: the verb combination “*toru* (V1) + *motsu* (V2)” and the Classical Chinese-style reading “*qu* (取) *yi* (以) ...”. The former was more prevalent, but the latter's different structure had been somewhat neglected. Second, the meaning system had a three-tiered structure: physical grasp, abstract acquisition and picking, which were unified by the *phenomeneme* (現象素) theory. Third, the diversity of orthography and meaning relationships reflected the early stages of the lexicalization of “*toru + motsu*”.

Keywords : compound verbs, *tori-motsu*, Old Japanese, “*qu* (取) *yi* (以) ...”, *phenomeneme* (現象素) theory

中国人・韓国人学習者による日本語破裂音の音響的特徴に関する 対照研究

—語頭破裂音音節のF0を中心に—

黄 少安（国立全北大学大学院生）

要旨

本研究では、日本語語頭破裂音音節のF0（Fundamental Frequency、基本周波数）に着目し、日本人アナウンサーの発音を基準として、中国人学習者と韓国人学習者が日本語語頭破裂音を習得する際の特徴を対照分析した。結果として、中国人学習者の日本語語頭破裂音のF0は、日本人アナウンサーよりも全体的に高い傾向がある。一方、韓国人学習者のF0は、アクセントが頭高型㊦の破裂音では日本人アナウンサーと概ね近い値を示すが、非頭高型㊧の破裂音では、日本人アナウンサーよりも高い傾向が見られる。また、中国人学習者のF0は、日本人アナウンサーや韓国人学習者に比べて分布が集中しており、日本語語頭破裂音の発音時に音高が比較的安定しているのに対し、韓国人学習者のF0は、中国人学習者や日本人アナウンサーに比べて分散が大きく、日本語語頭破裂音の発音時に音高のばらつきが大きいことが示唆される。最後に、中国人学習者と韓国人学習者のF0における最も顕著な差異は、F0（ピッチの高さ）に影響を与える要因の違いである。具体的には、中国人学習者の日本語語頭破裂音のF0は、調音方法の影響を受けることなく、主にアクセント型の影響を受けるのに対し、韓国人学習者の日本語語頭破裂音のF0は、アクセント型の影響をあまり受けず、調音方法の違い（清音・濁音）によって主に変化することが明らかになった。

キーワード： 日本語破裂音、音声教育、中国人学習者、韓国人学習者、F0

はじめに

現代メディアの発展に伴い、国際的な交流と文化の伝播がますます密接になり、それに伴い外国語放送・司会者の人材需要が増加している。中国の場合、2023年10月25日、中国伝媒大学は「第1回グローバルユースバイリンガルアナウンサーコンテスト」を開催し、2024年には第2回を実施した。また、2024年9月からは中国初となる中日バイリンガルのアナウンス・司会専攻の大学生第1期生の募集を開始した。一方、韓国の大学における状況として、全羅道地域の大学におけるカリキュラムを調査したところ、全北大学（전북대）

では「日本語発音の理解（일본어발음의이해）」、順天大学（순천대）では「日本語音声練習（일본어음성연습）」、圓光大学（원광대）では「日本語音声指導方法と評価（일본어음성지도방법과평가）」といった科目が設置されていることが確認された。また、韓国における学齢人口の減少に伴い、韓国の大学の外国人留学生の受け入れが拡大し、韓国大学の日本語学科に入学する中国人留学生も増加傾向にある。現在、韓国において、韓国人と中国人が同じ教室で日本語を学ぶ状況が生まれつつあり、今後さらに増加すると考えられる。このような背景の下、中国人および韓国人日本語学習者の発音を対照的に研究することは、日本語の発音指導の改善に資するだけでなく、音声に関わる専門職人材の育成にも重要な意義を持つと思われる。

特に、日本語・中国語・韓国語の破裂音にはそれぞれ固有の特徴があり、日本語破裂音の習得は、中国語母語話者（以下は中国人学習者）と韓国語母語話者（以下は韓国人学習者）にとって重要かつ難しい課題の一つである。具体的には、日本語の破裂音には有声・無声の区別があるが、これは中国語の破裂音や韓国語の語頭破裂音には見られない。また、中国語と韓国語の破裂音には有気・無気の区別があるが、これは日本語には存在しない。さらに、韓国語には弱帯気（平音）・強帯気（激音）・緊張音（濃音）の対立があり、これは日本語と中国語の破裂音には見られない。以上のような有声・無声、および有気・無気の区別は広く知られ、これまで多くの研究が行われてきた。しかし、日本語・中国語・韓国語の破裂音には、もう一つそれぞれ独自の特徴が存在する。それは、破裂音を含む音節のピッチである。日本語の語頭破裂音に比べ、中国語・韓国語の語頭破裂音では、異なる種類の破裂音のF0¹⁾の差がより大きい(黄少安, 2024)。中国語語頭破裂音音節のピッチ(すなわち破裂音後続母音のF0)は主に中国語の声調類型(中国語の四声)の影響を受けるのに対し、韓国語語頭破裂音音節のピッチは主に韓国語破裂音の調音方法(すなわち平音・激音・濃音のいずれか)によって異なることが明らかになっている(Huang, 2024)。このような母語における異なる特徴は、中国人学習者及び韓国人学習者が日本語の破裂音を習得する際に何らかの影響を与えると考えられる。では、具体的にどのような影響が生じるのか。中国人学習者と韓国人学習者の日本語破裂音のピッチには、どのような特徴と相違が見られるのか。本研究は、これらの点を明らかにすることを目的とする。本研究の成果は、清濁やアクセント型によるF0の違いや母語による影響の傾向を明らかにした点において、中国人学習者および韓国人学習者それぞれに適した、日本語破裂音音節におけるF0の調整・再現に重点を置いた発音指導法の発展に寄与すると考えられる。

1. 先行研究

F0 (Fundamental Frequency、基本周波数) とは、音声の基本的な周期振動の頻度を指す概念である。具体的には、声帯振動によって生成される音波の1秒間あたりの振動回数(ヘルツ単位)を表す値である。F0は音の高さ(ピッチ)と密接に関連しており、声道の構造

や話者の発声方法によって異なる値を示す。破裂音音節の F0 に関する研究は韓国語の破裂音においてよく研究され、韓国語破裂音の F0 に関して、ソウル方言と済州方言の両方とも「平音<濃音<激音」であり、ソウル方言の場合、激音と濃音との差異がそれほど大きくないという結論がある (T.Cho, 2002)。中国語と日本語の破裂音の F0 に関する研究はまだ少ないが、Huang (2024) では、中国語と日本語の語頭破裂音の F0 に対し、統計学分析を行い、中国語と日本語の破裂音の F0 に影響を与える要素と影響を受けて現れた特徴を考察した。結果として、声調の種類は中国語語頭破裂音の F0 に最も顕著な影響を与える要因である。高起点の声調（中国語音韻論における第 1 声と第 4 声）を持つ破裂音の F0 は、低起点の声調（中国語音韻論における第 2 声と第 3 声）を持つ破裂音の F0 より明らかに高い。調音方法と調音部位は、中国語語頭破裂音の F0 に顕著な影響を与えない。日本語の場合は、単語のアクセント型は、日本語語頭破裂音の F0 に影響を与える。つまり、同じ調音方法および調音部位で発音される破裂音において、頭高型（アクセント核が第 1 モーラの直後にある場合）は非頭高型（アクセント核がない或いは第 1 モーラの直後にあるのではない場合）よりも F0 が高い。調音方法も、日本語破裂音の F0 に影響を与える。一般的な音響音声学の見解と一致するように、清音²⁾の F0 は濁音よりも高い。つまり、日本語語頭破裂音の F0 には「頭高型の清音が最も高く、非頭高型の清音と頭高型の濁音が次に高く、類似し、非頭高型の濁音が最も低い」という傾向がある。調音部位は、日本語語頭破裂音の F0 に対して顕著な影響を及ぼさない。学習者による日本語破裂音に関する研究はほとんど日本語破裂音の清濁に目を向けている (吉廣綾子, 2004; 福岡昌子, 2005a, 2005b; 江佩璇, 2010; 王鳳翔, 2017)。学習者の日本語破裂音音節の F0 に関する研究は、管見の限り、福岡昌子 (2008) の研究だけで行われた。福岡の研究では、韓国人日本語学習者に日本語の無意味語および有意意味語を発音させ、発話の F0 (基本周波数) を計測した結果、無声音で始まる語は 1 拍目の F0 が高く、2 拍目にかけて下降調となり、有声音で始まる語は 1 拍目の F0 が低く、上昇調で実現されやすいことを明らかにした。また、韓国語の無意味語と有意意味語を用いた発話実験を行い、激音・濃音の F0 が高く実現されることを確認している。このことから、韓国人は母語の激音・濃音／平音の対立を日本語の無声音／有声音の対立と対応させる傾向があるため、無声音でピッチが高くなり、有声音でピッチが低くなるのではないかと推測している。つまり、韓国語母語話者による日本語発話のピッチ特徴が、語頭子音の声の有無にも影響を受けることが指摘されている。

以上のように、これまでの研究では、日本語学習者の語頭破裂音 F0 に関する実験音声学的研究は非常に限られており、特に韓国人学習者に対する研究が 1 件報告されているにとどまる (福岡昌子, 2008)。この研究では、学習者の母語である韓国語における破裂音の清濁に基づいた F0 制御が、日本語の発音にも影響を及ぼしている可能性が示唆されている。一方で、中国人学習者における同様の研究は見当たらず、中国人学習者による日本語破裂音の F0 の特徴については十分に明らかになっていない。また、中国語・韓国語・日

本語では破裂音の音響的特徴や F0 への影響要素がそれぞれ異なることが明らかになり (Huang, 2024)、その差異が日本語学習者の発音にどのように反映されるかについては、さらなる検討が必要である。そこで本研究では、韓国人学習者の先行研究を踏まえつつ、中国人学習者を新たに対象に加えることで、両者の日本語破裂音の F0 の特徴と傾向性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象及び研究方法

2.1 被験者

中国人と韓国人の日本語学習者に関する既存の発音研究の多くは、両国の標準語である北京方言およびソウル方言を母語とする話者を主な対象としてきた。これに対して、本研究では研究対象を拡張し、両国の他の方言地域出身の学習者を扱うことで、より多様な発音傾向を明らかにすることを目的とした。

以上の理由により、今回の調査では福建地域出身（閩南方言地域の厦門、福州、泉州、漳州）の中国 X 大学日本語学科一年生の中国人学習者男性 5 名・女性 5 名（合計 10 名）と全羅道地域出身（全羅道方言地域の全州、羅州、鎮安）の韓国 J 大学日本語学科低学年の韓国人学習者男性 5 名・女性 5 名（合計 10 名）を実験対象として選定した。この二つの地域を選定した理由は、中国の福建方言には日本語の破裂音と共通する有声音が存在する一方で、韓国の全羅道方言には語頭破裂音の緊張化（硬音化）現象が見られるなど、それぞれの標準語とは異なる破裂音の特徴があるためである。高校から日本語を勉強し始めた人もいたので、一年生でも日本語の学習期間は必ずしも一年間とは限らない。また、調査時点までに、破裂音に注目した特別な発音指導と訓練を受けていなかった。

2.2 録音資料

録音資料（調査語彙）は、語頭に「パ／バ」「タ／ダ」「カ／ガ」のいずれかを含む有意味語を使用した（表 1 参照）。なお、本実験では、破裂音の後続母音を[a]に限定した。また、アクセントが破裂音の音響的特徴に影響を及ぼす可能性があるため、日本語のアクセントを考慮した。具体的には、第 1 モーラの直後にアクセント核があるものとないものの両方を用意した。すなわち、アクセント核が第 1 モーラの直後にある場合は頭高型 (Ⓐ)、アクセント核がない或いは第 1 モーラの直後にあるのではない場合は非頭高型 (Ⓔ) である。詳細は以下の通りである。

表 1：日本語破裂音に関する録音資料

破裂音種類		頭高型㊦		非頭高型㊧	
両唇音	[p]	<u>パ</u> ーティー	<u>パ</u> リ	<u>パ</u> ソコン	<u>パ</u> トロール
	[b]	<u>バ</u> ス	<u>バ</u> ンコク	<u>ば</u> くだん・爆弾	<u>ば</u> めん・場面
歯茎音	[t]	<u>タ</u> イ	<u>タ</u> クシー	<u>た</u> んしゅく・短縮	<u>た</u> いおう・対応
	[d]	<u>だ</u> んし・男子	<u>だ</u> れ・誰	<u>だ</u> いがく・大学	<u>だ</u> んたい・団体
軟口蓋音	[k]	<u>か</u> こ・過去	<u>か</u> んこく・韓国	<u>か</u> そく・加速	<u>か</u> くにん・確認
	[g]	<u>ガ</u> イド	<u>ガ</u> ス	<u>が</u> いしょく・外食	<u>が</u> くせい・学生

本研究では、音声教育への貢献を目的とし、学習者が最も標準的な日本語の発音を参照できるよう、アナウンサーの発音を対照の基準として採用した。対照に用いる日本人アナウンサーの音声データは、中・韓・日の三ヵ国における公式メディア³⁾のニュース放送から選定した。日本語語頭破裂音の選定条件は先述と同様であり、アナウンサーは男女各 4 名とし、語頭破裂音を合計 288 例収集した。これらのデータを、新たに収録した中国人および韓国人学習者の音声データと統合し、対照分析を行った。

2.3 実験プロセス及び研究ツール

(1) 音声収録

録音は、中国 X 大学日本語学科、韓国 J 大学日本語学科の資料室において、騒音・雑音・残響のない環境下で行い、RODE NT-USB+ コンデンサーマイクロフォンを使用して iMac Pro に取り込んだ（オーディオ録音ソフトウェアは Adobe Audition 2023 (version 23.3) を使用し、サンプリング周波数は 44,100Hz、量子化ビット数は 32 ビット）。被験者にはあらかじめ録音資料を配布し、資料を確認した後、3 分間の準備時間を与え、日本語の単語をマイクに向かって 1 回ずつ読んでもらった。

(2) 音響パラメータの測定

F0 の数値は Praat (version 6.4.23) のピッチ自動抽出機能を利用し、日本語語頭破裂音の破裂した直後の後続母音始端部のピッチ値を読み取って記録した。

(3) データの整理と分析

データは Excel で整理し、記述統計分析を行った後、図表を作成した。分析と考察は、主に平均値と全体分布の 2 つのレベルで行い、平均値については棒グラフで可視化し、全体分布については箱ひげ図を用いて表現した。

3. 実験結果及び考察

3.1 中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 に関する考察

本節では、中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 について、2つの観点から考察を行う。一つ目は、個別に中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 の平均値を計算し、中国人学習者の発音に現れる F0 の特徴を明らかにする。二つ目は、中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 を、日本人アナウンサーによる日本語語頭破裂音の F0 と比較し、両者の差異について検討する。先行研究（Huang, 2024）により、調音方法（清音・濁音）と日本語のアクセント型（頭高型㊦・非頭高型㊧）が F0 に影響を与えることが明らかになった。そこで、本研究では、F0 に関する考察を調音方法とアクセント型に焦点を当てて行う。

3.1.1 中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 の特徴

中国人学習者 10 名（男性 5 名・女性 5 名）の F0 の平均値一覧表および棒グラフを基に、中国人学習者による日本語破裂音の F0 の特徴について考察する。

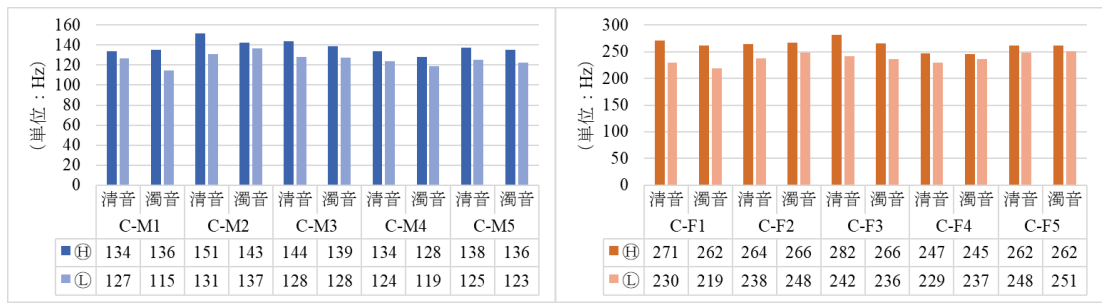


図 1：中国人学習者による日本語破裂音音節の F0 の平均値（男・女）

図 1 は、中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 の平均値を示している。左側が男性、右側が女性のデータである。縦軸には、基本周波数（F0）が示されており、単位はヘルツ（Hz）である。横軸には、被験者 10 名（男性：C-M1～C-M5、女性：C-F1～C-F5）の結果が示されており、それぞれの清音および濁音の F0 平均値が記されている。さらに、清音と濁音のそれぞれについて、頭高型㊦と非頭高型㊧の 2 種類の値が表示されている。棒の色分けにより、頭高型㊦は濃い色、非頭高型㊧は淡い色で表現されている。このグラフの分析から、中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 には、次のような特徴が見られる。

①アクセント型による特徴を見ると、すべての被験者において、同じ調音方法の破裂音では、頭高型㊦の F0 の平均値が非頭高型㊧の F0 の平均値よりも高いという一貫した傾向がある。このことは、中国人学習者の日本語語頭破裂音において、単語のアクセント型の違いによって F0 に差が生じることを示している。

②調音方法による特徴を見ると、同じアクセント型の日本語語頭破裂音の F0 において、清音と濁音の大小関係には一定の傾向が見られない。清音が濁音よりやや高い場合が多いが、逆に濁音のほうがやや高くなる場合もある。また、差が見られる場合でも、差があつ

ても、その差は大きくないため、調音方法による影響は顕著ではないと考えられる。

つまり、中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 は、調音方法の影響を受けることなく、主にアクセント型の影響を受けると考えられる。

3.1.2 中国人学習者と日本人アナウンサーによる日本語破裂音の F0 に関する比較

次に、中国人学習者と日本人アナウンサーの日本語語頭破裂音の F0 を比較し、その違いを踏まえて、中国人学習者の日本語破裂音の F0 の特徴を考察する。

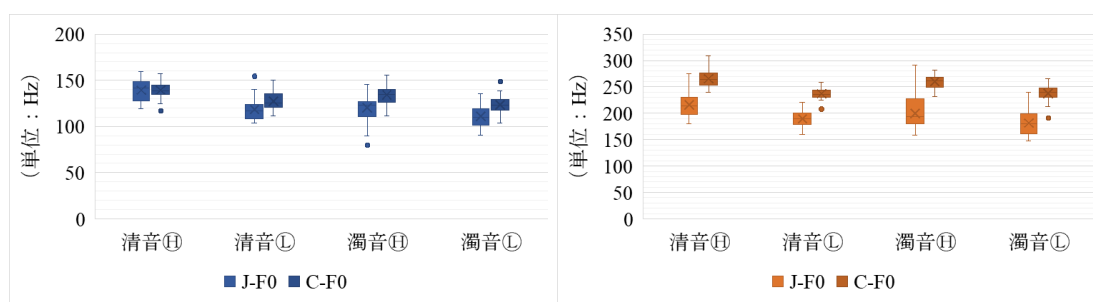


図 2：日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音音節の F0 の分布（男・女）

図 2 は日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音の F0 の分布を示している。左側が男性、右側が女性のデータである。この図は破裂音を清音㊦、清音㊧、濁音㊦、濁音㊧の 4 つのカテゴリに分けて比較分析を行っている。また、日本人アナウンサーの F0 (J-F0) と中国人学習者の F0 (C-F0) がそれぞれ異なる色の濃淡で示されている。

男女両方の結果を総合的に考察すると、次のような傾向が見られる。

①平均分布の観点から見ると、中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 は、日本人アナウンサーよりも高い傾向がある（男性の清音㊦の場合を除く）。

②分布範囲の観点から見ると、日本人アナウンサーによる日本語語頭破裂音の F0 は、中国人学習者によるものより、分布が広範に分散している傾向がある。一方で、中国人学習者の F0 はより集中している傾向が見られる。この特徴の原因として考えられるのは、中国人学習者の母語である中国語の四つ声調には固定された調値（音の高さと変化）があるため、中国人学習者は音高（ピッチ）に対する認識がより安定的であり、その結果、すべての被験者の F0 分布が比較的集中することにあると考えられる。一方、日本語のアクセントには固定された音高は存在せず、高と低の対比のみが区別されるため、日本人アナウンサーであっても、音高に関してはより柔軟で自由な調整が可能であると考えられる。

3.2 韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 に関する考察

本節では、韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 について、2 つの観点から考察を行う。一つ目は、個別に韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 の平均値を計算し、韓国

人学習者の発音に現れる F0 の特徴を明確にする。二つ目は、韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 を日本人アナウンサーによる日本語語頭破裂音の F0 と比較し、両者の差異について検討する。中国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 を分析したのと同様に、韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 を考察する際も、調音部位は考慮せず、調音方法とアクセント型に焦点を当てて分析・考察を行う。

3.2.1 韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 の特徴

次に、韓国人学習者 10 名（男 5 名・女 5 名）の F0 の平均値一覧表及び棒グラフを基に、韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 の様態について考察する。

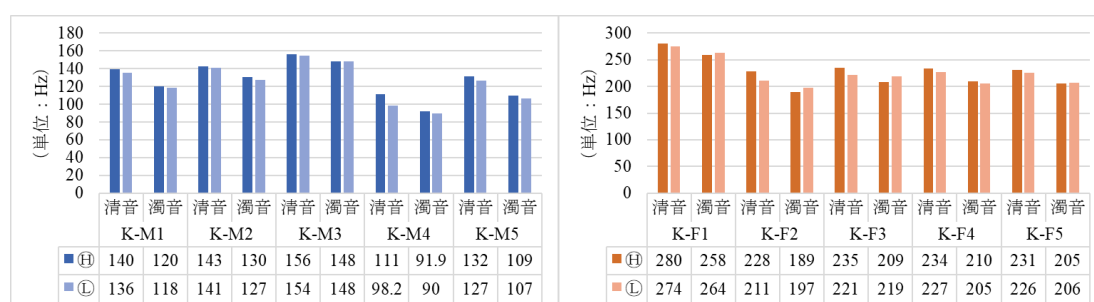


図 3：韓国人学習者による日本語破裂音音節の F0 の平均値（男・女）

図 3 は、韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 の平均値を示している。左側が男性、右側が女性のデータである。縦軸には、基本周波数（F0）が示されており、単位はヘルツ（Hz）である。横軸には、被験者 10 名（男性：K-M1～K-M5、女性：K-F1～K-F5）の結果が示されており、それぞれの清音および濁音の F0 平均値が記されている。さらに、清音と濁音のそれぞれについて、頭高型㊤と非頭高型㊦の 2 種類の値が表示されている。棒の色分けにより、頭高型㊤は濃い色、非頭高型㊦は淡い色で表現されている。このグラフの分析から、韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 には、次のような特徴が見られる。

①調音方法による特徴を見ると、被験者間の F0 の値には大きな個人差が見られるものの、すべての被験者において、アクセント型に関係なく、清音の F0 の方が濁音の F0 よりも高いという一貫した傾向が確認された。このことは、韓国人学習者の日本語語頭破裂音において、調音方法の違い（清音・濁音）によって F0 に差が生じることを示している。

②アクセント型による特徴を見ると、同じ調音方法の破裂音における 2 種類のアクセント型（頭高型㊤と非頭高型㊦）の発音では、頭高型㊤の方が非頭高型㊦よりわずかに高いか、ほぼ同等であり、明確な差異は見られない。特に、女性の場合は、頭高型㊤と非頭高型㊦の F0 値の大小関係には一定の傾向が見られず、頭高型㊤が非頭高型㊦より高い場合があれば、逆に非頭高型㊦のほうが高い場合もある。つまり、韓国人学習者の日本語破裂音の F0 は、アクセント型の影響をあまり受けていないと考えられる。

3.2.2 韓国人学習者と日本人アナウンサーによる日本語破裂音の F0 に関する比較

次に、韓国人学習者と日本人アナウンサーの日本語語頭破裂音の F0 を比較し、その違いを踏まえて、韓国人学習者の日本語破裂音の F0 の特徴を考察する。

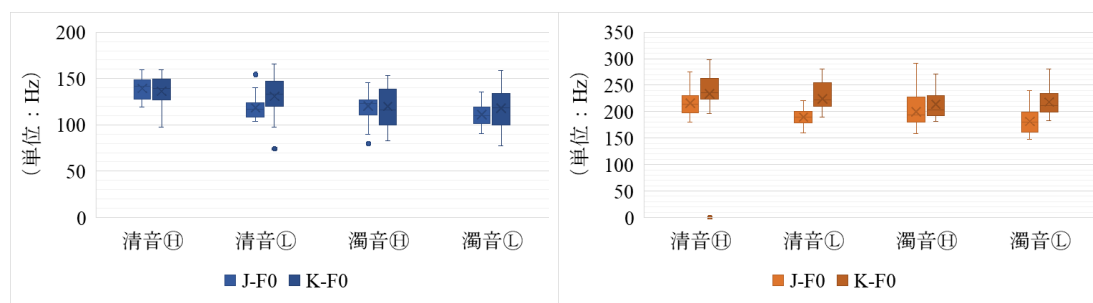


図 4：日本人アナウンサーと韓国人学習者による日本語破裂音音節の F0 の分布（男・女）

図 4 は、日本人アナウンサーと韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 の分布を示している。左側が男性、右側が女性のデータである。この図では、縦軸には基本周波数 (F0) がヘルツ (Hz) で示され、横軸には「清音㊦」「清音㊧」「濁音㊦」「濁音㊧」の 4 つのカテゴリに分けられている。また、各カテゴリにおいて、日本語母語話者の F0 (J-F0) と韓国人学習者の F0 (K-F0) がそれぞれ異なる色の濃淡で示されている。このグラフの分析から、次のような傾向が見られる。

①平均分布の観点から見ると、アクセント頭高型㊦の破裂音において、日本人アナウンサーと韓国人学習者の F0 は概ね近似している。ただし、女性の頭高型㊦清音に限っては、韓国人学習者の F0 のほうが日本人アナウンサーよりも高い。一方、非頭高型㊧の破裂音では、韓国人学習者の F0 が日本人アナウンサーよりも高い傾向が見られる。

②分布範囲の観点から見ると、ほとんどの場合、日本人アナウンサーの F0 の四分位範囲は韓国人学習者に比べて狭く、F0 のばらつきが少ないことを示している。一方、韓国人学習者の F0 の四分位範囲は広く、ひげも長いことから、F0 のばらつきが大きいことがわかる。つまり、韓国人学習者は日本語の破裂音を発音する際に個人差が大きく、また、日本人アナウンサーに比べて F0 の変動範囲が広いことが示唆される。この特徴は、今回の研究では特に男性学習者において顕著である。

男女の結果を総合的に考察すると、日本語母語話者による語頭破裂音の F0 は、調音方法 (清音・濁音) およびアクセント型 (㊦・㊧) の両方の影響を受けることが明らかとなった。具体的には、濁音より清音の F0 が高く、非頭高型㊧より頭高型㊦の F0 が高いという傾向があり、「濁音㊧<濁音㊦≒清音㊧<清音㊦」の順で F0 が分布する。一方、韓国人学習者の F0 は調音方法の影響を強く受けるものの、アクセント型の影響はほとんど受けない。そのため、韓国人学習者による日本語破裂音においても、濁音より清音の F0 が高

いものの、頭高型㊦と非頭高型㊬の間に顕著な F0 の差異は見られず、「濁音㊬≒濁音㊦<清音㊬≒清音㊦」の順で分布する。このため、今回の結果のように、頭高型㊦の破裂音において韓国人学習者の F0 は日本語母語話者と近似するが、非頭高型㊬の破裂音では韓国人学習者の F0 が日本語母語話者よりも高くなるという状況が生じると考えられる。

3.3 中国人・韓国人学習者による日本語語頭破裂音の F0 に関する対照分析

先行研究の結果により、中国語の語頭破裂音音節における音高（破裂音後続母音の F0）は主に中国語の声調類型の影響を受けるのに対し、韓国語の語頭破裂音音節の音高は主に韓国語破裂音の調音方法（すなわち、平音・激音・濃音のいずれか）によって異なることが明らかになった（Huang, 2024）。このような母語における異なる特徴が、中国人および韓国人学習者による日本語語頭破裂音音節の音高にどのような影響を与えるのかについては、3.1 および 3.2 で考察を行った。

本節では、箱ひげ図を用いて、日本人アナウンサー、中国人学習者、韓国人学習者の日本語語頭破裂音音節の F0 の分布を横断的に比較し、考察する。考察は日本語語頭破裂音の（単語の）アクセント型と調音方法の違いに焦点を当て、清音㊦、清音㊬、濁音㊦、濁音㊬の 4 つのカテゴリに分けて分析を行う。日本人アナウンサーの発音を基準とし、中国人学習者および韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 分布の特徴と差異を改めて明確に整理することを目的とする。

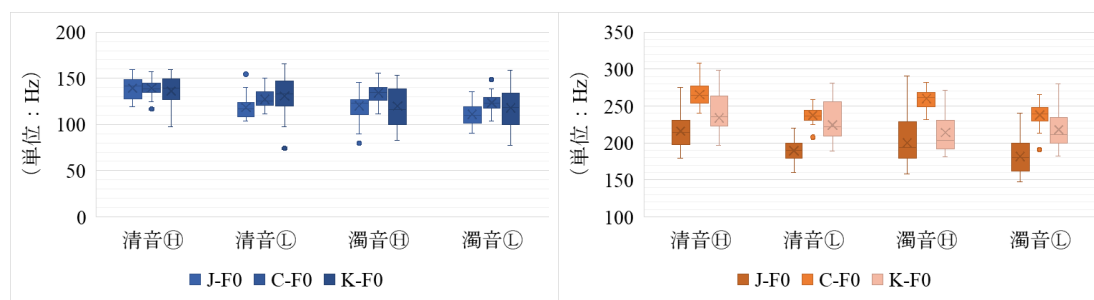


図 5：日本人・中国人・韓国人による日本語破裂音音節の F0 の分布（男・女）

図 5 は、日本人アナウンサー、中国人学習者、韓国人学習者の日本語語頭破裂音の基本周波数（F0）の分布について比較したものである。左側が男性、右側が女性のデータである。この図では、縦軸には基本周波数（F0）がヘルツ（Hz）で示され、横軸には「清音㊦」「清音㊬」「濁音㊦」「濁音㊬」の 4 つのカテゴリに分けられている。各カテゴリにおいて、日本人アナウンサー（J-F0）、中国人学習者（C-F0）、韓国人学習者（K-F0）の 3 つのグループがあり、それぞれの基本周波数の分布が箱（Box）と、その両側に出たひげ（Whisker）で示されている。

左側の男性の分布を確認すると、次のような傾向が見られる。

①清音㊦において、日本人アナウンサー、中国人学習者、韓国人学習者は近似した F0 の値を示している。

②清音㊧について、日本人アナウンサーによる清音㊧の F0 が清音㊦より明らかに低下している。中国人学習者による清音㊧の F0 も低下しているが、その低下幅は日本人アナウンサーほど顕著ではない。韓国人学習者の清音㊧の F0 は清音㊦の F0 と比べてほとんど変動が見られない。その結果、清音㊧の F0 は「日本人アナウンサー<中国人学習者<韓国人学習者」という順序になっている。

③濁音㊦において、中国人学習者の濁音㊦の F0 は日本人アナウンサーより高い傾向を示している。韓国人学習者の場合、濁音㊦の F0 の平均値は日本人アナウンサーと近似しているが、全体の分布は広範に分散している。

④濁音㊧において、中国人学習者による濁音㊧の F0 は日本人アナウンサーより高く、韓国人学習者による濁音㊧の F0 の分布は広範に分散し、ほぼ日本人アナウンサーと中国人学習者の F0 をカバーしていると思われる。

右側の女性の分布を確認すると、次のような傾向が見られる。

①清音㊦と濁音㊧の両方において、日本語語頭破裂音音節の F0 は「日本人アナウンサー<韓国人学習者<中国人学習者」という順序になっている。

②清音㊧においては、中国人学習者と韓国人学習者の F0 はともに日本人アナウンサーより高い傾向が見られる。ただし、韓国人学習者の F0 の分布は中国人学習者よりも明らかにばらつきが大きい。

③濁音㊦においては、中国人学習者の F0 が最も高く、韓国人学習者の F0 は日本人アナウンサーと近い値を示している。

男女両方の結果を総合的に考察し、中国人学習者と韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 の特徴を整理する。

①中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 は、日本人アナウンサーよりも高い傾向が見られる。また、中国人学習者の F0 の分布は、日本語母語話者や韓国人学習者に比べて集中しており、日本語語頭破裂音の発音時に音高が比較的安定していることが示唆される。この要因として、中国人学習者の母語である中国語が、明確な 5 つの調値を持つ声調言語であることが挙げられる。すなわち、中国語話者は声調に対して相対的に固定された認識を持っているため、日本語の語頭破裂音においても一定の音高を維持しやすいと考えられる。

②韓国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 は、清音の場合に高く、濁音の場合に低い傾向が見られる。多くの場合、日本人アナウンサーの F0 より高く、中国人学習者よりは低い傾向がある。また、韓国人学習者の F0 の分布は、中国人学習者や日本語母語話者に比べて分散しており、日本語語頭破裂音の発音時の音高にばらつきが大きいことが示唆される。

③中国人学習者と韓国人学習者の F0 における最も顕著な差異は、F0 の高さに影響を与える要因が異なる点である。具体的には、中国人学習者はアクセント型（頭高型㊦と非頭高型㊧）によって語頭破裂音の F0（ピッチ）が変化する傾向がある。一方、韓国人学習者はアクセント型の影響を受けにくく、代わりに調音方法（清音と濁音）によって F0 が変化する傾向があると考えられる。

おわりに

本研究では、日本語語頭破裂音音節の F0 に着目し、日本人アナウンサーの発音を基準として、中国人学習者と韓国人学習者が日本語語頭破裂音を習得する際の特徴を対照分析した。研究結果は次のとおりである。❶ F0 の平均分布の観点から見ると、中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 は、日本人アナウンサーよりも全体的に高い傾向がある。一方、韓国人学習者の F0 は、アクセントが頭高型㊦の破裂音では日本人アナウンサーと概ね近い値を示すが、非頭高型㊧の破裂音では、日本人アナウンサーよりも高い傾向が見られる。❷ F0 の分布範囲の観点から見ると、中国人学習者の F0 は、日本人アナウンサーや韓国人学習者に比べて分布が集中しており、日本語語頭破裂音の発音時に音高が比較的安定していることが示唆される。一方、韓国人学習者の F0 は、中国人学習者や日本人アナウンサーに比べて分散が大きく、日本語語頭破裂音の発音時に音高のばらつきが大きいことが示唆される。❸ 最後に、中国人学習者と韓国人学習者の F0 における最も顕著な差異は、F0（ピッチの高さ）に影響を与える要因の違いである。具体的には、中国人学習者の場合、同じ調音方法の破裂音において、頭高型㊦の F0 の平均値が非頭高型㊧の F0 の平均値よりも高いという一貫した傾向が見られる。一方で、清音と濁音の F0 の間に顕著な差は確認されなかった。これにより、中国人学習者の日本語語頭破裂音の F0 は、調音方法の影響を受けることなく、主にアクセント型の影響を受けると考えられる。一方、韓国人学習者の場合、日本語語頭破裂音の F0 は、アクセント型に関係なく、清音の F0 の方が濁音の F0 よりも高いという一貫した傾向が確認された。これにより、韓国人学習者の F0 はアクセント型の影響をあまり受けず、調音方法の違い（清音・濁音）によって主に変化すると考えられる。

本研究では、日本語語頭破裂音の F0（ピッチの高さ）に着目して考察を行ったが、日本語語頭破裂音の発音における有声開始時間、帯気性の強さ、声門の緊張度などにおいて、中国人学習者と韓国人学習者の違いを解明するため、VOT や後続母音の H1-H2 に関する研究も進めている。今後は、破裂音にとどまらず、摩擦音を含む他の子音や母音にも対象を広げ、さらなる分析を進める予定である。

注

1) F0（Fundamental Frequency、基本周波数）とは、音声の基本的な周期振動の頻度を指す概念

である。具体的には、声帯振動によって生成される音波の1秒間あたりの振動回数（ヘルツ単位）を表す値であり、音の高さ（ピッチ）と密接に関連している。「破裂音のF0」とは厳密には「破裂音の後続母音のF0」と表記すべきであるが、論文の簡潔性を保ち、読みやすさを向上させるため、以降は「破裂音のF0」と省略して記述する場合がある。ここでいう「破裂音」は、子音としての破裂音だけでなく、後続母音を含む破裂音音節全体を指している。

- 2) 日本語両唇破裂音[p]の場合、日本語学では「半濁音」と呼ばれるが、実質的に清音の[t][k]と同じように無声音なので、本稿では「清音」で統一する。
- 3) 本研究で利用した公式メディアは日本のNHK、中国の中国之声、韓国のMBCである。この三つのメディアはそれぞれの国を代表する公共放送機関であり、そのアナウンサーの発音はいずれも認定を受けた模範的な発音とされている。さらに、これら三つのメディアは、いずれも、スタイルの近いニュース読み上げ番組を有し、その音声を高音質でダウンロード可能な形で提供しているため、本研究ではこの三つのメディアを実験対象として選定した。

参考文献

- 王鳳翔 (2017) 「中国語母語話者による日本語語頭破裂音の生成--子音の調音位置・地域差と VOT の関係」『日本言語学会 2017 年度全国大会（第 155 回）予稿集』、139-144 頁。
- 黄少安 (2024) 「中国語・日本語・韓国語両唇破裂音に関する音響音声学的対照研究--アナウンサーによる語頭破裂音を中心に」『건지인문학』40、175-200 頁。
- 江佩璇 (2010) 「中国語を母語とする日本語学習者による語中破裂音/t/と/d/の生成--持続時間の特徴を中心に」『言葉と文化』11、99-117 頁。
- 福岡昌子 (2005a) 「日本語破裂音の発音習得における共通性と相違性--北京・上海・ソウル方言話者」『2005 年度日本音声学会全国大会予稿集』、161-166 頁。
- 福岡昌子 (2005b) 「韓国人日本語学習者の破裂音習得--知覚と生成のメカニズム」『2005 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、151-156 頁。
- 福岡昌子 (2008) 「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉：語頭破裂音を含む語のアクセント」『三重大学国際交流センター紀要』3、45-59 頁。
- 吉廣綾子 (2004) 「日本語の無声子音・有声子音、中国語の有気音・無気音の比較--日本語母語話者及び中国語母語話者の発音を比較して」『徳島大学国語国文学』17、1-13 頁。
- Cho, T., Jun, S.-A., & Ladefoged, P. (2002) "Acoustic and aerodynamic correlates of Korean stops and fricatives," *Journal of Phonetics*, 30, pp.193-228.
- Huang Shaoan (2024) "A Statistical Analysis of Factors Affecting VOT and F0 in Plosive Sounds across Chinese, Japanese, and Korean: Focusing on the Standard Pronunciation of Professional Broadcasters," *International Theory and Practice in Humanities and Social Sciences*, 1(1), pp.54-64.

A Contrastive Study on the Acoustic Characteristics of Japanese Plosives Produced by Chinese and Korean Learners: Focusing on the F0 of Word-Initial Plosive Syllables

HUANG, Shaoan

Abstract

This study focuses on the fundamental frequency (F0) of Japanese word-initial plosive syllables and conducts a contrastive analysis of the features observed in the acquisition of these plosives by Chinese and Korean learners of Japanese, using Japanese announcers' pronunciation as a reference. The results indicate that the F0 of Japanese word-initial plosives produced by Chinese learners tends to be higher overall than that of Japanese announcers. In contrast, the F0 of Korean learners shows values generally close to those of Japanese announcers in high-pitch accent (Ⓜ) plosives, but tends to be higher in non-high-pitch accent (Ⓛ) plosives. Additionally, the distribution of F0 among Chinese learners was found to be more concentrated than that of Japanese announcers and Korean learners, suggesting relatively stable pitch in the production of Japanese word-initial plosives. On the other hand, the F0 of Korean learners showed greater dispersion, implying more variation in pitch during the production of Japanese word-initial plosives compared to Chinese learners and Japanese announcers. Finally, the most notable difference between Chinese and Korean learners in terms of F0 was attributed to differing influencing factors. Specifically, the F0 of Japanese word-initial plosives produced by Chinese learners was mainly affected by accent type without being influenced by manner of articulation, whereas the F0 of Korean learners was primarily affected by differences in manner of articulation (voiced vs. voiceless) rather than accent type.

Keywords : Japanese plosives, Phonetic education, Chinese learners, Korean learners, F0

機能動詞「与える」の共起名詞と構文について

郝 文文（名古屋大学大学院生）

要旨

本研究では、機能動詞「与える」の共起名詞と構文的特徴について、機能動詞「受ける」との比較を通じて考察した。本研究では機能動詞「与える」と共起する名詞には、①動名詞（VN）、②動詞連用形の転成名詞（DN）、③非動名詞の動作性名詞の3種類に分類されることを指摘した。

また、「与える」と「受ける」は基本的に能動文と受動文の対立関係を形成するが、共起する名詞によってはこの対応関係が成立しない場合があることを指摘した。特に、受け手の心理状態を表す語（例：「安らぎ」）、受け手の内発的な状態変化を表す語（例：「潤い」）、受け手の社会的状態を表す語（例：「経験」）、与え手の言語表現活動を表す語（例：「解答」）は機能動詞「与える」と強く結びつく傾向がある。一方、「指導」「教育」「訓練」などの与え手から受け手に対して働きかけを表す語は機能動詞「与える」と結びつきにくい傾向がある。

さらに、機能動詞「与える」の構文は、与え手（A）と受け手（B）の有情性および作用のあり方により、七つのタイプに分類できることを指摘した。

キーワード： 機能動詞、「与える」、「受ける」、共起名詞、構文

はじめに

本研究は、いわゆる機能動詞「与える」の共起名詞と構文について論じるものである。「与える」は例文（1a）のように行為主体が他者に何かを授与することを表し、能動的意味を表す。この点で、例文（1b）のように他者から何かを受領することを表し、受動的意味を表す「受ける」とはヲ格名詞の移動の方向が逆になる。

(1) a. 委員会は太郎に賞を与えた。

b. 太郎は委員会から賞を受けた。

このように「与える」と「受ける」はヲ格に具象名詞が来て物の移動を表す用法のほか、ヲ格に動作や状態を表す抽象名詞が来て、与え手から受け手に向けてその動作や状態をもたらすことを表す用法がある。例えば、例文（2a）は与え手である政府が受け手である子供に援助をもたらすことを表し、例文（2b）は受け手である子供が与え手である政府

から援助をもらうことを表している。これらは「援助を与える/受ける」のように意味的にも構文的にも対をなす表現である。

(2) a. 政府は子供に援助を与えた。(政府は子供 {を/に} 援助した。)

b. 子供は政府から援助を受けた。

一方、例文 (3a) の「安らぎを与える」は自然な表現であるのに対し、例文 (3b) の「安らぎを受ける」は不自然である。また、例文 (4b) の「相談を受ける」は自然な表現として成立するが、例文 (4a) の「相談を与える」は不自然である。このように、「与える」と「受ける」は意味的には対応しているように見えても、共起する名詞によっては、両者が対を成すとは限らない。

(3) a. 家庭は彼女に安らぎを与えた。(家庭は彼女を安らがせた。)

b. *彼女は家庭から安らぎを受けた。

(4) a. *住民は市長に相談を与えた。

b. 市長は住民から相談を受けた。

さらに、例文 (2a) と (3a) はいずれも「～を与える」という構文をとっているが、(2a) の「援助を与える」は「援助する」といった単純動詞に置き換えられるのに対し、(3a) の「安らぎを与える」を置き換えると「安らがせた」といった使役構文になる。そこで、本研究では、機能動詞「与える」と共起する名詞とその構文的な特徴について、機能動詞「受ける」と比較しながら考察する。

1. 先行研究

本章では、機能動詞「与える」の先行研究について見る。村木 (1991:241) は、例文 (5) と例文 (6) を挙げて、「与える」と「受ける」が能動文と受動文の対立を形成していることを指摘している。また、これらの例文において意味が変わらない場合、「注意を与える」は「注意する」に、「注意を受ける」は「注意される」に対応することを述べている。

(5) a. 太郎は次郎に注意をあたえた。

b. 太郎は次郎に注意した。

(6) a. 次郎は太郎から/に注意をうけた。

b. 次郎は太郎から/に注意された。

(村木 1991:241 の例 (24)–(27))

また、村木 (1991:242) は「こうした「……をあたえる」と「……をうける」は、……の部分にはいる多くの動作性名詞（支援/保護/承認/評価/警告/支持/打撃/一撃/影響/刺激/……）と結びついて、ヴォイスのカテゴリーである能動と受動の対立をつくっている」と指摘している。しかし、どのような名詞と結びつくかについては、さらに詳しく考察する余地がある。

また、小泉他 (1989:16–17) は「与える」を以下のように大きく四つの意味に分けて、

その特徴を記述している。このうち、本研究で扱う「与える」は意味③と意味④に相当する。

あたえる 与える

- ① 自分の所有物を他人に渡してその人の所有物とする。

《文型》[人・組織]{が/は}[人・生き物・組織]に[物・賞]を与える

例「その母親は息子にお金をたくさん与えた」「本{車/おもちゃ}を与える」「犬にえさを与える」「政府は立派な業績をあげた研究グループに賞を与えた」「外国の大学がその研究者に博士号を与えた」

【用法】改まった言い方で、目上の人から目下の者に授ける時に使われる。

- ② 仕事・権利・機会などを相手に供給する。

《文型》[人・組織・事]{が/は}[人・組織]に[物・事]を与える

例「先生は生徒に宿題をたくさん与えた」「会社が社員に休暇を与える」「革命が民衆に自由を与えた」「一瞬の油断が相手に反撃のチャンス[機会]を与えた」「権利{余裕/時間/すき/猶予}を与える」

- ③ 恩恵・被害などの影響を受けさせる。

《文型》[人・組織・物・事]{が/は}[人・組織・所]に[物・事・心理]を与える

例「先生は多くの学生に影響を与えた」「台風がこの地域に被害を与えた」「彼の失敗が会社に打撃を与えた」「大学は一部の学生にある特典[奨学金]を与えている」「ショック{脅威/不安/恥/強い印象/感動}を与える」

- ④ 注意・忠告などを言い聞かせる。

《文型》[人・組織]{が/は}[人・組織]に[言葉・事]を与える

例「先生は生徒たちに注意を与えた」「警察はデモ隊に警告を与えた」「ヒント[忠告]を与えた」

このうち、「{特典/奨学金}を与える」はヲ格名詞が動作性名詞ではなく、機能動詞ではないため、本研究の対象とはならない。残る「与える」はヲ格名詞が動作性名詞であるため、本研究で扱う機能動詞である。

また、機能動詞としての「与える」の中には、「{影響/被害/打撃/ショック}を{与える/受ける}」のように「与える」も「受ける」も使えるものもあれば、「{脅威/不安/恥/感動}を{与える/*受ける}」のように「与える」しか使えないものもあるため、両者を分ける必要がある。

そのほか、孟(2012)は「～を受ける」の前に現れる名詞は漢語サ変名詞(「影響」)、動作性を持たない一般名詞(「苦言」)、動作性を持つ一般名詞(「衝撃」)、動詞連用形(「誘い」)であるとしている。さらに、これらの名詞の語彙的性質を表1のようにま

とめている。

表 1 漢語サ変名詞の語彙的性質(孟 2012 の表 1)

		本動詞/機能動詞	能動表現/受身表現	「-される」と対応
漢語サ変動詞	動詞的性質がより強い	機能動詞	受身表現	同義
	名詞的性質がより強い	本動詞	能動表現	同義でない
一般名詞	動作性を持つ	機能動詞	受身表現	対応しない
	動作性を持たない	本動詞	能動表現	対応しない

また、朱 (2013) は、「影響を受ける」のような受身の文法的役割を担う機能動詞「受ける」について、共起するヲ格名詞の特徴や文法的受身形式「レル・ラレル」形と比較しながら、表 2 のことを指摘している。

表 2 朱(2013:80-86)の機能動詞「受ける」のまとめ(筆者が整理したもの)

ヲ格名詞	文法的受身形式	例
動名詞	二項漢語動名詞の場合、「影響性」が捉えられやすいため、「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式は対応関係を成しやすい。	太郎は両親の <u>影響を受けた</u> 。 太郎は両親に <u>影響された</u> 。
	三項漢語動名詞の場合、動名詞によって語彙的受身形式は成立するが、文法的受身形式は成立しない。	本屋は太郎から新刊の <u>注文を受けた</u> 。 *本屋はから新刊を <u>注文された</u> 。
動詞連用形 転成名詞	動詞の「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式の交替現象を示している。	太郎は友達から <u>誘いを受けた</u> 。 太郎は友達に <u>誘われた</u> 。
非動名詞の 動作性名詞	「する」を伴って動詞化できないため、文法的受身形式の「レル・ラレル」形が欠如している。	太郎は友達の死に <u>襲撃を受ける</u> 。 *太郎は友達の死に <u>襲撃された</u> 。

王 (2021b) は、「与える」と「受ける」による語結合を語彙統語論的ヴォイス表現として捉え、それぞれの能動・受動の対応関係を考察している。その対応関係を表 3 に示す。

表 3 漢語動名詞と動詞「あたえる」「うける」からなる語結合のヴォイス性(王 2021b の表 1)

漢語動名詞	「あたえる」文のヴォイス性	「うける」文のヴォイス性
影響、刺激、打撃、衝撃、指示、命令、忠告、警告、保護、支援、支持、承認	能動	受動
感動、感銘	他動	自動
変化、変革、変動、動揺、安心、混乱、恐怖、満足、失望、解決	他動	「うける」文がない
解釈、説明、同意	なし	「うける」文がない

これまで機能動詞「与える」や「受ける」の研究はいくつか行われているが、「与える」

と「受ける」の対応について詳細な分析は行われていない。王（2021b）の研究も例文の羅列がほとんどで、与え手と受け手の有情性とヲ格名詞との関係について詳しく見ていない。そこで本研究では、共起するヲ格名詞の意味的特徴や構文形式、語用的側面も含めて機能動詞「与える」特徴について考察する。その際、比較対象として「受ける」についても見る。

2. 共起するヲ格名詞

本章では、機能動詞「与える」と共起するヲ格名詞の相違点を考察する。その使用実態を見るため、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を検索ソフト中納言を用いて検索を行った。検索対象は全データとし、検索条件は「品詞-大分類-名詞」を検索キーとし、後方共起1を「語彙素読み『ヲ』」、後方共起2を「語彙素読み『アタエル』」と設定した。

上記の検索によって出現した、「与える」のヲ格名詞の延べ語数は12,667語、異なり語数は1,765語であった。その異なり語数の上位20語を表4に示す。この中には「印象を与える」の「印象」のように動作や状態を表さないもの（「*印象する」とは言えない）も含まれている。表4で網掛けをしたものは、本稿の考察対象外とするものである。

表4 「与える」と共起するヲ格名詞とその出現数(上位20語)

順位	名詞	出現数	順位	名詞	出現数	順位	名詞	出現数	順位	名詞	出現数
1	影響	2,549	6	衝撃	169	11	チャンス	114	16	感動	82
2	印象	503	7	打撃	167	12	被害	111	17	もの	81
3	機会	316	8	損害	154	13	指示	95	18	ショック	77
4	感	244	9	ダメージ	138	14	権限	90	〃	示唆	77
5	刺激	236	10	力	135	15	時間	86	20	インパクト	69

表4を見ると、「影響」が1位で、次いで「印象」「機会」「(安心/不快/幸福)感」「刺激」の順になっている。20語のうち、「印象」「機会」「感」「力」「チャンス」などの9語は「する」とは結び付かず、動作や状態の意味が感じられないため、村木（1991）のいう機能動詞結合には当たらず、本研究の考察対象から除外する。また、表4には現れていないものの、「与える」と共起するヲ格名詞には「希望」（22位）、「罰」（34位）、「仕事」（43位）などがある。これらは「する」と結びつくことは可能であるが、「～を与える」と組み合わせられた場合には動的な意味を持たず、「望み」「刑罰・制裁」「職業・任務」といった意味を持ち、動作や状態の意味を伴わないため、本稿の考察対象とはならない。

一方、「影響」「刺激」「損害」「指示」「感動」「示唆」の6語は動名詞（VN）であり、「感じ」（23位）、「潤い」（32位）、「安らぎ」（38位）のようなヲ格名詞は動詞連用形の転成名詞（DN）である。これらは動作や状態の意味があるため本稿の考察対象になる。

また、「衝撃」「打撃」「ダメージ」「被害」「ショック」の5語は「する」を伴って動詞化できないが、動作や状態の意味が感じられ、「与える」と結び付くことで動作や状態の意味を表すため、本研究の考察対象になる。

上に、本研究では機能動詞「与える」と共起するのは、動名詞、動詞連用形転成名詞、非動名詞の動作性名詞の3種類であると考ええる。

機能動詞「与える」と共起するヲ格名詞の傾向を明らかにするために、本研究では、BCCWJを用いて、機能動詞「与える」の出現数4以上のヲ格名詞105語について、同じヲ格名詞を取る機能動詞「受ける」との出現数及び出現率¹⁾の違いを調べた。その上で、「与える」の出現率が高い順に並べた。その結果を表5に示す。表5で上の方にあるものは相対的に「与える」の方が使われやすいもの、下の方にあるものは相対的に「受ける」の方が使われやすいもの、両者とも50%前後のものは「与える」と「受ける」が同じくらい使われているものである。

表5 機能動詞「与える」の出現数4以上のヲ格名詞と出現率（「受ける」との比較）

順位	ヲ格名詞	「与える」の出 現数と割合(%)	「受ける」の出 現数と割合(%)	合計	順位	ヲ格名詞	「与える」の出 現数と割合(%)	「受ける」の出 現数と割合(%)	合計
1	安らぎ	52 (100%)	0 (0%)	52 (100%)	54	影響	2,549 (60.5%)	1663 (39.5%)	4,212 (100%)
2	安心	19 (100%)	0 (0%)	19 (100%)	55	変化	44 (60.3%)	29 (39.5%)	73 (100%)
3	暗示	14 (100%)	0 (0%)	14 (100%)	56	悲しみ	4 (57.1%)	3 (42.9%)	7 (100%)
4	解答	14 (100%)	0 (0%)	14 (100%)	57	合図	4 (57.1%)	3 (42.9%)	7 (100%)
5	楽しみ	14 (100%)	0 (0%)	14 (100%)	58	刺激	236 (55.5%)	189 (44.5%)	425 (100%)
6	解決	10 (100%)	0 (0%)	10 (100%)	59	助言	29 (53.7%)	25 (46.3%)	54 (100%)
7	所領	9 (100%)	0 (0%)	9 (100%)	60	痛み	9 (52.9%)	8 (47.1%)	17 (100%)
8	震動	8 (100%)	0 (0%)	8 (100%)	61	保障	11 (52.4%)	10 (47.6%)	21 (100%)
9	経験	7 (100%)	0 (0%)	7 (100%)	62	警告	20 (51.3%)	19 (48.7%)	39 (100%)
10	彩り	6 (100%)	0 (0%)	6 (100%)	63	ダメージ	138 (50.9%)	133 (49.1%)	271 (100%)
11	混乱	6 (100%)	0 (0%)	6 (100%)	64	変動	8 (50.0%)	8 (50.0%)	16 (100%)
12	誇り	5 (100%)	0 (0%)	5 (100%)	65	誤解	38 (46.3%)	44 (53.7%)	82 (100%)
13	癒し	5 (100%)	0 (0%)	5 (100%)	66	損失	18 (46.2%)	21 (53.8%)	39 (100%)
14	支障	5 (100%)	0 (0%)	5 (100%)	67	一撃	5 (45.5%)	6 (54.5%)	11 (100%)
15	分布	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	68	打撃	167 (43.0%)	221 (57.0%)	388 (100%)
16	苦悩	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	69	苦しみ	16 (41.0%)	23 (59.0%)	39 (100%)
17	励み	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	70	回答	6 (40.0%)	9 (60.0%)	15 (100%)
18	悩み	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	71	指示	95 (40.0%)	145 (60.0%)	240 (100%)
19	勝利	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	72	侮辱	5 (38.5%)	8 (61.5%)	13 (100%)
20	失望	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	73	感じ	66 (37.9%)	108 (62.1%)	174 (100%)
21	思い	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	74	注意	40 (37.4%)	67 (62.6%)	107 (100%)
22	統一	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	75	忠告	10 (37.0%)	17 (63.0%)	27 (100%)
23	誤認	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	76	衝撃	169 (36.0%)	301 (64.0%)	470 (100%)

24	展望	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)	77	損傷	33 (35.1%)	61 (64.9%)	94 (100%)
25	不安	62 (98.4%)	1 (1.6%)	63 (100%)	78	迷惑	7 (35.0%)	13 (65.0%)	20 (100%)
26	喜び	44 (97.8%)	1 (2.2%)	45 (100%)	79	救い	4 (33.3%)	8 (66.7%)	12 (100%)
27	恐怖	22 (95.7%)	1 (4.3%)	23 (100%)	80	障害	31 (30.1%)	72 (69.9%)	103 (100%)
28	満足	20 (95.2%)	1 (4.8%)	21 (100%)	81	祝福	19 (25.0%)	57 (75.0%)	76 (100%)
29	同意	37 (94.9%)	2 (5.1%)	39 (100%)	82	感銘	49 (22.1%)	173 (77.9%)	222 (100%)
30	動揺	16 (94.1%)	1 (5.9%)	17 (100%)	83	援助	45 (19.1%)	190 (80.9%)	235 (100%)
31	表現	11 (91.7%)	1 (8.3%)	12 (100%)	84	動き	4 (19.0%)	17 (81.0%)	21 (100%)
32	機能	9 (90.0%)	1 (10.0%)	10 (100%)	85	評価	46 (18.2%)	207 (81.8%)	253 (100%)
33	キック	8 (88.9%)	1 (11.1%)	9 (100%)	86	感化	4 (17.4%)	19 (82.6%)	23 (100%)
34	脅威	60 (88.2%)	8 (11.8%)	68 (100%)	87	規定	4 (16.7%)	20 (83.3%)	24 (100%)
35	潤い	56 (87.5%)	8 (12.5%)	64 (100%)	88	被害	111 (14.8%)	640 (85.2%)	751 (100%)
36	解釈	12 (85.7%)	2 (14.3%)	14 (100%)	89	アドバイス	15 (14.3%)	90 (85.7%)	105 (100%)
37	緊張	6 (85.7%)	1 (14.3%)	7 (100%)	90	保護	30 (13.8%)	187 (86.2%)	217 (100%)
38	錯覚	11 (84.6%)	2 (15.4%)	13 (100%)	91	ショック	77 (11.9%)	570 (88.1%)	647 (100%)
39	輝き	11 (84.6%)	2 (15.4%)	13 (100%)	92	許可	62 (10.7%)	520 (89.3%)	582 (100%)
40	回転	5 (83.3%)	1 (16.7%)	6 (100%)	93	支持	10 (9.0%)	101 (91.0%)	111 (100%)
41	示唆	77 (81.1%)	18 (18.9%)	95 (100%)	94	認証	4 (7.0%)	53 (93.0%)	57 (100%)
42	感動	82 (80.4%)	20 (19.6%)	102 (100%)	95	措置	5 (6.7%)	70 (93.3%)	75 (100%)
43	休養	4 (80.0%)	1 (20.0%)	5 (100%)	96	承認	26 (5.3%)	467 (94.7%)	493 (100%)
44	定義	7 (77.8%)	2 (22.2%)	9 (100%)	97	命令	9 (4.9%)	176 (95.1%)	185 (100%)
45	驚き	7 (77.8%)	2 (22.2%)	9 (100%)	98	制限	5 (4.7%)	102 (95.3%)	107 (100%)
46	負担	21 (75.0%)	7 (25.0%)	28 (100%)	99	支援	9 (4.6%)	186 (95.4%)	195 (100%)
47	振動	11 (73.3%)	4 (26.7%)	15 (100%)	100	制約	5 (4.4%)	109 (95.6%)	114 (100%)
48	猶予	15 (71.4%)	6 (28.6%)	21 (100%)	101	説明	9 (3.4%)	259 (96.6%)	268 (100%)
49	保証	14 (66.7%)	7 (33.3%)	21 (100%)	102	認可	16 (3.0%)	511 (97.0%)	527 (100%)
50	承諾	8 (66.7%)	4 (33.3%)	12 (100%)	103	訓練	7 (2.5%)	275 (97.5%)	282 (100%)
51	確言	8 (66.7%)	4 (33.3%)	12 (100%)	104	教育	15 (2.0%)	731 (98.0%)	746 (100%)
52	フィードバック	9 (64.3%)	5 (35.7%)	14 (100%)	105	指導	6 (1.8%)	325 (98.2%)	331 (100%)
53	損害	154 (63.6%)	88 (36.4%)	242 (100%)					

表 5 を見ると、機能動詞「与える」と共起する割合が 100% のヲ格名詞は 24 語、80% 以上の語は 43 語であった。これらの語は「与える」と強く結びつく傾向があり、以下の意味的特徴がみられる。

I. 受け手の心理状態を表す語

例：「安らぎ」「安心」「楽しみ」「癒し」など

- ・これらの語は与え手から受け手に向けて一方的に心理的影響を及ぼすものである。
- ・この場合、受け手を主語にする場合は「安らぎを得る」²⁾、「安心する」、「楽しむ」「癒される」と言うのが自然である。

II. 受け手の内発的な状態変化を表す語

例：「潤い」「輝き」「感動」など

- ・これらの語は受け手が内発的にその状態を引き起こすことを表すものである。
- ・この場合、受け手を主語にする場合は「潤う」「輝く」「感動する」と言うのが自然である。

III. 受け手の社会的な状態変化を表す語

例：「経験」「勝利」「休養」など

- ・これらの語は受け手が外的な出来事や行為によって社会的・制度的な変化を被ることを表すものである。
- ・この場合、受け手を主語にする場合は「{経験/勝利/休養}する」と言うのが自然である。

IV. 与え手の言語表現活動を表す語

例：「解答」「表現」「解釈」など

- ・これらの語は与え手から受け手に向けて言葉によって説明することを表すものである。
- ・この場合、受け手を主語にする場合は「{解答/表現/解釈}を与えられる」と言うのが自然である。

機能動詞「与える」と共起する割合が0%のヲ格名詞は13語、20%以下語は23語であった。これらの語は、「与える」と結びつきにくい傾向があり、以下の意味的特徴がみられる。

I. 与え手から受け手に対して働きかけを表す語

例：「指導」「教育」「訓練」「認可」など

- ・これらの語は与え手から受け手に対して、許認可や教育などを施すもので、与え手が上位者で、受け手が下位者であるという意味が伴う。
- ・この場合、与え手を主語にして、「{指導/教育/訓練/認可}を与える」ということもできるが、上から目線のニュアンスが伴って、上位者から下位者への一方向的行為という印象を与える。そのため、そのような意味を含めない場合は、「{指導/教育/訓練/認可}する」と言うのが自然である。

3. 機能動詞「与える」の構文的意味

本章では機能動詞「与える」と共起するヲ格名詞（表5の105語）の構文的特徴について考察する。機能動詞「与える」は、主体が他者に何らかの働きかけを行う際に用いられる。典型的には「与え手(A) {ハ/ガ} 受け手(B)ニ Cヲ 与える」という構文を取る。

本研究では与え手(A)と受け手(B)の有情性、およびAとBの作用のあり方に着目し、構文的意味をまとめると表6のようになる。以下、表6に示した順に説明する。

表6 機能動詞「与える」の構文的意味

与え手	受け手	意味	例文	ヲ格名詞の例
有情物	有情物	有情物Aが有情物Bに意志的(直接的)にCの行為を行う	先生は <u>学生に注意を与えた</u> 。 市長は <u>難民に援助を与えた</u> 。	注意、援助、指示、警告、保護、評価、助言、解答
		有情物Aが有情物Bに(非)意志的(間接的)にCの感情を生じさせる	父は <u>母に安らぎを与えた</u> 。 彼は <u>彼女に喜びを与えた</u> 。	安らぎ、喜び、恐怖、不安、満足
		有情物Aが有情物Bに(非)意志的にCの社会状態を生じさせる	先生は <u>学生に経験を与えた</u> 。 彼は <u>チームに勝利を与えた</u> 。	経験、勝利、休養
有情物	無情物	有情物Aが無情物Bに意志的(直接的)に許可や承認を行う	知事は <u>この申請に許可を与えた</u> 。 首相は <u>この協定に承認を与えた</u> 。	許可、承認、同意
無情物	有情物	無情物Aが有情物Bに非意志的(間接的)にCの感情を生じさせる	丁寧語は <u>人に丁寧な感じを与えた</u> 。 この小説は <u>私に感銘を与えた</u> 。	感じ、感銘、感動
		無情物Aが有情物Bに非意志的に影響を及ぼす	自然災害は <u>国民に影響を与えた</u> 。 この事件は <u>市民に損害を与えた</u> 。	影響、損害、被害、誤解、ショック、障害、衝撃
無情物	無情物	無情物Aが無情物Bに非意志的に影響を及ぼす	事件が <u>政治に影響を与えた</u> 。 土石流は <u>家屋に被害を与えた</u> 。	影響、被害、打撃、脅威、ダメージ、損害

3.1 有情物Aが有情物Bに意志的(直接的)にCの行為を行う場合

このタイプは与え手(A)と受け手(B)がともに有情物であり、有情物Aが有情物Bに意志的かつ直接的にCの行為を行う点で特徴がある。この場合、「AがBに対してCという行為を積極的に働きかける」という意味が表される。

例えば、例文(7)～(9)の「注意を与える」「援助を与える」「指示を与える」などの表現は、いずれも有情物Aが有情物Bに対して意図的にある情報や行為を付与し、Bの行動や状況に何らかの影響を及ぼすことを表している。これらの表現は「注意を受ける」「援助を受ける」「指示を受ける」に置き換えられる。この場合、ヲ格名詞には「注意」「援助」「指示」「助言」「警告」「承認」「保護」など、情報・行為の提供に関する名詞が共起して、上位者が下位者に対して一方的に働きかける場面で用いられる。

- (7) a. 妻も、私が子供に注意を与えるのを嫌い、かえって私の方へ刃を向けて来るのである。(中村時吉『タマゴ屋の信仰』)
- b. 子供は妻と私から注意を受けるのが嫌い。
- (8) a. われわれは、南京中央政府がただちに二十九軍に適切な援助を与えるとともに、(藤岡信勝『新・地球日本史』)
- b. 二十九軍はわれわれから援助を受ける。
- (9) a. レイ子は中庭に出ると武闘訓練の学生たちにてきぱきと指示を与えた。(三田誠広『僕って何』)
- b. 武闘訓練の学生はレイ子から指示を受けた。

また、例文 (7a) ～ (9a) の「{注意/援助/指示}を与える」は「{注意/援助/指示}する」といった単純動詞に置き換えることが可能である。ただし、単純動詞に置き換えた場合、語用論的には公式的・権威的なニュアンスが相対的に弱まる。

3.2 有情物 A が有情物 B に(非)意志的(間接的)に C の感情を生じさせる場合

このタイプも、与え手 (A) と受け手 (B) がともに有情物である点で 3.1 と同じであるが、A の行為が非意志的かつ間接的に B に C という感情を生じさせる点で違いがある。この場合、「A が B に対して C という心理的な状態を引き起こす」という意味が表される。この場合、A は B に対して意図的に働きかけることもあれば、非意図的に働きかけることもある。

例えば、例文 (10a) ～ (12a) の「安らぎを与える」「喜びを与える」「恐怖を与える」などの表現は、いずれも A の行為や存在によって、B に新たな感情が生じることを表している。これらの表現におけるヲ格名詞（「安らぎ」「喜び」「恐怖」など）は、A の直接的な行為ではなく、結果として B にもたらされる心理的状态を表しており、これらは「*安らぎを受ける」「*喜びを受ける」「*恐怖を受ける」といった対応する受動的機能動詞文に置き換えると不自然になる。

- (10) a. 確かに父は、母にいくばくかの安らぎを与えたんでしょう。(荒木源『骨ん中』)
 b. *確かに母は、父からいくばくかの安らぎを受けた。
- (11) a. 彼らは人に喜びを与えることを自らの喜びとし、誇りを持って仕事をしています。(家庭画報)
 b. *人は彼らから喜びを受ける。
- (12) a. 彼は他人に恐怖を与えたりはしなかった。(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)
 b. *彼は他人から恐怖を受けたりはしなかった。

また、例文 (10a) ～ (12a) の「{安らぎ/喜び/恐怖}を与える」は「安らぐ/喜ぶ/恐怖する」といった B の自発的な心理的状态の変化を表す単純動詞には置き換えられない。これは、「注意を与える」などは C (ヲ格名詞) も「与える」も A の行為であるのに対し、「安らぎを与える」などは C (ヲ格名詞) は B の状態であり、「与える」は A の行為であるという違いがあるためである³⁾。

この場合、「(人)を安らがせる」「(人)を喜ばせる」「(他人)を恐怖させる」などの使役表現なら使えるが、A の積極的な関与によるという意味が強くなる。これに対し、機能動詞「与える」を使った場合は、A の関与という意味が弱くなり、A の存在や何らかの行為が結果的に B の内面に新たな感情生じさせるという意味になる。

3.3 有情物 A が有情物 B に(非)意志的に C の社会状態を生じさせる場合

このタイプも、与え手 (A) は有情物であり、受け手 (B) も有情物である点で特徴がある。この場合、「A が B に対して(非)意志に B の社会的・制度的な変化をもたらす」という意味が表される。この場合、「経験」「勝利」「休養」は A の行為や出来事などを通じて、B の内部で社会的状態の変化が生じるものであり、もともと A が所有していたものではない。ここで、A は B が「経験」「勝利」「休養」などを得るためのきっかけを提供しているだけである。

例えば、例文 (13a) ～ (15a) の「経験を与える」「勝利を与える」「休養を与える」などの表現は、いずれも A の行為を通じて、B に何らかの変化がもたらされることを表している。

(13) a. 自分としては、そんな貴重な経験を与えてくれたことに、とても感謝しているんです。(吹上流一郎『KAT-TUN 素顔の青春』)

b. *自分は人から経験を受けた。

(14) a. そして、我々は彼らを苦しめることなく、勝利を与えてしまった。(Yahoo!)

b. *彼らは我々から勝利を受けた。

(15) a. その日はちょうど金曜日でしたから、兵士に休養を与えていたのです。(日置一太/桜井均/秦正純『アフリカ 21 世紀』)

b. *兵士は軍から休養を受けた。

また、例文 (13a) ～ (15a) の「{経験/勝利/休養}を与える」を「{経験/勝利/休養}する」といった単純動詞に置き換えると、主語は A ではなく B になる。また、例文 (13b) ～ (15b) のように「*{経験/勝利/休養}を受ける」という言い方はできない。この場合、「*{経験/勝利/休養}をされる」といった受身文にもならず、「{経験/勝利/休養}する」といった単純動詞で言うのが自然である。

3.4 有情物 A が無情物 B に意志的(直接的)に許可や承認を行う場合

このタイプは、与え手 (A) は有情物であり、受け手 (B) は無情物(制度・法令・契約・申請など)である点で特徴がある。この場合、「A が B に対して意志的かつ直接的に許可や承認の行為を行う」という意味が表される。

例えば、例文 (16a) ～ (18a) の「許可を与える」「承認を与える」「同意を与える」などの表現は、いずれも A に許可や承認の決定権があり、その判断を B に対して下すことを表している。ここで「許可を与える」「承認を与える」は、それぞれ「許可を受ける」「承認を受ける」といった受動的機能動詞文に置き換えることができるのに対し、「同意を与える」は「同意を受ける」に置き換えるのは不自然で、「同意を得る」と言う方が自然である。これは、「許可」「承認」は A の決定を B が受け取るという性質のものであるのに対して、「同意」は A の内心的な行為であり、B が受け取るという性質のものではない。

いたためである。

- (16) a. シュワルツコフは渋々ながら特殊部隊（以下S F）の活動に許可を与えたのだった。（笹川英夫『世界の特殊部隊』）
 b. 特殊部隊の活動はシュワルツコフから許可を受けたのだった。
- (17) a. 厚生労働大臣は、前項において準用する薬事法第十四条の三第一項の承認を与えた場合において、（武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律, 2004）
 b. 薬事法第十四条の三第一項は厚生労働大臣から承認を受けた。
- (18) a. 竹四郎はこのとき、長男の相談に同意を与えた。（沢地久枝『石川節子』）
 b. [?]長男の相談は竹四郎から同意を受けた。

また、例文（16a）～（18a）の「{許可/承認/同意}を与える」は「{許可/承認/同意}する」といった単純動詞に置き換えることが可能である。ただし、単純動詞に置き換えた場合、語用論的には公式的・権威的なニュアンスが相対的に弱まる。

3.5 無情物 A が有情物 B に非意志的（間接的）に C の感情を生じさせる場合

このタイプは、与え手（A）は無情物で、受け手（B）は有情物である点で特徴がある。この場合、「A が B に対して非意志的かつ間接的に C の状態を生じさせる」という意味が表される。ここで「非意志的」というのは、A が B に対して直接的に働きかけるのではなく、A の存在や事態の発生が結果的に B の心理状態を誘発することを意味し、「間接的」とは、B が A による外的要因によって引き起こされる心理的变化であることを指す。

例えば、例文（19a）～（21a）の「感じを与える」「感銘を与える」「感動を与える」などの表現は、いずれも A（無情物）の存在や事態の発生によって、B（有情物）の内面に新たな感情を生じさせることを表している。この場合、A は意図して B の心理状態を変えようとしているわけではなく、B が A の影響を受けて自然に心理的变化を経験することを表している。これらは「感じを受ける」「感銘を受ける」「感動を受ける」といった対応する受動的機能動詞文に置き換えることができる。

- (19) a. 丁寧語は、文字通り人に丁寧な感じを与えるという点で、敬語の一つです。（田中浩史『ナースのための実践会話術』）
 b. 人は、丁寧語から丁寧な感じを受ける。
- (20) a. 彼の説教が人々に感銘を与えなかったということではない。（小高毅『オリゲネス』）
 b. 人々は、彼の説教から感銘を受けなかったわけではない。
- (21) a. そのなかにあつて田舎、郷里という地味な題材をとりあげ清純に描いた作品は、都会に住む人々に新鮮な感動を与えたといわれる。（高野静子『蘇峰とその時代』）

b. 都会に住む人々は、作品から新鮮な感動を受けたといわれる。

また、例文 (19a) ～ (21a) の「{感じ/感銘/感動}を与える」は「感じる」「感銘する」「感動する」といった心理変化を表す単純動詞には置き換えられない。これも 3.2 と同様に、「感じを与える」などの C (ヲ格名詞) は B の状態であり、「与える」は A の行為であるという違いがあるためである。

この場合、「(人に丁寧な雰囲気を感じさせる)」「(人々を)感銘させる」「(人々を)感動させる」などの使役表現なら使えるが、事態 A の積極的な関与によるという意味が強くなる。これに対し、機能動詞「与える」を使った場合は、A の関与という意味が弱くなり、事態 A の存在が結果的に B の内面に新たな感情生じさせるという意味になる。

3.6 無情物 A が有情物 B に非意志的に影響を及ぼす場合

このタイプも、与え手 (A) が無情物、受け手 (B) が有情物であり、A が B に対して非意志的に影響を及ぼすことを表すという点で特徴がある。この場合、「A が B に対して C という結果を引き起こす」という意味が表される。前の 3.5 との相違点は、有情物 B に生じる結果が感情的・心理的な状態ではなく、物理的・社会的な影響や被害である点にある。

例えば、例文 (22a) ～ (24a) の「影響を与える」「損傷を与える」「被害を与える」などの表現は、いずれも A (無情物) の存在や事態の発生が、非意志的に B (有情物) に影響をもたらすことを表している。これらの表現は「影響を受ける」「損傷を受ける」「被害を受ける」といった対応する受動的機能動詞文に置き換えられる。この場合、ヲ格名詞には「衝撃」「ショック」「障害」など B に生じる何らかの影響に関する名詞が共起する。

(22) a. 円高は消費者にはどのような影響を与えたであろうか。(電通総研編『「生活大国」宣言』)

b. 消費者は、円高からどのような影響を受けたであろうか。

(23) a. 病気という現象が私たちのからだに損傷を与え、その結果として何らかの症状があらわれてくる。(奈良信雄『名医があかす「病気のたどり方」事典』)

b. 私たちのからだは、病気という現象から損傷を受ける。

(24) a. こういった事案といたしますのは、善良な国民に対しまして大きな被害を与えるという事案でございます。(国会会議録, 1978)

b. 善良な国民は、こういった事案によって大きな被害を受ける。

例文 (22a) の「影響を与える」は「(多大に) 影響する」のように単純動詞に置き換えることが可能である⁴⁾。また、単純動詞に置き換えた場合、公式的・権威的なニュアンスが相対的に弱まる⁵⁾。

一方、例文 (23a) と例文 (24a) の「損傷を与える」「被害を与える」のような表現は、「損傷する」「被害する」といった単純動詞に自然に置き換えることはできない。これは、これらの単純動詞 (サ変動詞) が日本語において存在しないためである。

3.7 無情物 A が無情物 B に非意志的に影響を及ぼす場合

このタイプは、与え手 (A) と受け手 (B) がともに無情物であり、A が B に対して非意志的に物理的・制度的・経済的な影響を及ぼす点で特徴がある。この場合も、「A が B に対して C という結果を引き起こす」という意味が表される。前の 3.6 との相違点は、受け手 (B) が有情物ではなく無情物であるという点にある。

例えば、例文 (25) ～ (27) の「影響を与える」「被害を与える」「打撃を与える」などの表現は、いずれも A (無情物) の存在や事態の発生が、非意志的に B (無情物) に影響や変化をもたらすことを表している。これらの表現は、「影響を受ける」「被害を受ける」「打撃を受ける」といった対応する受動的機能動詞文と置き換えることが可能であり、A の非意志的な原因が B に結果として何らかの影響をもたらすことを表している。

(25) a. この事件は後の政治に大きな影響を与える。 (梅原猛『梅原猛、日本仏教をゆく』)

b. 後の政治は、この事件から大きな影響を受ける。

(26) a. 土石流は家屋、田畑等に壊滅的な被害を与え、ひいては治水施設の劣化を招いている。 (建設白書, 1983)

b. 家屋、田畑等は土石流によって壊滅的な被害を受ける。

(27) a. 原油高騰はいろんな業種に打撃を与えているが、郊外の外食産業もその一つ。 (Yahoo! ブログ)

b. いろんな業種が原油高騰によって打撃を受けている。

例文 (25a) の「影響を与える」は「(大きく) 影響する」のように単純動詞に置き換えることが可能である。ただし、単純動詞に置き換えた場合、公式的・権威的なニュアンスが相対的に弱まる⁶⁾。

一方、例文 (26a) と例文 (27a) の「被害を与える」や「打撃を与える」は、元々「*被害する」「*打撃する」というサ変動詞が存在しないため、単純動詞に置き換えることはできない。

おわりに

本研究では、機能動詞「与える」の共起名詞と構文的特徴について、「受ける」との比較を通じて考察した。その結果、機能動詞「与える」と共起する名詞は、大きく動名詞 (VN)、動詞連用形の転成名詞 (DN)、非動名詞の動作性名詞の 3 種類に分類できることを指摘した。

また、機能動詞「与える」と「受ける」は基本的に能動文と受動文の対立を形成するが、共起する名詞によっては、この対応関係が成立しない場合もあることを指摘した。特に、「安らぎ」「安心」「楽しみ」などの心理状態を表す語、「潤い」「輝き」「感動」など

の受け手の内発的な状態変化を表す語、「経験」「勝利」「休養」などの受け手の社会的な状態変化を表す語、「解答」「表現」「解釈」などの与え手の言語表現活動を表す語という四つの種類は、「与える」と強く結びつく傾向がある。一方、「指導」「教育」「訓練」などの与え手から受け手に対して働きかけを表す語は、「与える」と結びつきにくい傾向がある。

さらに、機能動詞「与える」は、与え手 (A) と受け手 (B) の有情性と作用のあり方によって、以下の七つの構文タイプに分類できることを指摘した。

① 有情物 A が有情物 B に意志的(直接的)に C の行為を行う場合

例：先生は学生に注意を与えた。

「C する」といった単純動詞に置き換えられるが、公式的・権威的なニュアンスは弱まる。また、対応する「C を受ける」を持つ。

② 有情物 A が有情物 B に(非)意志的(間接的)に C の感情を生じさせる場合

例：父は母に安らぎを与えた。

「C する」といった単純動詞には置き換えられず、「C させる」といった使役表現に置き換えられる。ただし、使役表現を使うと、A の積極的な関与によるという意味が強くなる。また、対応する「C を受ける」を持たない。

③ 有情物 A が有情物 B に(非)意志的に C の社会状態を生じさせる場合

例：先生は学生に経験を与えた。

「C する」といった単純動詞に置き換えられるが、主体の自発的行為や経験の積み重ねを示すニュアンスに変わり、「与える」が持つ外的要因や機会提供の意味が失われる。また、対応する「C を受ける」を持たない。

④ 有情物 A が無情物 B に意志的(直接的)に許可・承認を行う場合

例：知事はこの申請に許可を与えた。

「C する」といった単純動詞にも置き換えられるが、公式的・権威的なニュアンスは弱まる。また、対応する「C を受ける」を持つ。

⑤ 無情物 A が有情物 B に非意志的(間接的)に C の感情を生じさせる場合

例：この小説は私に感銘を与えた。

「C する」といった単純動詞には置き換えられず、「C させる」といった使役表現に置き換えられる。使役表現の場合、事態 A の積極的な関与によるという意味が強くなる。また、対応する「C を受ける」を持つ。

⑥ 無情物 A が有情物 B に非意志的に影響を及ぼす場合

例：自然災害は国民に影響を与えた。

事件は市民に損害を与えた。

「影響する」のように対応するサ変動詞が存在する場合には、「C する」といった

単純動詞に置き換えることができる。一方、「*損害する」のように動詞形が存在しない場合には、「C する」といった単純動詞に置き換えることはできない。また、いずれも対応する「C を受ける」を持つ。

⑦ 無情物 A が無情物 B に非意志的に影響を及ぼす場合

例：事件が政治に影響を与えた。

土石流は家屋に被害を与え。

「影響する」のように対応するサ変動詞が存在する場合には、「C する」といった単純動詞に置き換えることができる。一方、「*被害する」のように動詞形が存在しない場合には、「C する」といった単純動詞に置き換えることはできない。また、いずれも対応する「C を受ける」を持つ。

以上、本研究では、機能動詞「与える」と「受ける」は単純な能動・受動の対立ではなく、共起する名詞の性質や構文タイプによって様々な意味的・構文的パターンを形成していることを示した。今後は「与える」と比較しながら機能動詞「受ける」の特徴を考察していきたい。

注

- 1) ここでいう出現率とは、同じヲ格名詞を取る機能動詞「与える」と「受ける」の合計数のうち、「与える」と「受ける」それぞれの出現数の割合のことである。
- 2) 「～を受ける」と「～を得る」などとの使い分けについては別稿で論じることとする。
- 3) ここで「安らぎを受ける」などが使えない理由は、「安らぐ」のは B であり、A からそれを受け取るわけではないためであると考えられる。機能動詞「受ける」については別稿で論じることとする。
- 4) 例文 (24) の「被害」は元々サ変動詞にはならないため、単純動詞の「*被害する」には置き換えられない。
- 5) 「{影響/被害} を与える」は「{影響/被害} を及ぼす」に置き換えることが可能である。両者の違いについては「与える」の方が A の関与が相対的に強く感じられるが、まだはっきりしたことは言えない。これについては今後考察を加えていきたい。
- 6) この「{影響/被害/打撃} を与える」も「{影響/被害/打撃} をもたらす」に置き換えることが可能である。

参考文献

- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹(編) (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』, 大修館書店。
- 朱薇娜 (2013) 「機能動詞「受ける」のヲ格名詞に対する一考察—漢語動名詞を中心に」『日本語／日本語教育研究』4, 75-91 頁。

孟熙 (2012) 「迂言的受け身表現「～を受ける」について—漢語サ変名詞の特徴を中心に」『筑波応用言語学研究』19, 61-73 頁。

村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房。

王丹彤 (2021b) 「語彙統語論的なヴォイス—漢語動名詞と「あたえる」「うける」からなるヴォイス表現」『言語文化学会論集』56, 101-129 頁。

Co-occurring Nouns and Syntactic Constructions of the Light Verb "*Ataeru*"

HAO, Wenwen

Abstract

This study investigates the co-occurring nouns of the light verb "*ataeru*" through a comparative analysis with "*ukeru*", aiming to clarify their syntactic constructions and properties. The co-occurring nouns of "*ataeru*" are categorized into three types: (1) verbal noun (VN), (2) deverbal noun (DN), and (3) non-verbal noun with verbal features.

Although "*ataeru*" and "*ukeru*" generally form an active-passive pair, this correspondence does not always hold depending on the co-occurring nouns. Specifically, nouns that denote the recipient's psychological state (e.g., "*yasuragi*"), spontaneous internal changes (e.g., "*uruoi*" [moisture]), social status (e.g., "*keiken*" [experience]), and the giver's linguistic output (e.g., "*kaitou*" [response]) tend to strongly co-occur with "*ataeru*". In contrast, nouns such as "*shidou*" [guidance], "*kyoiku*" [education], and "*kunren*" [training], which denote direct interventions by the giver, show weaker co-occurrence with "*ataeru*".

Furthermore, the syntactic constructions involving "*ataeru*" can be classified into seven distinct types based on the animacy of the giver (A), the animacy of the recipient (B), and the nature of the action, providing deeper insights into the syntactic behavior and usage of light verbs in Japanese.

Keywords : light verbs, "*ataeru*", "*ukeru*", co-occurring nouns, syntactic constructions

日本語の「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴について

郭 佳麗（名古屋大学大学院生）

要旨

従来、「Vに行く」「Vに来る」は、(1)のように有情物が「V」の行為をするために、ある場所へ物理的移動を表すことを表すとされていた。これに対し、本研究では(2)のような物理的移動が薄い場合もあることを指摘した。

(1) 彼は映画館へ映画を見に {行った/ 来た}。

(2) 彼は勝ちに {行った/ 来た}。

また、従来「Vに行く」「Vに来る」のVの特徴として動作や行為を表す動詞が来やすいことが指摘されているが、同じ動作や行為を表す動詞でも(3)のような場合には使いにくい。

(3) ?彼はアメリカへ生活しに {行った/ 来た}。

以上の点について、本研究では以下の2点を指摘した。

- ① 「Vに行く」「Vに来る」は物理的移動と非物理的移動を表すことができる。物理的移動の場合、「現実世界での移動」と「仮想世界（サイバー世界）での移動」がある。非物理的移動の場合、「勝利の獲得」と「適正な状態への接近」がある。
- ② Vが「留学する」に類する移動過程が含まれる動詞、「生活する」に類する生存を表す動詞、「いる」に類する存在動詞、「着く」に類する到達動詞の場合は使いにくい。

キーワード： 「Vに行く」「Vに来る」、共起動詞、（非）物理的移動、移動の目的

はじめに

本研究は日本語の「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴について論じるものである。「Vに行く」「Vに来る」は「V」の行為をするためにどこかへ行ったり来たりすることを表す表現である。その典型的な用法は、有情物が「V」で表される意図的行為をするために、ある場所へ物理的な移動を表すというものである。例えば、(1)は動作主が映画を見るために映画館へ行くことを表し、(2)は動作主が芝居を観るために舞台に来ることを表している。

- (1) 一緒に映画を見に行ったこともあります。

（太田康男『海のむこうのヒロシマ・ナガサキ』）

(2) あの時代のシェイクスピアの芝居を観にくる人というのはほとんどロンドンの男の人たちであつたろうと思われます。

（小池滋『ゴシック小説をよむ』）

しかし、物理的な移動先が背景化され、単に「V」で表されている実態の実現を目指して行動することを表す用法もある。例えば、(3) (4) は動作主が勝利を得ようと試合などに臨むことを表し、具体的にどこかの場所へ行く（または来る）ことを表すわけではない。

(3) 喜多方高校はきっと全力で勝ちに行く。

（ほぼ日刊イトイ新聞 - 福島の特別な夏。）

(4) 勝ち点1のイタリアはやっぱジラルディーノを中心に勝ちに来ると思いますが、やっぱ不利ですかね？

（Yahoo!知恵袋）

先行研究では「Vに行く」「Vに来る」について(1) (2)の意味は論じているが、(3) (4)の意味には言及されていない。

また、「Vに行く」「Vに来る」のVの特徴として、動作や行為を表す動詞が来やすいことが指摘されているが、同じ動作や行為を表す動詞でも「出張する」や「生活する」などは「Vに行く」「Vに来る」のVには使いにくく、「出張しに {行く/来る}」「生活しに {行く/来る}」とは言にくい。

そこで、本研究では「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴とVに来る動詞の特徴について詳しく考察する。

1. 先行研究

1.1 庵・高梨・中西・山田（2000）

庵・高梨・中西・山田（2000）は、「V₁にV₂」は移動動作の目的を表し、V₁とV₂は同一主体の意志的な動作であり、V₂は「行く、来る、帰る、戻る」などの移動動詞が使われると述べている¹⁾。しかし、V₁の特徴や細かい用法の違いについては論じていない。

1.2 荘司（1997）

荘司（1997）は「Vに行く」と「Vに来る」について、「Vに」の部分は意味的な関係上、動作動詞であれば例外なくマス形²⁾から作ることができると述べている。例えば、(5) (6) は動作動詞である「見る」「会う」のマス形に助詞「に」を伴い、「行く」「来る」

と共に移動の目的を表す。

(5) 映画を見に行った。

(荘司 1997 : 47 の例 (24))

(6) 彼に会いに来た。

(荘司 1997 : 47 の例 (25))

しかし、「Vに行く」の「V」が「配達する（移動過程が含まれる）」という動作動詞の場合でも、例えば (7) のように不自然になることがある。そのため、どのような動詞が V に来るかについて、さらに詳しく見る必要がある。

(7) a. *4 回配達しに行かれています、不在通知投函済みです。³⁾

b. 4 回配達に行かれています、不在通知投函済みです。

(Yahoo!知恵袋)

1.3 新井 (2016)

また、新井 (2016) は荘司 (1997) を取り上げながら、日本語の「Vに行く」「Vに来る」の構文は移動の目的を表し、V として非対格動詞は共起せず、動作や行為を表す動詞のみ共起できると述べている。ただし、非対格動詞でも生起できる場合があるとしている。例えば、(8) (9) は「死ぬ」「感じる」でも、意図的な行為として解釈される場合は「V」として生起できる。

(8) これから死に行く。⁴⁾

(9) 原宿に若者の空気を感じに行く。

(いずれも新井 2016 : 10)

一方、(10) (11) のように、状態動詞や瞬間動詞は「V」として共起できないとしている。それは意図的な行為としての解釈を持ち得ないためであると説明されている。しかし、意図的に誰かのそこにいるあるいはどこかに着くと解釈されること自体が可能であるため、新井 (2016) の説明は理解しにくい。

(10) *太郎がそこに居 (い) に行く。

(11) *太郎が公園に着きに行く。

(いずれも新井 2016 : 10)

例えば、(12) (13) の「居る」「着く」は意図的な解釈であるのに非文となる。

(12) *太郎は仕事を休んでまで彼女のそばに居に行った。

(13) *太郎は 15 時までに公園に着きに行かなくてはならない。

(12) の「居る」は「そばにいない→いる」のように移動の前後で「太郎」の状態に変化が生じているが、「Vに行く」（「Vに来る」も）との共起は不自然である。このことから、「Vに行く」「Vに来る」のVには「居る」のような存在動詞は使いにくいことが分かる。

一方、(13) の「着く」は到着した時点でその行為が完了するため、到着後の行為を表す「Vに行く」「Vに来る」とは相容れないと考えられる。

また、(14) の「寝る」は「居る」と同じ静的な動詞であるが、「起きている→横になる（または眠る）」という動作が行われるため適格な文になると考えられる。(15) の「切る」は「着く」と同じ意図的な瞬間動詞であるが、「着く」と違って到着した後で「切る」という動作が行われるため適格な文となる。新井 (2016) にはこの点の説明が欠けている。

(14) また駐車場に寝に行く事は可能でしょうか？

(Yahoo!知恵袋)

(15) 髪を切りに行きたい！

(社会福祉法人 なのはな会 ウェブサイト／事業紹介)

これに関して、本研究では「生きている→死ぬ」「若者の空気を感じていない→感じる」「起きている→寝る」「切っていない→切る」のように移動後にその行為が行われる場合は「Vに行く」「Vに来る」のVになりやすいのに対し、「出張する」や「生活する」のように移動前あるいは移動中からその行為が開始している場合は「Vに行く」「Vに来る」のVになりにくいことを指摘する。

2. 「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴

本章では「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴について、物理的移動かどうかによって「物理的移動」と「非物理的移動」に分類する。「物理的移動」はすでに先行研究によって指摘されている意味であり、「非物理的移動」は本研究で新たに指摘する意味である。

2.1 物理的移動

本節では「Vに行く」と「Vに来る」の「物理的移動」について論じる。これは出来事が現実世界で起こっているのか仮想世界で起こっているのかによって、さらに「現実世界で

の移動」と「仮想世界（サイバー世界）での移動」の2つに分けられる。

2.1.1 現実世界での移動

「現実世界での移動」は最も一般的な用法であり、現実世界において有情物が「Vに行く」と「Vに来る」の「V」で表される意図的行為をするために、ある場所へ物理的な移動を表することを表す。例えば、(16)は動作主が夕食を食べるためにレストランに行くことを表しており、(17)は動作主が遊ぶためにこの家に来ることを表している。(18)は動作主が薪をとるために裏山へ行くことを表しており、(19)は動作主が苦情を言うために主人のところへ来ることを表している。(20)は動作主が出迎えるためにハレまで行く意味を表しており、(21)は動作主が魚籠を覗くために半兵衛方の軒下まで来る意味を表している。これらは二格、へ格、マデ格を用いて「行く」「来る」の着点を示している。(以下、着点は囲み線で、Vのヲ格は下線(波線)で、「Vに行く」「Vに来る」は下線(直線)で示す。)

- (16) 転校していく前夜、四年生のお兄ちゃんとコウスケの二人を連れてレストランに
夕食を食べにいきました。

(上條さなえ『子どもの言葉はどこに消えた?』)

- (17) あなたや博美さんがこの家に遊びに来てくださるようになって、わたくしの生活
はいきいきしてきました。

(小池真理子『蠍のいる森』)

- (18) 裏山へ薪をとりに行く。

(井上靖『しろばんば』)

- (19) 人は主人のところへ苦情を言いにきました。

(トルストイ『イワンのばか』)

- (20) ハレまで彼を出迎えに行くことができなかった。

(久保田慶一『バッハの息子たち』)

- (21) なかにはわざわざ半兵衛方の軒下まで魚籠を覗きにくる者もいた。

(三浦哲郎『昭和文学全集』)

しかし、中には次のように動作主が無情物の場合もある。例えば、(22)はロボットが部品を取るために倉庫へ行くことを表しており、(23)は掃除機がゴミを吸うために奥の部屋へ行くことを表している。(24)はドローンが荷物を届けるために部屋へ来ることを表しており、(25)はタクシーが乗客を迎えるために乗客のいるところへ来ることを表している。このような使い方は擬人法であり、無情物の動作を引き起こしたのは有情物である。そのため有情物に準じて考えることができる。

- (22) ロボットが倉庫へ部品を取りに行った。
 (23) 掃除機が奥の部屋へゴミを吸いに行った。
 (24) ドローンが部屋に荷物を届けに来た。
 (25) タクシーが乗客を迎えに来た。

以上のように、「現実世界での移動」は現実世界において有情物が「Vに行く」と「Vに来る」の「V」で表される意図的行為をするために、ある場所へ物理的な移動をすることを表す。この場合、Vには様々な意志動詞が使われる。

(26) の「年寄りになる」は普通無意志の自然変化を表すが、ここでは意志的に素敵な年寄りになろうと行動するという意味を表しているため、この「なる」は意志動詞として使われている。(27) の「なる」も同様に意志動詞として使われている。

- (26) 素敵な年寄りになりに行こう。

(落合恵子『バーバラが歌っている』)

- (27) わざわざアメリカに、臆病で欲求不満な男になりに来たんじゃない。

(南城秀夫『リュウキュウ青年のアイビー留学記』)

2.1.2 仮想世界（サイバー世界）での移動

一方、「仮想世界での移動」は「現実世界での移動」から派生した意味であり、コンピューターやインターネットの世界において有情物が「Vに行く」と「Vに来る」の「V」で表される意図的行為をするために、ある場所へ物理的な移動をすることを表す。例えば、

(28) は動作主が契約しているプロバイダのホームページを見るためにスマホやパソコンを使って該当するページに行くことを表しており、(29) は動作主がブログを読むためにウェブ上で該当するページに行くことを表し、(30) は動作主がメールを読み込むためにウェブ上で該当するページに行くことを表している。(31) は「誰か」が自分（書き手）のHPを見るためにスマホやパソコンを使って書き手側のページに来ることを表しており、(32) は動作主である「みんな」が書き手のブログを読むためにウェブ上で書き手側のページに来ることを表している。この場合、「Vに行く」の「V」には「見る」「読む」「読み込む」などの動詞が使われ、「Vに来る」の「V」には「見る」「読む」などの動詞が使われる。

- (28) プロバイダの料金体系やサービスはたまに変わることもあるので、契約しているプロバイダのホームページを時々見にいて、現在の料金体系やサービス内容がどうなっているかをチェックしておくようにしましょう。

(斉藤弘子『55 才からの電子メール入門』)

(29) としては凄い画期的な新境地だって思ったから、つんくがブログでこの曲について何を言ってるのか読みに行ったんですよ。

(ハロプロサウンド研究所:モーニング娘。)

(30) YAHOO のようなウェブ上のメールなら、携帯でアクセスして読み込みに行くのは可能です。

(Yahoo!知恵袋)

(31) HP をもっている人は、自分の HP を誰が見にきたのかわかるのでしょうか？

(Yahoo!知恵袋)

(32) Lei さんの命はもうソウルメイトさんや旦那さんや、ブログ読みに来るみんなのものでもあるんじゃないかなあ、なんて思ったりします。

(ポンコツ家族の取扱いマニュアル - 子どもの命は誰のもの? 1)

しかし、中には次のように動作主が無情物の場合もある。例えば、(33) はデータベース関数の範囲がその事業を読むために該当するページに行くことを表しており、(34) は AI が最適な答えを探すためにどこか (パソコンのデータベースなど) へ行くことを表している。(35) は監視システムが異常を検知するために、(36) は気象衛星が台風の情報を収集するために電子的に話し手 (書き手) 側に来たことを表している。このような使い方も擬人法であり、无情物の動作を引き起こしたのは有情物である。そのため有情物に準じて考えることができる。

(33) 賃金データベースに対して、この予算システムの事業所名選択をすると、すべてのデータベース関数の範囲が、その事業を読みに行くように設定してありますので、どの事業でも使えるようになっています。

(森川和行『医療法人・医療生協の会計改革』)

(34) AI が最適な答えを探しに行った。

(35) 監視システムが異常を検知しに来た。

(36) 気象衛星が台風の情報を収集しに来た。

以上のように、「仮想世界での移動」は主に電子機器上の移動に使われている。この場合、「Vに行く」の「V」には「見る」「読む」「読み込む」などの動詞が使われ、「Vに来る」の「V」には「見る」「読む」などの動詞が使われている点で特徴がある。

2.2 非物理的移動

本節では「Vに行く」と「Vに来る」の「非物理的移動」について論じる。「非物理的移動」は「物理的移動」から派生したものであり、着点が抽象的な場所であるため、物理的

場所の意味が薄くなる。これには「勝利の獲得」と「適正な状態への接近」の2つがある。

2.2.1 勝利の獲得

「勝利の獲得」は物理的移動が薄く、有情物が勝利の段階に向かうことを表す。その典型的な例は(37)のように、動作主がある勝負において「勝つ」という段階に向かうことを表し、(38)のように、動作主がある勝負において「勝つ」という段階に向かってこの場に来ることを表す。この場合、具体的にある場所へ行くまたは来るという意味はない。

(37) 喜多方高校はきっと全力で勝ちに行く。

(ほぼ日刊イトイ新聞 - 福島の特異な夏。: 例(3) 再掲)

(38) 勝ち点1のイタリアはやっぱりジラルディーノを中心に勝ちに来ると思いますが、やっぱり不利ですかね？

(Yahoo!知恵袋: 例(4) 再掲)

また、(39)の「満点を取る」、(40)の「攻める」、(41)の「決める」も「勝つ」と同様に「勝利の獲得」の意味を表す。これらの場合も物理的な着点がなく、「勝利の獲得」をするために、勝利を得る方向へと向かっていくことを表す。(42)の「実現する」、(43)の「ラプソーンを倒す」、(44)の「パスを決める」も「勝つ」と同様にある「勝利を獲得する」の意味を表す。これらの場合も物理的な着点がなく、「勝利の獲得」をするために、勝利を得る方向へと向かっていくことを表す。この場合、話し手(書き手)の視点は勝利の獲得を目指す起点側(「Vに行く」)または着点側(「Vに来る」)にあり、「Vに行く」と「Vに来る」の「V」には「(勝利を)得る」に類する動詞が来る点で特徴がある。

(39) 理科の難易度は、上の方々が言われているのでおおむねそのとおりなのですが、「満点を取りに行く」という命題が現れてきます。

(Yahoo!知恵袋)

(40) この戦術で攻めに行く。

(41) 黒はどこから碁を決めにいけばよいのでしょうか。

(王銘琬『銘[エン]流石の動き「広い方から押し込む」』)

(42) 「仮に印象派の画家たちによって引き起こされた変動が素晴らしいものであるとしても、それでもなお、ひとりの天才画家が新しい方式 nouvelle formule を実現しに来るのを待たなければならない」と。

(実著者不明『いま、なぜゾラか』)

(43) ラプソーンを倒しにきてるんですが初めて、2つあるはずのレバーが一箇所しか

見当たらないし、賢者の石も拾えません。

(Yahoo!知恵袋)

(44) 彼は試合を決める絶妙なパスを決めに来た。

さらに、基本義である「物理的移動」と派生義である「非物理的移動」の両方に跨るものもある。例えば、(45)は彼がアパレル市場を奪うために、物理的に移動して自分の領域から他人の領域に攻めに行くと捉えることもできるし、思考上での概念的な移動として捉えることもできる。この場合、話し手（書き手）は現状のままで、動作主である「彼」だけが勝利を獲得しに行ったというニュアンスになる。(46)も同様である。また、(47)は新ブランドがファッションの最前線に立つために、物理的移動して元の領域から話し手（書き手）の領域に攻めに来たと捉えることもできるし、思考上での移動として捉えることもできる。この場合、話し手（書き手）の視点は攻められる側にあり、相手から脅かされる状況にあるというニュアンスになる。(48)も同様である。

(45) 彼はアパレル市場を奪いに行く。

(46) 彼は新しいビジネスチャンスを狙いに行く。

(47) 新ブランドがファッションの最前線を攻めに来た。

(48) 若手議員が政治の古い体制を潰しに来た。

以上のように、「勝利の獲得」は勝利の段階に向かうことを表し、具体的にある場所へ行くまたは来るという意味はない。これは「Vに行く」「Vに来る」の物理的移動の意味からの派生的な用法と考えられる。

2.2.2 適正な状態への接近

「適正な状態への接近」は物理的移動が薄く、当該の対象の適正な状態に近づくことを表す。例えば、(49)はゴルフクラブが持つ特性に自分の体を適応させることを表しており、(50)は試合に適合する体重に近づくことを表している。(51)はゴルフクラブが自分の体の特性に適応して近づいてくることを表しており、(52)は彼が私のスケジュールに近づいてくることを表している。

(49) なぜなら、柔軟な体を持ち、毎日三百球以上打ち込める人ならいざ知らず、現状の体力を維持するのがやっとなというくらいの一般的な運動量の人が、自分をクラブに合わせに行くのは至難の業だと思うからです。

(高橋治『シングルをめざす人のゴルフクラブの選び方』)

(50) 体重を試合に向けて調整しに行く。

- (51) なぜ、楽しいゴルフを難しい道具を使って、わざわざ苦勞しなければならないのでしょうか。むしろ、クラブが自分に合わせにきてくれるようであればいいと思います。

（高橋治『シングルをめざす人のゴルフクラブの選び方』）

- (52) 彼は私に合わせてスケジュールを調整しに来た。

また、(53) は自分の意見を上司の考えに近づくことを表しており、(54) は彼の発音が私の発音に近づいてくることを表している。これらの「行く」と「来る」が表している移動は二格で表されるものに適合させるために、ヲ格対象の状態を適正な状態に向かわせるという抽象的な移動である。このような「適正な状態への接近」は二格によって着点が提示されているが、その着点が抽象的であり、「Vに行く」「Vに来る」の「V」には「合わせる」に類する動詞が来るのが特徴である。

- (53) 自分の意見を上司の考えに寄せに行く。

- (54) 彼は発音を私の発音に近づけに来た。

以上のように、「適正な状態への接近」は対象の状態に近づくことを表し、具体的にある場所へ行くまたは来るという意味はない。これは「Vに行く」と「Vに来る」の物理的移動の意味からの派生的な用法と考えられる。

3. 「Vに行く」と「Vに来る」のVに来にくい動詞

本章では「Vに行く」と「Vに来る」のVに来にくい動詞について考察する。「Vに行く」と「Vに来る」の共起動詞について、先行研究では動作や行為を表す動詞が使われることが指摘されているが、共起しない動詞についてはあまり論じられていない。そのため、本研究で詳しく考察する。「Vに行く」と「Vに来る」の「V」になりにくい動詞には①「留学する」に類する移動過程が含まれる動詞、②「生活する」に類する生存を表す動詞、③「いる」に類する存在動詞、④「着く」に類する到達動詞がある。

①「留学する」に類する移動過程が含まれる動詞

(55a) は動作主が留学するために海外に行くことを表しているが不適格な文であり、(55b) のように言うのが自然である。(56a) は動作主が留学するために日本に来ることを表しているが不適格な文であり、(56b) のように言うのが自然である。これは「Vに行く/来る」の構造内で意味の重複が起きているためである。「Vに行く/来る」は移動してからそこでVの行為を行うことを表すが、「留学する」は移動先での勉強だけでなく、移動元から移動先への移動の意味も含む。そのため、「留学する」は動作や行為を表す動詞

であっても「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。

(55) a. *親の反対を押し切って留学しに行ったからこんな目に遭うんだ。

b. 親の反対を押し切って留学に行ったからこんな目に遭うんだ。

(河野正一郎・浜田敬子『AERA (アエラ)』)

(56) a. *海外から友達が半年間、日本に留学しに来ました。

b. 海外から友達が半年間、日本に留学に来ました。

(Yahoo!知恵袋)

また、(57)と(58)も同様である。「出張する」には移動過程が含まれるため、動作動詞であっても「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。このような動詞にはほかに「訪問する」、「配達する(移動過程が含まれる)」などがある。

(57) a. *先日、東京に出張しに行きました。

b. 先日、東京に出張に行きました。

(合同会社琉球の未来:人はここまで、変わる!!)

(58) a. *それに中国に出張しに来る日本人、よく飛行機の中で転職の雑誌読んでるよ。

b. それに中国に出張に来る日本人、よく飛行機の中で転職の雑誌読んでるよ。

(谷崎光『中国てなもんや商社』)

さらに、(59)のように、動作主である「社長」が「輸入」をするためにアメリカに行く/来ることを表す文は適格であるのに対し、(60)のように「輸出」をする文に置き換えると不自然になる。

(59) 社長はアメリカへ輸入しに {行く/来る}。

(60) ?社長はアメリカへ輸出しに {行く/来る}。

「輸入する」は外国から国内に商品を持ち込む行為であり、外国であるアメリカに到着してからその行為を行うため、「Vに行く/来る」と共起する。これに対し、「輸出する」は国内の商品を外国に送る行為であり、外国であるアメリカに到着する前からその行為を行うため、「輸出する」は動作動詞であっても「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。ただし、(61)のようにアメリカが輸出の起点であるという文脈であれば、「輸出しに行く/来る」も適格な文となる。

(61) 社長はアメリカへ、アメリカからカナダへと輸出しに {行った/来た}。

②「生活する」に類する生存を表す動詞

(62) は動作主である「彼」が生活するためにアメリカに行くまたは来ることを表しているが不自然な文であり、(63) や (64) のように言うのが自然である。これは「Vに行く/来る」は移動先で新規の動作を実現することを表すためである。(62) の場合、アメリカに行く前も後も何らかの生活をしている点では同じである。そのため、「生活する」は動作や行為を表す動詞であっても「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。

(62) ?彼はアメリカへ生活しに {行く/来る}。

(63) 彼はアメリカへ新しい生活をしに {行く/来る}。

(64) 彼はアメリカへ {行って/来て} 生活した。

同様に、「暮らす」、「居住する」、「生きる」、「住む」なども移動の前後で動作主が生きて生活していることに変わりはないため、「Vに行く/来る」の「V」になりにくいと考えられる。

③「いる」に類する存在動詞

(65) は動作主である「彼」が彼女のそばにいたために行くまたは来ることを表しているが不適格な文である。これは「Vに行く/来る」は移動先での新規の状態ではなく、新規の動作を実現することを表すためであると考えられる。(65) の場合、「そばにいない→いる」のように移動の前後で変化が生じているが、動作がなく単なる存在の状態を表している。そのため、「いる」は意図的であっても「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。

(65) *太郎は泣いている彼女のそばに居に {行く/来る}。

同様に、「存在する」も動作がなく単なる存在の状態を表しているため、「Vに行く/来る」の「V」になりにくいと考えられる。

④「着く」に類する到達動詞

(66) は動作主である「太郎」が公園に着くために行くまたは来ることを表し、(67) は「太郎」が会場に入るために行くまたは来ることを表しているが不適格な文である。これは「Vに行く/来る」のVは到着後の行為を表すためである。(66) や (67) の場合、到着した時点で「着く」「入る」という行為が完了するため、「着く」は「Vに行く/来る」の「V」になりにくいのである。

(66) *太郎は公園に早く着きに {行く/来る}。

(67) *太郎は会場に入りに {行く/来る}。

同様に、「到着する」、「到達する」、「(広間に)出る」なども到着した時点でその行為が完了するため、「Vに行く/来る」の「V」になりにくいと考えられる。

以上のように、動作や行為を表す動詞でも①「留学する」に類する移動動詞、②「生活する」に類する生存を表す動詞、③「いる」に類する存在動詞、④「着く」に類する到達動詞は「Vに行く/来る」の「V」になりにくいことを指摘する。

おわりに

以上、本稿では「Vに行く」と「Vに来る」の意味特徴について考察した。その結果、以下の2点を明らかにした。

- ①「Vに行く」「Vに来る」は物理的移動と非物理的移動を表すことができる。物理的移動の場合、「現実世界での移動」と「仮想世界(サイバー世界)での移動」がある。非物理的移動の場合、「勝利の獲得」と「適正な状態への接近」がある。
- ②「Vに行く」「Vに来る」は、①「留学する」に類する移動過程が含まれる動詞、②「生活する」に類する生存を表す動詞、③「いる」に類する存在動詞、④「着く」に類する到達動詞が「V」に来にくい。

また、「Vに来る」は移動先での動作を表すが、(68)の場合は規制の影響が来ることを表している。今後はこのような「Vに来る」と「てくる」の違いについても分析していきたい。

- (68) a. これが、もしこの生産技術体系というものが中国なり北鮮に流れたらアメリカの戦略にそごを来すから、これを規制しに来たし、同時にアメリカはいろんなものを調べて行った。

(国会会議録)

- b. アメリカはこれを規制してきた。

注

- 1) 原文:「「～しに」は移動動作の目的を表します。「PしにQ」において、PとQは同一主体の意志的な動作であり、また、Qは「行く、来る、帰る、戻る、上がる、降りる」などの移動動詞に限られます。」(p. 215)

- 2) 「マス形」は「連用形」を指している。
- 3) 本稿で出典の記載がないものは作例である。
- 4) 例文 (8) ~ (11) の下線は筆者 (郭佳麗) によるものである。

参考文献

- 新井文人 (2016) 「日本語の「Vに行く」の統語構造と意味構造に関する一考察」『Theoretical and applied Linguistics at Kobe Shoin : トークス』 19、1-16 頁。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 荘司育子 (1997) 「日本語の補文構造に関する一考察: 「Vに行く」構文について」『日本語・日本文化』 23、39-53 頁。

コーパス

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)
- NINJAL-LWP for TWC (<https://tsukubawebcorpus.jp/>)

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125 の財政支援を受けたものです。この場を借りて「東海国立大学機構メイク・ニュー・スタンダード次世代研究事業」に御礼申し上げます。

Semantic Characteristics of Japanese Constructions "V-*ni iku*" and "V-*ni kuru*"

GUO, Jiali

Abstract

Traditionally, the constructions "V-*ni iku*" and "V-*ni kuru*" have been understood to express the physical movement of an animate subject to a certain location in order to perform the action denoted by V, as seen in (1).

(1) *Kare wa eigakan e eiga o mi ni {itta/kita}*.

However, this study points out that there are also usages where physical movement is minimal or abstract, as in (2).

(2) *Kare wa kachi ni {itta/kita}*.

While previous studies have noted that V in these constructions tends to be an action-oriented verb, this study also identifies examples, such as in (3), where even action verbs are awkward.

(3)³*Kare wa Amerika e seikatsu shi ni {itta/kita}*.

Based on these observations, this study identifies the following two points:

- (1) The constructions "V-ni iku" and "V-ni kuru" can express both physical and non-physical movement. Physical movement includes both movement in the real world and movement in virtual (cyber) space. Non-physical movement includes acquiring victory and approaching an appropriate or desirable state.
- (2) When V is a verb that involves a movement process (e.g., "ryuugaku suru"), a verb expressing a state of existence (e.g., "seikatsu suru"), a verb of existence (e.g., "iru"), or a goal-oriented verb (e.g., "tsuku"), the use of these constructions becomes less acceptable.

Keywords : "V-ni iku", "V-ni kuru", co-occurring verbs, (non-)physical movement, purpose of movement

いわゆる様態の「ソウダ」と推量の「ヨウダ」の異同 —中国語“好像”との対応関係を中心に—

劉 怡（名古屋大学大学院生）

要旨

いわゆる様態の「ソウダ」と推量の「ヨウダ」はいずれも中国語では“好像”に訳されることがあるため、中国人日本語学習者にとってこれらの違いはわかりにくい。そこで、両者の違いを明らかにするために、両者の中国語訳“好像”との比較を行うことにした。まず、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」を比較し、次に“好像”の意味を分析し、さらに両者と“好像”の対応関係を検討した。

分析の結果、“好像”は「(シ) ソウダ」よりも推量、推測、推論を表す「ヨウダ」に対応することが多いものの、特定の文型では「(シ) ソウダ」と同様に推量を表す場合もあることがわかった。特に、“快要（まもなく）”“马上（もうすぐ）”と共起する際には、知覚情報に基づいた直感的な判断（推量）を示し、「(シ) ソウダ」との対応関係が見られた。

また、日本語教材における“好像”の訳語の誤用についても検討した。例えば、「頭がよさそうだ」や「おいしそうに食べる」といった直感的な印象を表す表現が“好像”に訳されることで、本来の推量の意味が表されず、行動や外見に基づいた推測として理解されてしまうという問題が生じることを指摘した。

キーワード：（シ）ソウダ、ヨウダ、好像、対応関係

はじめに

いわゆる様態の「ソウダ」¹⁾と推量の「ヨウダ」²⁾（以下それぞれ「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」と記す）はどちらも非断定的表現で類似したものである。例えば、(1) a と (1) b はいずれも雨が降ることを断言するのではなく、より慎重に天気状況を表現している。そのため、日本語学習者は両者の違いを捉えるのに困難を覚え、(2) a のように「ヨウダ」を用いるべきところで「(シ) ソウダ」を用いる、(2) b のように「(シ) ソウダ」を用いるべきところで「ヨウダ」を用いるといった誤用が生じることがある。

(1) (曇り空を見て) a. 雨が降りそうだ／b. 降るようだ。³⁾

(2) a. 彼は技術の点で若い運動員に負けないが、体力について見る限り、全盛期は過ご

しそうだ（→過ぎているようだ）。（市川 1997:47）

b. だんだん暗くなって、雨が降るようだ（→降りそうだ）。（市川 1997:53）

また、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」は表 1⁴⁾のように、中国語話者を対象とした日本語教科書⁵⁾において、同じ語に訳されることがあるため、中国人日本語学習者が両者を区別することは一層難しくなっている。そのため、本稿では、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いを明らかにすることを目的として、これらの表現と中国語訳との対応関係を明らかにする。

表1 「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の中国語訳

教材名	「(シ)ソウダ」の中国語訳	「ヨウダ」の中国語訳
『新編日语 1、2』	看上去、像、眼看、似乎、看来、[翻訳なし]	好像
『新編日语教程 2』	…的样子、眼看、看起来、[翻訳なし]	好像
『标准日本語初级下』	看上去、 好像 、[翻訳なし]	好像、看来、看起来
『日语综合教程 1、2』	看上去、 好像 、看起来、看样子、像	好像
『大家的日语 2』	看上去、 好像 、看起来、看着	好像

表1を見ると、“好像”“看来”“看起来”がいずれも両者の中国語訳として使われていることがわかる。特に“好像”がより頻繁に使われている。そこで、本稿では「(シ) ソウダ」、「ヨウダ」及び両者の中国語訳である“好像”に焦点を当て、それぞれの表現と中国語“好像”との関係性を検討することで、中国人日本語学習者がこれらの表現をより正確に習得するための手がかりを提示する。

以下、第1章では「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の共通点と相違点を分析し、第2章では“好像”の意味を明らかにする。その上で、第3章では、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」が“好像”とどのように対応するかを検討し、最後に全体をまとめる。

1. 「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」

1.1 「(シ) ソウダ」、「ヨウダ」に関する先行研究

「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」に関する先行研究を整理すると表2のようになる。

表2 「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の意味

研究者名・年	「(シ) ソウダ」	「ヨウダ」
鈴木(1972)	①そのような外見をしている。 ②その動き・可能性が実現することを予測させる状態にある。	客観的根拠に基づいて推定される事柄(または現象自身がそうした推定を下させるような様子をしていること)を表す。
寺村(1984)	—	自分の観察をもとに推量する。
豊田(1987)	様態、切迫、予測	—
中島(1991)	未確認の事柄の様子や状態を述べる。	話し手が何らかの手段で確かめた実際の状況に関してその様子や状態を述べる。
森山(1995)	—	特定状況を観察して話者の判断内容をそれに類似したものとして述べる。

大場 (1999)	推量系：推測、予測 描写系：様態、寸前、非実	—
杉村 (2000)	様相を表す。	根拠に基づいた推量を表す。
森山他 (2000)	状態把握様相や出来把握様相を表す。	観察された状況をもとに、それと結びつく事態の存在を捉える。
澤田 (2007)	—	ある結果をもとに、その原因を推量する。

表2のように、「(シ) ソウダ」については、対象の様子（様態、様相）を表すという見解が多く、一部の研究では、「予測」、「推測」などの意味も含まれるとされている。「推測」はなんらかの根拠に基づいて行われることである。一方で、「予測」はまだ発生していない事象に対する推測を指すため、本稿では「推測」の一種として同一視する。これにより、「(シ) ソウダ」の意味は「対象の様子」を表すか、「推測」を表すかの問題に帰着することになる。

この点について、森山他 (2000) は次の (3) (4) のように使われることを根拠に、後者の意味を表さないと指摘している。「推測」を表すとする、(3) のように仮定文では使われないはずだからである。また、(4) の場合、可能性が提示された時点でその可能性には現実味があることが前提となる。すぐに否定すると、提示された根拠に矛盾が生じ、一貫性がなくなるため、「(シ) ソウダ」は使われないはずだからである。しかし、(3) の出典である小説を確認すると、「海は乳色の霧の中でまだ静かな寝息を立てていた」とある。つまり、話者は霧のある状況で発話している。そのため、「霧があれば」は「霧があるのだから」という判断の理由を表しており、(3) は「推測」を否定する根拠にはならない。

(3) 「霧があれば、いい天気になりそうだなあ」⁶⁾ (「三匹の蟹」) (森山他 2000:154)

(4) あの荷物、{落ちそうだ/??落ちるようだ} が、落ちない。(森山他 2000:155)

一方、「ヨウダ」に関する先行研究では、「ヨウダ」が観察や情報に基づいて使用される点では一致しているが、その意味については異なる見解が示されている。鈴木(1972)は「推定」とし、寺村 (1984) や杉村 (2000) などは「推量」とし、中畠(1991)は「様子」としている。

先行研究で使われている「推量」、「推測」、「推定」、および類似の表現である「推論」はいずれも確実な事実ではなく可能性を見出す行為を指し、「様子」「様相」「様態」は物事の状態を表す点で共通している。そこで、本稿では、まずこれらの概念を明確に定義した上で、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いについて検討する。

1.2 先行研究における概念の整理

本節では、こうした混同を避けるため、これらの概念を表3に示すように定義し、類似概念を明確に区別する。

表3 「推量」「推測」「推論」「推定」「様子」「様相」「様態」の定義

推量	知覚情報（無意識的に五感を通じて得られる情報）から直感的に判断すること。
推測	観察 ⁷ 情報（意図的に注意深く確認して得られる情報）を基に、可能性を考慮しながら判断を行うこと。
推論	既知情報（過去の経験や知識）と眼前の事実を結びつけ、論理的な思考を経て、結論を導き出すこと。
推定	直接的な観察を伴わずに、複数の情報を統合し、論理的な分析を経て結論を導き出すこと。
様子	その場で視覚によって捉えられるものである。
様相	目に見えるものだけでなく、物事の全体的な雰囲気や傾向といった抽象的なものである。
様態	事物の実体と密接に関わり、その内在的な特性に基づいて具体的な形となって外部に現れるものである。

表3の概念を具体的な例で説明すると、「推量」は(5)aで示すように、話者が焦げたにおいという知覚情報を得たが、その原因を具体的に確認せず、直感的に「何かが焦げている」と判断することである。一方、「推測」は(5)bのように、話者が玄関の状況を観察し、その情報を根拠に「誰かが家に入った」可能性があると判断することを指す。「推論」は(5)cのように、「ランチ時間にはいつも店が混んでいる」という既知の情報と「今はちょうどその時間だ」という眼前の事実を結びつけ、論理的に「今、店は混んでいるはずだ」と結論を導くことである。そして、「推定」は(5)dのように、複数の客観的な証拠をもとに論理的に分析した上で結論を導き出すことである。

- (5) a. (焦げたにおいがする。) 何かが焦げている。(推量)
- b. (玄関のドアが開いている。) 誰かが家に入ったのだろう。(推測)
- c. (ランチ時間にはいつも店が混んでいる。今はちょうどその時間だ。) 今、店は混んでいるはずだ。(推論)
- d. 現在の証拠から見ると、彼が容疑者である。(推定)

また、「様子」「様相」「様態」の違いについて見ると、「様子」を表す(6)aは、具体的に直接的に捉えられる「顔」の状態を示している。一方、「様相」は(6)bのように、目に見える活気だけでなく、「町」全体に広がる活発な雰囲気を表している。「様態」は(6)cのように、「歩く」という動作の単なる見た目の印象にとどまらず、意識的に注意を払っているという行動の質を含んでいる。

- (6) a. 彼は疲れた顔をしている。(様子)
- b. この町は活気に満ちている。(様相)
- c. 彼は慎重に歩いている。(様態)

結論を先取りすると、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」はどちらも「様態」を含む点で共通し、前者は「推量」を表す一方で、後者は「推量」、「推測」、「推論」を表すことがあるという点で相違する。次項で、この点について論じる。

1.3 「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の比較分析

ここでは、「推量」「推測」「推論」と「様態」の2つに分けて、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いについて論じる。

1.3.1 「推量」「推測」「推論」

「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」は森山他(2000)が主張するように条件文((7))では使用される。そのため、現実から逸脱した想像の表現には適さず、現実の状況に基づいて判断する際に用いられる。

(7) a. *さかんに揺れていれば、あの荷物は落ちそうだ。(森山他 2000 : 140)

b. *手足にすり傷があれば、階段から落ちたようだ。⁸⁾(森山他 2000 : 140)

現実の状況に基づいて表現する場合、表4のように4つのパターンが考えられる。

表4 現実の事態を表す表現の分類

分類		例文
直接 情報	五感により知覚された事態 A を直接表現する	(誰かが話しているのが聞こえる) 誰かが話している。
	観察された事態 B をもとに事態 A を表現する	(部屋の明かりが消えている。) 彼はまだ帰ってきていない <u>よう</u> だ。
	既知情報をもとに事態 A を表現する	(彼は試験勉強をしていなかった) 結果は悪いかもしれない。
間接 情報	間接情報をもとに事態 A を表現する	(彼が出張に行つたと聞いた。) 彼は家にいないらしい。

(8) ～ (11) に示されているように、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」は間接情報をもとに表現する場合((13))には、両者の自然さが低下する。そのため、本稿では、「五感により知覚された事態 A を直接表現する」、「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」、「既知情報をもとに事態 A を表現する」の3つの分類を踏まえ、両者の意味を検討する。

(8) a. (子供たちが笑っている) 子供たちは楽しそうだ。

b. (誰かの話し声が聞こえる) 隣の部屋で誰かが話しているようだ。

(9) a. (彼の急いでいる様子を見て) 彼は遅刻しそうだ。

b. (部屋の明かりが消えているのを見て) 彼はまだ帰ってきていないようだ。

(10) a. * (この店は日曜日が定休日だ。) 定休日だから、店は閉まっていそうだ。

b. (この店は日曜日が定休日だ。) 定休日だから、店は閉まっているようだ。

(11) a. * (間接情報：彼が出張に行つたと聞いた) 彼は家にいなさそうだ。

b. * (間接情報：彼が出張に行つたと聞いた) 彼は家にいないようだ。

まず、「五感により知覚された事態 A を直接表現する」について検討する。(12) では、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」はどちらも「早く帰ろう」と共に使えるため、いずれも目の前の事態から直感的に可能性を考える表現である。しかし、両者の「可能性」の捉え方には違いがある。例えば、(13) では、「実はとても厳しい人だ」は相手が実際に優しくない

ことを表すため、直前に実際と反する表現が来るのは不適切である。「優しそうだ」は話者の直感的な判断を表し、実際についてはまだ判断の余地があるが、「優しいようだ」は「優しいかもしれない」という事実に言及しており、後文と矛盾する。そのため、両者はともに可能性を検討する表現であるが、「(シ) ソウダ」は話者が直感的な判断を述べて可能性を示すのに対し、「ヨウダ」は実際の状況を踏まえ、より確実性の高い可能性を示す点で異なる。また、(14) では、知覚情報をもとにすぐに判断する場合、「(シ) ソウダ」が用いられるが、「ヨウダ」はそのような状況では使われない。これにより、「(シ) ソウダ」は素早く直感的に推量することを示し、「ヨウダ」はより時間を要する可能性の推量を示すことがわかる。

- (12) a. (雷の音が聞こえる) 雷雨が近づいてくるようだ。早く帰ろう。
 b. (雷の音が聞こえる) 雷雨が近づいてきそうだ。早く帰ろう。
- (13) a. * (相手は笑顔で話している) 優しいような感じだが、実はとても厳しい人だ。
 b. (相手は笑顔で話している) 優しそうな感じだが、実はとても厳しい人だ。
- (14) a. (アイスが傾いている) 「あっ、落ちそう！」
 b. * (アイスが傾いている) 「あっ、落ちるようだ！」

次に、「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」について検討する。(15) の「部屋の散らかり」と「彼の気分の落ち込み」のように 2 つの事態が関わる場合は、直感的な印象だけでなく、それらの間に因果関係を想定する必要がある。ここでの因果関係とは、「部屋が散らかっている」という観察された状況から、「彼の気分が落ち込んでいる」という状態を導き出すような、前者が後者の理由や結果となる解釈上の関係である。(15) では、「散らかり」を根拠に「気分が落ち込んでいる」と推測しており、(15) a のように「ヨウダ」は適切である一方で、(15) b のように「(シ) ソウダ」は不適切である。

- (15) a. (部屋が散らかっているのを見て) 彼は気分が落ち込んでいるようだ。
 b. * (部屋が散らかっているのを見て) 彼は気分が落ち込んでいそうだ。

「五感により知覚された事態 A を直接表現する」と比べ、「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」場合は、証拠の強さや直接性の影響を受けるため、確実性が低くなる。その点は (16) における「どうやら」との共起によって説明できる。「どうやら」は、確実性が低い場合に使われる表現であり、話者が自分の推測に対して不確実性を含ませたいときに使われる。(16) a より (16) b のほうが自然であることから、直接的な根拠に基づく「五感により知覚された事態 A を直接表現する」よりも、「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」ほうが、確実性が低いことがわかる。

- (16) a. * (誰かの話し声が聞こえる) どうやら隣の部屋で誰かが話しているようだ。
 b. (部屋の明かりが消えている) どうやら彼はまだ帰ってきていないようだ。

最後に、「既知情報をもとに事態 A を表現する」について検討する。(17) のような場合、「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」場合と比べると、目の前の事実だけでは

判断が難しく、既知情報と照らし合わせて結論を導いている。「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」場合でも、話者は何らかの知識を利用して判断しているが、「既知情報をもとに事態 A を表現する」場合は日常的な常識に頼るのではなく、過去の経験や蓄積された知識をもとにした推論が行われる。このような推論を行う場合、「(シ) ソウダ」は使われない。

(17) a. (あの店は月曜日の昼にいつも満席だ) 今日は月曜日だ。あの店は混んでいる
ようだ。

b. * (あの店は月曜日の昼にいつも満席だ) 今日は月曜日だ。あの店は混んでい
そうだ。

以上をまとめると、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」はいずれも「推量」を表すが、前者は話者が知覚情報を瞬時に捉え、直感的に判断する場合に用いられるのに対し、「ヨウダ」は時間を要し、より確実性の高い推量を表す。また、「ヨウダ」は観察に基づいた推測や、既知情報をもとにした推論にも使われる。

1.3.2 「様態」

「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」が「様子」「様相」「様態」のどれを表すかについて考えると、例えば、(18) a と (18) b では、それぞれ人の振る舞いや物の外見を見て、その人やその物が「いい人」や「忘れ物」であると感じるのではなく、人が親切そうに振る舞っている状態からいい人だと感じられ、物が置き忘れられている状態から誰かのものだと思われる。そのため、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」は、単に外面的な特徴や状態を表す「様子」や、物事の全体的な雰囲気・傾向を示す「様相」を捉えるものではなく、話し手が内在的な特性を踏まえて事態を把握する「様態」としての意味を持つ表現である。

(18) a. いい人そうだ。／b. 忘れ物のようだ。

ここでは、「様態」(視覚情報)における真偽と時制の観点から「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いを明らかにする。

「ヨウダ」は全ての「様態」に適用されるわけではない。偽物だと認識している (19) では、「(シ) ソウダ」は直感的な印象として自然であるが、「ヨウダ」は推量や推測の必要がない場合に限って用いられない。それは、「様態」は、「(シ) ソウダ」の場合、直感的に推量する際の材料として利用されるのに対し、「ヨウダ」の場合、話者が推量や推測を行うための理由や論理的な根拠として存在するからである。また、偽物だと認識している場合、「(シ) ソウダ」は外見描写にとどまり、可能性の検討を伴わない。一方、実際に本物であると感じる場合は、外見が本質を反映し、ある程度の確実性を含む。例えば、(19) a は単なる外見描写にすぎず、化け物が実際に飛び出してくる可能性を示唆していない。しかし、(20) では、視覚情報をもとに化け物が飛び出してくる可能性を示している。

(19) (偽物だと知っている場合)

- a. (3D 映画を見て) 映画の中の化け物が飛び出してくるそうだ。(外見描写)
- b. (3D 映画を見て) 映画の中の化け物が飛び出してくるようだ。(×推量)⁹⁾

(20) (夜の廃墟で影が揺れていて) 化け物が飛び出してくるそうだ。(推量)

次に、時制の観点から「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いについて検討する。「(シ) ソウダ」は進行中の状況に基づく視覚情報を表現する場合((21) (22))に用いられるが、過去の事象が現在の状態に影響を与える場合((23))には「ヨウダ」のみ使われる。「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」はモダリティ¹⁰⁾的表現である。杉村(2000)¹¹⁾によれば、「(シ) ソウダ」は「ダ」の部分がモダリティを担い、「ヨウダ」は全体がモダリティを表す。杉村(2000)に従えば、「ヨウダ」は過去の事象「雪が降った」ことに対して話者自身の態度を示す。一方、「(シ) ソウダ」の場合、「雪が降りそう」は事実を述べる命題部分であり、進行中の状況を述べている。「ダ」は話者の判断を示す部分であり、「ダッタ」は過去の時点での判断を述べることを表す。「ソウ」と組み合わせると、「雪がふりそうだった」は過去の時点で発生した事態に対する判断を述べることになる。そのため、「ソウダッタ」は現在の時点で過去の事態を表現するのには適さない。

- (21) a. (コンサートでお気に入りの曲が流れたとき) 彼女は楽しんでいるようだった。
- b. (コンサートでお気に入りの曲が流れたとき) 彼女は楽しんでいたそうだった。
- (22) a. (現在の空の様子) 雨が降るようだ。
- b. (現在の空の様子) 雨が降りそうだ。
- (23) a. (雪が降った翌日、雪が地面を覆っている状態) 昨日雪が降ったようだ。
- b. * (雪が降った翌日、雪が地面を覆っている状態) 昨日雪が降りそうだった。

以上、「様態」の観点から「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」を比較し、両者の違いを考察した。「(シ) ソウダ」は「様態」を直感的に推量する際の材料とするのに対し、「ヨウダ」の場合、「様態」が推量や推測の根拠として存在する。

2. 中国語“好像”

2.1 “好像”の意味に関する先行研究

『現代汉语词典第7版』(p521)によれば、“好像”は2種類の品詞性がある。動詞としては“像(類似している)”((24))という意味で使われ、副詞としては“不确定的判断(不確かな判断)”((25))という意味で使われる。

- (24) 他们俩一见面就 好像 多年的老朋友。(『現代汉语词典第7版』p521)
 彼らは初対面なのに (動詞) 長年の親友
- (25) 他望向远方 好像 在想着什么。(同上)
 彼は遠くを眺めて (副詞) 何かを考えている

「(シ) ソウダ」「ヨウダ」と“好像”との対応関係を検討するため、次では副詞としての意味(不確かな判断を表す“好像”)に焦点を当て、先行研究を取り上げる。

『現代汉语八百词』(p261)によれば、副詞としての“好像”には「不確かな推測や判

断、感覚」と「表面からそうであるが、実際はそうとは限らない」の2つの場合がある。前者に相当する例として挙げられている(26)は、話者が「彼」が「王さん」一人に何かを知らせたと推測していることを表す。一方、後者に相当する例として挙げられている(27)は「問題」が表面的には複雑に見えるが、実際は簡単であることを示す。

(26) 他 好像 只通知了小王一个人。(『现代汉语八百词』p261)
彼は ようだ 王さんだけに知らせた

(27) 这些问题 好像 挺复杂, 实际并不难解决。(同上)
これらの問題は (し) そうだ かなり複雑 実際は解決するのは難しくない

叶(2016)では、副詞としての“好像”が“不确定的判断(不確かな判断)”と“委婉(婉曲)”の2種類に分けられている。“委婉(婉曲)”の意味については論じられていない。“不确定的判断(不確かな判断)”については、“言据性(言葉の証拠性)”の違いによって、“不确定的感知(不確かな感知)”((28) a)、“不确定的传闻(不確かな伝聞)”((28) b)、“不确定的推断(不確かな推定)”((28) c)に分類している。

- (28) a. 好像 有人敲门。(叶 2016:105) → 知覚情報
ようだ 誰かドアを叩いている。
- b. 听说, 他 好像 有点错 具体情况不大了解。
聞いた話では、彼は ようだ 間違っていた 詳しい状況はわからない
(叶 2016:106) → 伝聞情報
- c. 小明脸涨红, 好像 生气了。(叶 2016:107) → 観察さ
小明的顔が真っ赤になって ようだ 怒っている
れた証拠や論理的推理

楊(2024)は、叶(2016)の分類をもとに“好像”の用法を再分類している。「話者の記憶といま思い出したこと」の間に時間的ギャップがあることを理由に、表5のように、「記憶感知」を「不確かな感知」から独立させ、「不確かな感知」を「不確かな感知」((29) a)と「不確かな記憶」((29) b)に分けている。また、「不確かな伝聞」と「不確かな推定」を統合し、「不確かな判断」((29) c)として整理している。さらに、「不確かな感知」と「不確かな記憶」は「推定」の意味が含まれていることで、「不確かな判断」と共にまとめて「推定」としている。なお、“好像”が婉曲的な表現として使われる場合には、根拠がない点で「推定」と異なるとし、婉曲に「自身の叙述」((29) d)、「評価性主張」((29) e)、「義務の提示」((29) f)の3つの用法があることを主張している。

表5 叶(2016)と楊(2024)の対応表

叶 (2016)			楊 (2024)	
不 確 か な 判 断	不確かな感 知 ((28) a)	五感による感知	不確かな感知 ((29) a)	推 定
		記憶感知	不確かな記憶 ((29) b)	
	不確かな伝聞 ((28) b)		不確かな判断 ((29) c)	
	不確かな推定 ((28) c)			
婉 曲	(論じられていない)		自身の叙述 ((29) d)	婉 曲
			評価性主張 ((29) e)	
			義務の提示 ((29) f)	

- (29)¹²⁾ a. 外面 好像 下雪了。 (楊 2024:121)
外は ようだ/ばい 雪が降っている
b. 我记得我姐姐 生完之后第五天 好像 就出院了。 (楊 2024:124)
私の記憶では姉は 産後五日目に かな 退院した
c. 这个方便面 好像 (是) 当地特色,
このインスタントラーメンは ようだ 地元の特産品
哪儿都有。 (楊 2024:122)
どこでも売っている
d. 我 好像 回复我自己了。 (楊 2024:126)
私は ようだ 自分に返事した
e. 那比如小瓶化妆水什么的能带进去么? 好像 也是液体。
小サイズの化粧水などは持ち込み可能でしょうか ようだ それも液体
(楊 2024:127)
f. 这里 好像 不能拍照。 (楊 2024:127-128)
ここでは ようだ 撮影禁止

本稿は楊（2024）の「推定」の分類を参照しつつ、「（シ）ソウダ」と「ヨウダ」の比較分析を目的として整理する。まず、「推定」という用語については、楊（2024:66）では、「推定」を「根拠 Y と判断 X の間に相似性があり、根拠 Y をもとに判断 X を下すこと」というように広義に定義している。本稿では 1.2 節で示したように、より狭義の「推定」を採用する。“好像”は（30）のように、客観的な証拠をもとに論理的に推定する場合には使われないため、「推定」を表すとは言えない。

- (30) * 鉴定结果为 99.99% 以上。 他 好像 是小李的父亲。 (推定)
鑑定結果 99.99% 以上 彼は ようだ 李さんの父親

また、“好像”は条件文（（31））では使われないため、「（シ）ソウダ」「ヨウダ」と同様に現実の状況をもとにした表現である。そのため、本稿は 1.3.1 節で示した「（シ）ソウダ」「ヨウダ」の分類方法に従い、根拠の違いによって分類を行う（表 6 参照）。

- (31) * 如果 20 年前他在北京的话, 他 好像 是小李的父亲。
もし 20 年前に彼が北京にいれば 彼は ようだ 李さんの父親

表 6 楊（2024）と本稿の対応表

楊（2024）		本稿	
不確かな感知（（29）a）		五感により知覚された事態 A をそのまま表現する	直接 情報
不確かな記憶（（29）b）		既知情報をもとに事態 A を表現する	
不確かな 判 断 （（29）c）	判断の根拠 Y が話し手の 観察や体験である場合	観察された事態 B をもとに事態 A を表現する	間接 情報
	判断の根拠 Y が他人から 得られた情報である場合	間接情報をもとに事態 A を表現する	

次の節では、表 6 のように 4 つのタイプに分けて“好像”の意味を検討する。

2.2 中国語“好像”の意味

ここでは、“好像”の意味を、「五感により知覚された事態 A をそのまま表現する」「五感により知覚された事態 B をもとに事態 A を表現する」「既知情報をもとに事態 A を表現する」「間接情報をもとに事態 A を表現する」の順に検討する。

2.2.1 タイプ1「五感により知覚された事態Aをそのまま表現する」

叶 (2016) によれば、(32)は感知結果を忠実に描写する表現である。しかし、「ちょっと見に行ってくれる？」が後行することから、話者が単なる「誰かがドアを叩いている」という事実を描写するにとどまらず、「訪問者がドアを叩いているかもしれない」という可能性を示唆していることがわかる。ただし、これは進行中の事態に関するものであり、論理的な思考を経ずに、直感的な判断を表していると考えられる。

- (32) (听见有人敲门) 好像 有人敲门,
(誰かドアを叩いているのが聞こえた) ようだ 誰かドアを叩いている
你可以去看一下吗?
ちょっと見に行ってくれる

“好像”は視覚情報の場合にも使われることがあり、(33) a では、“快 (要) (まもなく)”や“马上 (もうすぐ)”と共起することで、事態が間近であるという直感的な印象に基づいた推量を表していると考えられる。印象を表す表現としては“看起来”が一般的とされる (張 2006、周・夙 2024) が、BCC では“好像快要” (117 件) や“好像马上” (80 件) の方が“看起来快要” (10 件) や“看起来马上” (4 件) より多く、事態が間近なことを表す際は“好像”の方が多く用いられている¹³⁾。また“好像”は (33) b のように“看起来”に言い換えてもおよそ同じ意味を表すことから、本稿では“好像”も直感的印象に基づいた推量の用法として扱われると考える。

- (33) a. (花要开了) 花 好像 马上就要开了 快过来。
(花が咲きそうだ) 花 (し) そうだ もうすぐ咲く 早くこっち来て
b. (花要开了) 花 看起来 马上就要开了 快过来。
(花が咲きそうだ) 花 (し) そうだ もうすぐ咲く 早くこっち来て

2.2.2 タイプ2「観察された事態Bをもとに事態Aを表現する」

タイプ1に比べ、タイプ2では、話者が事態Bを観察して思考を経て判断を下す。この過程では、話者の推測が関与しやすく、結果として不確実性が増す。例えば、(34)では、「レジに財布がある」という事態Bから「忘れ物だ」という事態Aを導き出す際、話者は眼前の状況の原因を推測し、それらの関連性を見出さなければならない。叶 (2016) によれば、この“好像”は推測時に使われるが、複数の原因が考えられる場合には制約がある。例えば、(35)では、電話が出ない理由として「会議中」や「携帯がそばにない」などが考えられ、順序や優先順位がないため、どれが原因かを断言することはできない。このような場合、“好像”を使って推測を表すのは難しい¹⁴⁾。

- (34) (收银台有个钱包) 这个钱包 好像 是谁落在这里的。
(レジに財布がある) この財布は ようだ 誰かの忘れ物
(35) * (打电话, 电话响了十几声没人接) 好像 是开会调成静音了。(叶 2016:108)
(電話は十数回鳴っても出ない) ようだ 会議中でマナーモードにしている

“好像”は過去の事態に対しても使われることがある。例えば、(36)では、地面に残った滑り跡を見て、誰かが以前に転んだ跡だと話者は推測している。

- (36) (看到地面上有滑倒的痕迹) 好像 有人在这里滑倒了。
(地面に滑り跡があるのを見て) ようだ 誰かここで転んだ

タイプ2の場合、“好像”は推量を表すのに使われない。推量は直感的であり、根拠を示すと推測に変わってしまう。事態Bがあることで、話者の感覚ではなく因果関係が強調されるため、推量を表すことが難しくなる。

2.2.3 タイプ3「既知情報をもとに事態Aを表現する」

楊(2024)が主張するように、記憶に基づいて事態を表現する場合、その場で直接知覚したわけではなく、時間的なギャップが生じるため、“好像”は事態を知覚した瞬間に直感的な印象を表すのではなく、「おおよそ…であろう」という意味を持つ。楊(2024)は話し手が記憶をもとに事態を表現する際、(37)のように“我记得(私は覚えている)”、“那时候(あの時)”、“上次(前回)”などの回想を示す言葉が使われることが多いとしている。しかし、“好像”自体が目の前の状況に関わる情報や知識を回想する用法として使われることもある。例えば、(38)では、話者が高級ブランドの鞆がどのようなものであるかを思い出して、それが友人の鞆のブランドと一致していると判断することで、「ブランド品だろう」という可能性を表している。

- (37) 我记得我姐姐 生完之后第五天 好像 就出院了。 (楊 2024:124)
私の記憶では姉は 産後五日目に かな 退院した
(再掲)

- (38) (回想起高级品牌的包是什么样的) 你的包 好像 是奢侈品。
(高級ブランドの鞆の特徴を思い出し) あなたの鞆 ようだ 高級ブランド品

タイプ1((39)a)やタイプ2((39)b)と比べ、タイプ3((39)c)は単なる知覚や観察ではなく、既知情報に基づいて推論が行われる。タイプ1とタイプ2では、目の前の状況に関する経験や知識が必要とされるが、「人が忙しい」と判断する場合には、日常的な知識に基づくものであり、特定の記憶(過去の経験や蓄積された知識)を必要としない。しかし、(39)cの「忙しい」の判断は外見の観察ではなく、「2時になっても客が多い」という既知知識と「今2時だ」という事実を結びつけて論理的に推論する必要がある。

- (39) a. (店员很忙碌) 店员 好像 很忙。 (タイプ1)
(店員は忙しそうに見える) 店員は (し)そうだ 忙しい
b. (叫店员, 店员没来) 店员 好像 很忙。 (タイプ2)
(店員を呼んだが、来ない) 店員は ようだ 忙しい
c. (到2点客人也很多。) 这个点儿 店员 好像 很忙。
(2時になっても客が多い) この時間だと 店員は ようだ 忙しい
(タイプ3)

2.2.4 タイプ4「間接情報をもとに事態Aを表現する」

タイプ4は外部から得た情報を基盤とする点で、知覚情報や観察情報、既知情報といった直接得られる情報を根拠とする場合とは異なる。ただし、“好像”自体は、直接情報に基づくか間接情報に基づくかを区別する機能を持たない。例えば、(40)では「他人から

聞いた」ことが明示されていないため、聞き手は話者がどのように情報を得たのかを判断できない。ただし、(41)のように「停電」がまだ発生していない場合、それを直接知覚することは不可能であるため、聞き手は自然に間接情報に基づく発話だと理解する。

- (40) A: 学校 好像 停电了。
 学校 ようだ/らしい 停電した
 B: 你怎么知道的?
 どうして知っていたの
 A: 我听说的。
 聞いたんだ。

- (41) 学校 今天 好像 停电。
 学校 今日 らしい 停電する

また、タイプ4の場合、“好像”が確信がないことを示すことがある。例えば、(42)の“好像”は“大概（おそらく）・可能（かもしれない）・也许（たぶん）”や“听说（聞いた話では）”とともに使われ、情報の正確さに対する疑念を示す。この使い方では、話者が伝聞内容に断定的な立場を取らないことが反映され、確証がない状況が示される。

- (42) a. 学校 今天 好像 大概 可能 也许 停电。
 学校 今日 ように思う 恐らく かもしれない たぶん 停電する
 b. 听说 学校 今天 好像 停电了。
 聞いた話では 学校 今日 ように思う 停電した
 具体情况不太了解。
 具体的な状況はよくわからない

3. 「(シ) ソウダ」「ヨウダ」と“好像”との対応関係

「(シ) ソウダ」「ヨウダ」と“好像”との対応関係を表にまとめると、表7のようになる。

表7 「(シ)ソウダ」、「ヨウダ」と“好像”との対応関係

好像			(シ)ソウダ	ヨウダ
直接 情報	タイプ 1 (推量)	这家店 <u>○好像</u> 很有人气。 この店 とても人気	×	○
		花 <u>○好像</u> 马上就要开了。 花 もうすぐ咲く	○	×
		<u>△好像</u> 要下雨了。 もうすぐ雨が降る	○	×
		大家在一起聊天 <u>×好像</u> 很开心。 みんなで話していて とても楽しい	○	×
	タイプ 2 (推測)	他 <u>○好像</u> 还没回来。 彼は まだ帰ってきていない	×	○
		昨天 <u>○好像</u> 下雨了。 昨日 雨が降った	×	○
	タイプ 3 (推論)	你的包 <u>○好像</u> 是奢侈品。 あなたの鞆 高級ブランド品	×	○
間接 情報	タイプ 4 (伝聞と不確信)	学校 今天 <u>○好像</u> 停电。 学校 今日 らしい 停電する	×	×
		听说 她 <u>○好像</u> 结婚了。 聞いた話では 彼女は ように思う 結婚した	×	×
タイプ 1:「五感により知覚された事態 A をそのまま表現する」; タイプ 2:「観察された事態 B をもとに事態 A を表現する」; タイプ 3:「既知情報をもとに事態 A を表現する」; タイプ 4:「間接情報をもとに事態 A を表現する」。				

表7に示されるように、“好像”は「(シ) ソウダ」「ヨウダ」より使用範囲が広く、間接情報をもとに事態を表現する場合にも使われる。「直接情報」の場合、“好像”は「ヨウダ」のように推測や推論を表すことが多いが、“快要(まもなく)”や“马上(もうすぐ)”と共起する場合、推量を表す。また、推測を表す場合、“好像”も「ヨウダ」も過去の事態に対して使われる。

推量を表す“好像”は「(シ) ソウダ」と比べて使用範囲がより限定的である。例えば(43)の場合、“好像”で訳すと違和感が生じる。中国語では、直感的な判断を表現す際、(43) c のように直感的な判断を示す表現を省略し、そのまま述べるのが一般的である。これは冗長な表現を避けるためである。

(43) a. みんなで話していて、とても楽しそうだ。

b. *大家在一起聊天，好像很开心。

c. 大家在一起聊天，很开心。

以上から、「(シ) ソウダ」「ヨウダ」と“好像”は必ずしも一対一対応しないことがわかる。以上の分析を踏まえて日本語教材の翻訳を検討すると、(44)や(45)は誤訳だと言える。いずれも“好像”に訳されているが、その結果、行動や外見などに基づいた推測を表すことになり、「(シ) ソウダ」の「推量」という意味を適切に表現できていない。

(44) 彼女は頭がよさそうです。她好像很聪明。(『大家的日语2』p218) (誤訳)

(45) 彼は何でもおいしそうに食べます。他吃什么好像都很香。(『日语综合教程2』p37) (誤訳)。

おわりに

本稿は「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いを明らかにするために、これらの中国語訳“好像”と比較した。その結果、“好像”は推測や推論を表すことが多いものの、特定の文型では推量を示す場合もあるため、「(シ) ソウダ」よりも「ヨウダ」に対応することが多いことが明らかになった。

また、これらの比較を通じて、一部の教材で「(シ) ソウダ」の翻訳が厳密ではなく、誤訳が生じていることを示した。中国人日本語学習者が「(シ) ソウダ」の意味を正しく理解するには、「(シ) ソウダ」の意味を正確に伝えるように教材の対訳を工夫する必要がある。さらに、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」の違いを説明する際には、「(シ) ソウダ」は五感を通じて直接知覚した事態を表すのに対し、「ヨウダ」は観察結果や既知の情報をもとにした推測・推論を表すことを示すと学習者の理解が深まると考えられる。この点を正しく理解させることができれば、(2) a や (2) b のような誤用を減らすことができるのではないだろうか。

さらに、本稿では“看起来”についても言及したが、“好像”との違いについては触れていない。今後はこれらの区別を明らかにし、「(シ) ソウダ」との関係を検討したい。

注

- 1) 助動詞「ソウダ」は従来からどのような活用形に接続するかによって「様態」と「伝聞」の2つの用法に分けられている。そのうち、様態の「ソウダ」は連用形に接続し、物事の様子や状態を表すが、単に物事の様子を表すわけではないことが先行研究によって指摘され、その意味・用法は様々に分類されてきた。本稿はそれをいわゆる「様態の『ソウダ』」と称する。
- 2) 「ヨウダ」には「推量」と「比況」の用法がある。寺村（1984）によれば、これらの中心的な意味は「真実に近い」という点にある。推量の「ヨウダ」は観察から推測し真相に近いだろうと判断する用法である。一方、比況の「ヨウダ」は、真実ではないが、それに似た様相を示すものである。
- 3) 引用元が記載されていない例文はすべて筆者が作成したものである。
- 4) 表1は、本稿が5種類の日本語教材から文法説明の中で用いられた訳語を収集し、整理したものである。
- 5) これらは初級レベルの学習者向けに作成され、中国で広く使用されている日本語教材である。
- 6) 森山他（2000）では、(3)を想定条件とし、「(シ) ソウダ」は条件文で使われると主張している。一方で、「(シ) ソウダ」と「ヨウダ」は条件文では使われないと述べており、矛盾した論述が見られる。具体的な例については、1.3.1節で取り上げる。
- 7) 一般的に、観察は視覚的に対象を捉える行為を指すことが多いが、本研究ではその範囲を視覚に限定せず、聴覚なども含めて考える。
- 8) 原文では「みたいだ」「らしい」が並列され、提示されているが、本稿では「ヨウダ」のみを検討対象とするため、それらを除外した。
- 9) この「ヨウダ」は推量ではなく、比況の意味で用いられている。
- 10) 森山他（2000:4）によれば、モダリティは命題から独立した文の要素であり、話者が事態をどのように把握しているかを示す働きを担う。例えば、「先生が歩くに違いない」（森山他2000:3）において、「先生が歩く」は事態そのもの、すなわち「命題」を指し、「に違いない」は「先生が歩く」という事態に対する話者の把握の仕方（モダリティ）として機能している。
- 11) 杉村（2000）は、発話時点での話者の心的態度を表す要素は、それ自体が真偽の対象（すなわち、否定や疑問の対象）にならず、連体修飾成分や過去文の対象にもならないことをモダリティの判断基準とし、「ヨウダ」と「(シ) ソウダ」のモダリティ機能を検証している。
- 12) 楊（2024）から引用した例文のグロスとは本稿において付したが、翻訳は楊（2024）による。
- 13) ここでの「検索性数」は、BCC コーパスで“好像快要”や“看起来快要”などを検索し、母語話者として、規範から逸脱している、一般的ではない、自然ではないと判断した例を除いた有効な用例のみを集計したものである。
- 14) 叶（2016）によれば、この場合、“可能”のほうが自然である。

参考文献

- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社。
- 森山卓郎（1995）「推量・比喻比況・例示—『よう／みたい』の多義性をめぐって—」『日本語の研究宮地裕・敦子先生古稀記念論集』493-526 頁。
- 森山卓郎, 仁田義雄, 工藤浩（2000）『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店。
- 中畠孝幸（1991）「不確かな様相: ヨウダとソウダ」『三重大学日本語学文学』2、26-33 頁。
- 大場美恵子（1999）「いわゆる様態の『そうだ』の意味と用法」『東京大学留学生センター紀要』9、75-99 頁。
- 澤田治美（2007）「語用論の可能性—モダリティの視点から」『言語』36、17-31 頁。
- 杉村泰（2000）「ヨウダとソウダの主観性」『言語文化論集』22(1)、85-100 頁。
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ—1.6 ヨウダ, ミタイダ』くろしお出版。
- 豊田豊子（1987）「『そうだ』(様態)の意味・用法と否定形(1)」『日本語学校論集』14、1-13 頁。
- 楊迪（2024）「属性抽出表現の日中対照研究—『～ばい』と“程度副詞+X”を中心に—」名古屋大学大学院人文学研究科博士論文。
- 叶琼（2016）「“好像”的不确定判断义解读①」『汉语学习』(3)、103-112 頁。
- 张宜生（2006）「“看起来”与“看上去”—兼论动趋式短语词汇化的机制与动因」『世界汉语教学』5-16 頁。
- 周文芳, 凤蝶（2024）「试论“看”类动趋式的虚拟位移特点和语义演变」『许昌学院学报』43(1)、62-69 頁。

用例出典

- BCC 语料库 <https://bcc.blcu.edu.cn/>
- 陈小芬編（2014）『日语综合教程 1—第 14 课』上海外语教育出版社。
- Reika 編（2012）『新编日语教程 2—第 7 课, 第 9 课』華東理工大学出版社。
- 日本 3A 出版社編（2017）『大家的日语初级 2—第 43 课, 第 47 课』外语教学与研究出版社。
- 唐磊, 张国强ら編（2013）『新版标准日本语第二版初级下—第 33 课, 第 44 课』人民教育出版社。
- 许慈惠, 高洁, 林彬編（2014）『日语综合教程 2—第 3 课』上海外语教育出版社。
- 周平, 陈小芬編（2009）『新编日语 1—第 18 课』上海外语教育出版社。
- 周平, 陈小芬編（2010）『新编日语 2—第 1 课』上海外语教育出版社。

辞書類

- 吕叔湘（1999）『现代汉语八百词』商务印书馆。
- 中国社会科学院研究所词典编辑室編（2016）『现代汉语词典第 7 版』商务印书馆。

**The similarities and differences between "*Soda*" and "*Yoda*":
Focusing on the correspondence with the Chinese word "*Hao Xiang*"**

LIU, Yi

Abstract

Due to the terms "*soda*" (also referred to as "manner" and denoted as "*(si)soda*" in this article) and "*yoda*" (also known as "*inference*"), both translated as "*hao xiang*" in Chinese, Chinese learners of Japanese often find it challenging to differentiate between them. Therefore, to clarify the differences between the two, this article examines the Chinese translation of both terms as "*hao xiang*". First, a comparison is made between "*(si)soda*" and "*yoda*", followed by an analysis of the meaning of "*hao xiang*" and an evaluation of its correspondence with the two terms.

The analysis revealed that the Chinese term "*hao xiang*" aligns more closely with "*yoda*", which denotes visual inference, speculation and deduction, than with "*(si)soda*". However, in certain sentence structures, "*hao xiang*" may also convey a meaning equivalent to "*(si)soda*". This is particularly evident when used in conjunction with "*kuai yao*" (meaning "*in no time*") and "*ma shang*" (meaning "*immediately*"), where it expresses intuitive impressions based on perceptual information, aligning with the sense of "*(si)soda*".

This article also examines the misuse of the term "*hao xiang*" in Japanese language teaching materials. For example, it is noted that expressions conveying intuitive impressions, such as "*Atama ga yosaso da*" (seems intelligent) or "*Oisiso ni taberu*" (eat with enjoyment) are translated into "*hao xiang*". However, this translation fails to capture the original meaning of inference and is instead interpreted as deduction based on behavior or appearance.

Keywords : "*(si)soda*", "*yoda*", "*hao xiang*", correspondence

日本語と中国語の所有構文と存在構文の体系 —連続性と二分性に基づく構文意味論的分析—

福田 翔（富山大学）、張 正（文教大学非常勤講師）

要旨

本論文は、日本語と中国語における「所有」及び「存在」を表す構文に着目し、それぞれの言語において、これらの概念がどのように言語化されるのかを明らかにすることを目的とする。特に、日本語の「ある/いる」構文と中国語の「有 yǒu : ある/いる・持っている」構文を中心に対照的に分析し、両言語における構文的・意味的メカニズムの異同を考察する。日本語では、「存在文」は事物の「所在関係」を表し、「所有文」は「全体-部分関係」に基づく所有を表す。また、両者は「場所性」や「主体の意図性」の強弱に応じて連続的に変化する構文体系を形成している。これにより、文の意味構造と統語構造が段階的に変容することが示される。一方、中国語では、「有」構文の文法的形式の違いにより、「存在文」と「所有文」が明確に区別される。具体的には、「存在文」では主語が場所として機能し、「所有文」では主語が場所として機能しない。つまり、主語の「場所性」の有無が両者を分ける重要な指標となっている。本研究は、両言語の構文の比較・対照を通じて、言語における意味の構築と構文選択の関係性を体系的に捉えるとともに、対照言語学及び言語教育への示唆を提供するものである。

キーワード： 存在構文、所有構文、ある/いる、有 yǒu、日中言語対照

はじめに

日本語と中国語の所有と存在を表す構文では、形式として共通する部分と異なる部分の両方がある。なかでも、日本語の「ある/いる」構文と、中国語の「有 yǒu : ある/いる・持っている」構文に着目した対照研究は、両言語の構文的・意味的特性を理解する上で重要な意義を持つ。

本研究の目的は、所有や存在という概念が、日本語及び中国語においてどのように言語化されるのかを明らかにすることである。さらに、それらの表現が言語化される過程において、両言語間でどのような構文的・意味的メカニズムの違いがあるかについて検討する。

本研究の主な結論は、次の通りである。日本語では存在文は所在関係を表し、所有文は全体-部分関係を基盤としている。両構文は相互に連続的な関係にあり、文の意味や構文は

場所性及び主体の意図性の強弱に応じて段階的に変化する。これに連動する形で、構文的・文法的にも異なる特徴が現れることになる。一方、中国語においては文法形式の有無により、存在文は主語が場所として機能し、所有文は主語が場所として機能しないというように、二分的に整理される。すなわち、主語の場所性の有無が、所有と存在を分ける重要な指標となる。

1. 日本語と中国語の所有文と存在文の基本的な諸特徴

日本語と中国語の所有文と存在文は、日本語では「ある」或いは「いる」が使用され、中国語では「有 yǒu : ある/いる・持っている」が使われる。所有文は人が何かを所有していることを表し、存在文は人や物が存在することを表す。しかし、これらの構文が両言語でどのように形成されるかは異なる。

所有文と存在文は形式的には類似しており、両者の隣接性が示唆されている（Lyons（1967）、Dryer（2007）等）。また、所有文はしばしば「人間を場所とする存在文」として理解されることもある。

1.1 所有文と存在文：意味的典型性

日本語と中国語の所有文と存在文が表す意味に着目し、さらに観察を進める¹⁾。

(1) a. 我 有 妻 子。 私 いる 妻	所有文 possession	(2) a. 私には妻が <u>い</u> る。
b. 我 有 一 本 书。 私 持っている 1 CL 本		b. 私 <u>は</u> 本 <u>を</u> （1 冊）持っている。
c. 桌子上 有 一 本 书。 机の上 ある 1 CL 本	存在文 existence	c. 机の上 <u>に</u> 本 <u>が</u> （1 冊）ある。

図1 日本語と中国語の所有文と存在文

中国語の動詞「有 yǒu : ある/いる・持っている」は、目的語として不定名詞を取るという特徴がある²⁾。この特徴により、同じく存在を表す「在 zài : ある/いる」構文との違いが明確になる。また、上古前期の中国語において、「有 yǒu : ある/いる・持っている」は主に「所有」の意味で用いられており、「存在」を表す用法は一般的ではなかったことが指摘されている（大西 2011）。一方、日本語における「ある」と「いる」は、有生性によって使い分けられることが特徴としてある。一般的に、無生物に対しては「ある」、有生物に対しては「いる」が用いられる。また、これらの動詞は他動性が低く、動作主が対象に直接的な影響を及ぼすような意味を持たない。日本語の「ある/いる」は存在を表すことがその典型である。この点で、日本語と中国語は異なる。

1.2 所有文：類型論的観点から見た特徴

本節では、まず所有文の特徴について観察する。その理由は、日本語の所有文の形式が多様であり、その用法も複雑であるためである。例えば、日本語では所有を表す際に用いられる述語として、「ある、いる、持つ、所有する、(-を) している」等、様々な表現が存在する。これらの動詞を所有物との関係から体系的に提示した先行研究として、角田(2009)がある。これについて、角田(2009:145)では、「所有傾斜」としてまとめられている。以下の図は、角田(2009:145、図 7-3) から一部抜粋したものである。

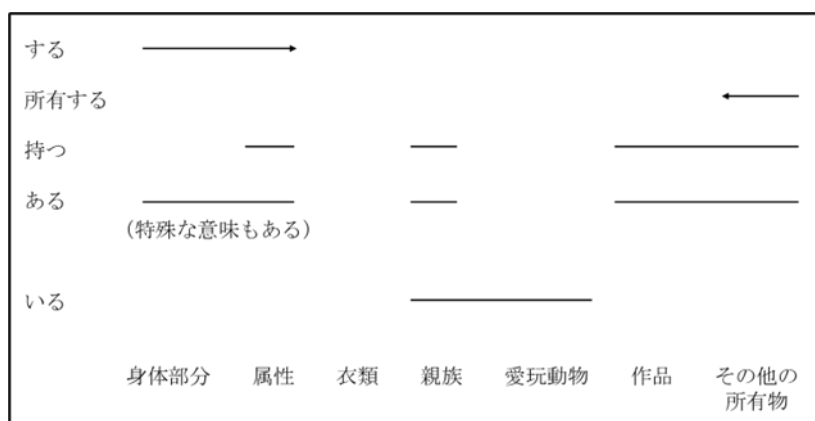


図2 「所有傾斜」と日本語の動詞（角田 2009:145、図 7-3 より一部抜粋）

このように、日本語では所有を表す動詞が複数存在し、その一部は意味関係によって使い分けられることが分かる。次に、中国語の所有を表す動詞を、この枠組みに当てはめると、以下の図のように整理できる。このように中国語では、所有や存在の表現の多くが、基本的に「有 yǒu : ある/いる・持っている」によって包括的に表現されることになる。

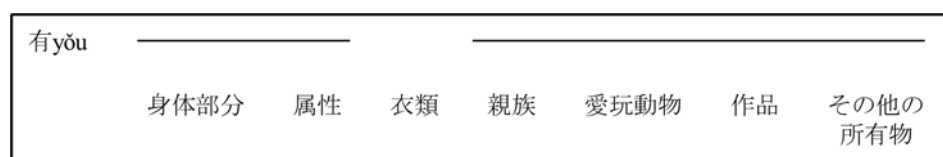


図3 「所有傾斜」と中国語の動詞（角田 2009:145、図 7-3 を参考に中国語を追加）

日本語と中国語では、全体-部分関係の「衣類」については、「動詞-ている」或いは「動詞-着 (DUR)」という形で表現し、所有構文を用いて表すことはできない。つまり、(4ab) は「彼は服を身につけている」という意味では成立しにくいと言える。

- (3) a. 彼は服を着ている。
b. 他 穿着 衣服。

彼 着る DUR 服

(4) a. #彼に服がある。

b. #他 有 衣服。

彼 ある 服

また、所有表現に関する先行研究では、諸言語における所有の中核的意味として、「所有権関係」、「親族関係」、「全体-部分関係」が挙げられる（Taylor 1996、Aikhenvald 2013 等参照）。これらの意味的關係性の枠組みは、日本語及び中国語における所有文の各々の特徴を対照的に分析する上で有効である。

(5) 所有権関係

a. 私には車がある。

b. 我 有 車。

私 ある 車

(6) 親族関係

a. 私には兄がいる。

b. 我 有 哥哥。

私 いる 兄

(7) 全体-部分関係

a. 彼の顔にはほくろがある。

b. 他的脸上 有 一个 黑痣。

彼の顔 -の表面 ある 1 CL ほくろ

まず、所有権関係に基づく例として、「(5a) 私には車がある／(5b) 我有车」がある。これらの文では、所有者が所有物を所有していることを表しており、日本語では「ある」が使用され、中国語では「有 yǒu : ある/いる・持っている」が使用される。次に、親族関係の例として、「(6a) 私には兄がいる／(6b) 我有哥哥」がある。この場合も、日本語では「いる」を使い、中国語では「有 yǒu : ある/いる・持っている」を用いて親族関係を表現している。日本語では有生性に基づいて「いる」を使うが、中国語では所有や存在を問わず、同じ「有 yǒu : ある/いる・持っている」を使う点が日本語とは異なる。さらに、「全体-部分関係」を示す例として、「(7a) 彼の顔にはほくろがある／(7b) 他的脸上有一个黑痣」が挙げられる。この場合、顔という全体に対して、その部分としてのほくろが存在することを表している。この構文においても、日本語は「ある」を使い、中国語は「有 yǒu : ある/いる・持っている」を使用する。

さらに、これらの関係を分離可能性の観点から分類することもできる。「所有権関係」や

「親族関係」は要素同士を分離可能であるが、「全体-部分関係」は分離不可能である。例えば、「所有権関係」における「車」や親族関係における「兄」は物理的に分離可能だが、「全体-部分関係」における「顔」と「ほくろ」は分離不可能である。このように、所有関係は、分離可能性に基づいて分類することで、様々な言語における所有表現の特徴を理解するための重要な手掛かりとなる。

要素間の関係性と分離可能性の観点から、角田（2009:145）の所有傾斜の議論を基に意味関係を整理し、「分離可能性」という観点から各項目进行分类すると、次の図のように提示することができる。



図4 意味のまとまりと分離可能性

2. 日本語の所有文と存在文の関係性

本節では、日本語について所有と存在を表す構文を一つのスケールとして捉え、各形式における具体的な例文を詳細に観察する。

所有 ↑ ↓ 存在	J1. 所有者 (X) -が 所有物 (Y) -を している
	J2. 所有者 (X) -が 所有物 (Y) -を 持っている
	J3. 所有者 (X) -が 所有物 (Y) -が ある
	J4. 場所 (X) -に 存在物 (Y) -が ある

図5 日本語の「所有」と「存在」の構文的特徴とスケール

まず、「J1. している」の例について説明する。これは、「所有者 (X)」と「所有物 (Y)」が全体-部分関係を表しており、X と Y は切り離せない関係にある。また、この場合、Y はXの属性を表しており、「-している」を使うことで、Xに内在する特徴や外見を表している。

- (8) a. 彼女は {美しい目・長い髪} をしている。(J1)
 b. ??彼女は {美しい目・長い髪} を持っている。
 c. ??彼女 (に) は {美しい目・長い髪} がある。

この例では、Y（目、髪）の修飾要素である「美しい、長い」を省略することはできない。これは、目や髪が彼女にとって不可欠な要素であり、すなわち「内在性」が高いことを示している。単に「目をしている」、「髪をしている」と言っても、情報的な価値がほとんどないためである（影山 2004 参照）。そのため、この意味では「-を持っている」や「-がある」といった構文では表現できず、「-している」文のみが自然な文となる。

次に、「所有者（X）」と「所有物（Y）」が全体-部分関係にあるが、「J2. 持っている」を使用する表現について考察する。

(9) a. 彼は素晴らしい {才能・技能・趣味} を持っている。(J2)

b. ??彼は悪い {癖・習慣} を持っている。

この例でも、Y が X の属性を表しているが、「持っている」という表現は「プラスイメージ」の場合にのみ使われる。例えば「才能」、「技能」、「趣味」に「素晴らしい」というポジティブな意味を表す修飾語が付く場合には文として成立する。しかし、「悪い」というネガティブな修飾語が付くと、「J2. 持っている」という表現は不自然となり、文として成立しにくくなる。

一方、「J3. 所有者（X）-が 所有物（Y）-がある」の構文に置き換えると、「素晴らしい」及び「悪い」の両方の修飾語が付くため、プラスイメージでもマイナスイメージでも文が成立することが分かる。また、これは「J4. 場所（X）-に 存在物（Y）-がある」の構文でも同様に成立する。

(10) a. 彼は素晴らしい {才能・技能・趣味} がある。(J3)

b. 彼は悪い {癖・習慣} がある。(J3)

(11) a. 彼に素晴らしい {才能・技能・趣味} がある。(J4)

b. 彼に悪い {癖・習慣} がある。(J4)

さらに、身体の一部を表す所有文では、「J1. している」及び「J2. 持っている」構文は使用できず、「J3. ある」及び「J4. ある」を用いることで適切な文となる。つまり、「傷あと」、「火傷のあざ」等の身体の一部に関する要素は、ガ格またはニ格を用いて「ある」を使って表現される。

(12) a. *彼は {傷あと・火傷のあざ} をしている。(J1)

b. ??彼は {傷あと・火傷のあざ} を持っている。(J2)

c. 彼は {傷あと・火傷のあざ} がある。(J3)

d. 彼に {傷あと・火傷のあざ} がある。(J4)

また、この例では、「動詞-ている形」(彼に傷あとが付いている)は結果状態を表すため、自然な表現となる。しかし、「動詞-てある形」(??彼に傷あとが付けてある)は意図的な働きかけを伴うため、「傷あと」、「火傷のあざ」等のような自然発生的に生じる状態の場合は不自然な文になる。

- (13) a. 彼に {傷あと・火傷のあざ} が付いている。
b. ??彼に {傷あと・火傷のあざ} が付けてある。

次の文も、身体部分に関する例文であるが、「彼の額」のように、所有者の身体の一部をさらに特定する例である。

- (14) a. ??彼の額は {深いしわ・大きな吹き出物} がある。(J3)
b. 彼の額に {深いしわ・大きな吹き出物} がある。(J4)
(15) a. 彼の額に {深いしわ・大きな吹き出物} が {入っている・付いている}。
b. ??彼の額に {深いしわ・大きな吹き出物} が {入れてある・付けてある}。

この場合、(J3) の構文では成立しにくいという制限ができるが、(J4) の構文では自然な表現となる。また、「動詞-ている形」では成立するが、「動詞-てある形」では成立しにくいのは (13) の例文と同じである。一方で、Y が「印」、「タトゥー」のように意図的に付けられた場合は、「動詞-ている形」及び「動詞-てある形」の両方で成立する。

- (16) 彼の {腕・首} には {印・タトゥー} がある。
(17) a. 彼の {腕・首} に {印・タトゥー} が入っている。
b. 彼の {腕・首} に {印・タトゥー} が入れてある。

このように、身体部分における所有関係を表す際、自然発生的にできたものと、意図的に入れられたものでは使用する構文が異なる。つまり、自然発生的なもの(例: しわ、あざ)には「ある」や「入っている」は使用できるが、意図的に付けられたもの(例: 印、タトゥー)には、「ある」や「入っている」に加えて、「入れてある」と表現することもできる。

また、Y が分離可能性の高い、取り外し可能な「コンタクト、ピアス」等の場合では、「動詞-ている形」及び「動詞-てある形」の両者ともが成立するが、(J4) の構文では不自然な表現となる。このように、コンタクトレンズやピアスのように取り外し可能なものに関しては、その分離可能性が高いため、「ある」(J4) 構文では不自然になり、結果状態を

表す「入っている、付いている」や「入れてある、付けてある」といった意図的な結果状態を強調する表現が使われる。このように、身体に対する所有や存在においては、取り外し可能性や行為の意図性が文法構造に反映されることが分かる。

(18) ??彼の {目・耳} には {コンタクト・ピアス} がある。(J4)

(19) a. 彼の {目・耳} には {コンタクト・ピアス} が {入っている・付いている}。

b. 彼の {目・耳} には {コンタクト・ピアス} が {入れてある・付けてある}。

次に、物体の部分における例を観察する。

(20) {壁・ガラスの表面} には {ひび・傷} がある。(J4)

(21) a. {壁・ガラスの表面} に {ひび・傷} が入っている。

b. {壁・ガラスの表面} に {ひび・傷} が入れてある。

(20) のような物体部分の例は、「ある」(J4) 構文が使用可能である。しかし、物体に対しても同じように、「ひび」や「傷」といった欠損や損傷が自然にできたことを示す場合は、結果状態を表す「入っている」が使われることも多い。さらに、意図的にその状態が作り出された場合、「入れてある」という構文が使われ、損傷が加えられたことを強調する意味となる。

最後に、次にあげるのは、存在文の例である。

(22) 机の上に本がある。(J5)

(23) a. 机の上に本が置かれている。

b. 机の上に本が置いてある。

(24) 机の上には彼の本がある。(J5)

(25) 鞆の中に財布がある。(J5)

(26) a. 鞆の中に財布が入っている。

b. 鞆の中に財布が入れてある。

(27) 鞆の中に太郎の財布がある。(J5)

「ある」を使った存在文は、物の所在や配置を表す際に用いられる。特に、二格-ガ格の構文を使うことで、物がどこにあるかという情報を強調することができる。

例文 (22) のように「机の上に本がある」という場合、本が机の上に存在しているという情報が単に提示されている。一方で、(23ab) では、結果状態や意図的な行為を強調するために、「置かれている」、「置いてある」という構文が使われている。これにより、単なる

存在から、配置や行為の結果としての存在が区別される。また、(24) の「机の上には彼の
本がある」や (27) の「鞆の中に太郎の財布がある」では、所有者を示す表現が加えられ、
特定の所有物がどこにあるかという点が明確になる。これにより、物の存在だけでなく、
所有関係や所在が強調されている。最後に、(25) の「鞆の中に財布がある」は存在を表す
基本的な文であり、(26ab) も成立し、「入っている」では結果状態、「入れてある」では行
為の意図性が加わることになる。

以上の議論をスケール上にまとめると、次の図のようになる。

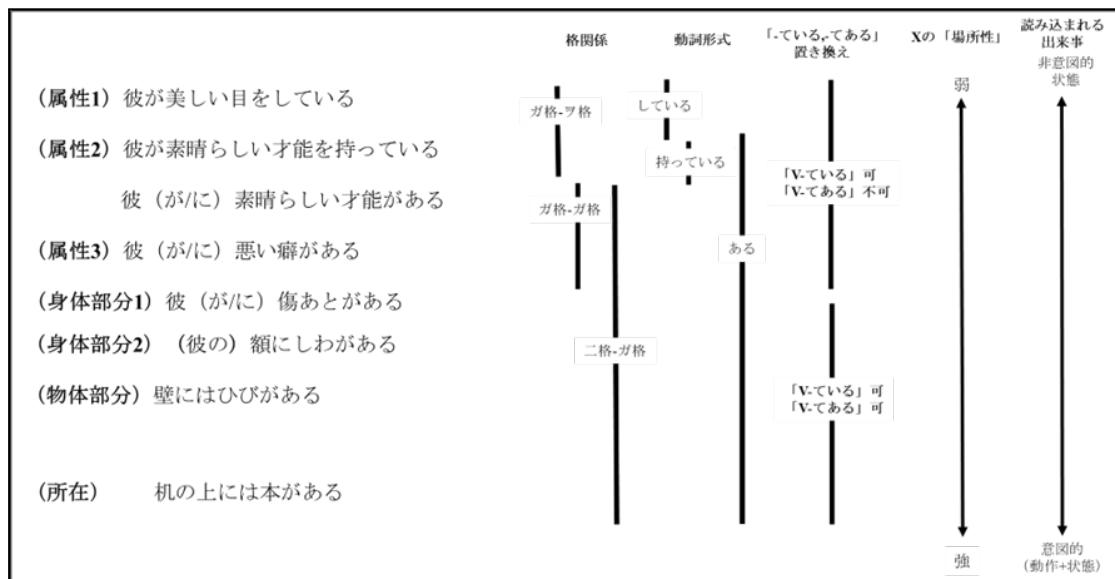


図6 日本語の全体部分関係と所在関係の体系

これは、日本語における全体-部分関係と所在関係に基づく所有文と存在文の体系を示している。図の左側では「属性」、「身体部分」、「物体部分」、「所在」といったカテゴリーごとに例文を提示した上で、それぞれの文法的構造がどのように区別されるかを表している。「格関係」、「動詞形式」、「-ている、-てある」への置き換え可能性、「場所性」、「出来事の意図性」といった要素が対応しており、これらの要素が文の意味にどのように影響するかを示している。たとえば、格関係と「持っている」、「している」、「ある」といった動詞形式の対応関係は、Xの「場所性」の強弱と関連しており、さらに「-ている」、「-てある」に置き換えが可能かどうかという観点からは、出来事が意図的か非意図的かといった意味と連動している。まとめると、Xの「場所性」及び読み込まれる出来事の「意図性」において、全体-部分関係の「属性」から存在を表す「所在」に向けて強まっていくという連続体をなしている。構文的には、「属性1 (彼は美しい目をしている)」から「身体部分1 (彼(が/に) 傷あとがある)」まで、さらに「身体部分2 ((彼の) 額にしわがある)」から「所在 (机の上には本がある)」までというように大きく分かれると考えられる。

3. 中国語の所有文と存在文の関係性

中国語の所有と存在では、大きく2つの構文に分けることができる。また、中国語学では、「有 yǒu : ある/いる・持っている」を動詞とする構文は所有と存在の両者を表すことができると指摘されてきた。特に、場所詞や時間詞が主語となるタイプの「有」構文（場所詞/時間詞+有+存在物）は存在文として扱われることが一般的である（刘月华他 2001、木村 2011 等参照）。以下の図にまとめると、HAVE 型は所有者が所有物を持つことを表し、Locational 型は場所に何かが存在することを表す。Stassen（2009）の分類によると、HAVE 型は所有に焦点を当て、Locational 型は位置や存在を強調するものであるとされる。

所有・HAVE 型	C1. 所有者 (X) + 有 + 所有物 (Y)
存在・Locational 型	C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)

図 7 日本語の「所有」と「存在」の構文的特徴

存在である「C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)」については、「場所 (X)」に方位詞である「-里 (～の中) / -上 (～の表面、～の上)」等が付加される。このように方位詞が加わることで、物体の具体的な位置が明示され、存在文としての役割が強調される。このように、中国語の「有」構文は、所有と存在という意味領域を包括する表現体系を有すると言える。つまり、存在文は主語が場所として機能し、所有文は主語が場所ではないというように、二分的に整理することができる。

まず、「C1. 所有者 (X) + 有 + 所有物 (Y)」の所有の例から見ていく。

(28) 他 有 一双 美丽 的眼睛 和 一头 长发。

彼 ある 1 CL 美しい -の 目 と 1 CL 長い髪

「彼には美しい目と長い髪がある。」

(29) 他 (很) 有 才能。

彼 (とても) ある 才能

「彼は(とても)才能がある。」

(30) 他 有 很 强 的 能力 和 很多 兴趣。

彼 ある とても強い -の 能力 と とても多い 趣味

「彼にはとても強い能力と多くの趣味がある。」

(31) 他 有 一个 不好 的 习惯。

彼 ある 1 CL 良くない -の 習慣

「彼には悪い習慣がある。」

これらは、所有者が所有物を有していることを表す。各例文は、日本語の (J1) から (J3)

のタイプに対応し、中国語では「C1. 所有者 (X) + 有 + 所有物 (Y)」という一つの構文で表すことができる。

次に、「C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)」の例を見ていく。

(32) a. ??/?他 有 一 条 伤疤。

彼 ある 1 CL 傷

b. 他 {脸上・身上} 有 一 条 伤疤。

彼 { 顔の表面 体の表面} ある 1 CL 傷

「彼は {顔・体} に 傷 がある。」

(33) a. 他 有 一个 很 大 的 伤疤。

彼 ある 1 CL とても 大きい -の 傷

b. 他 身上 有 一个 很 大 的 伤疤。

彼 体の表面 ある 1 CL とても 大きい -の 傷

「私 (の身の上) には大きな傷跡がある。」

(32a) では、「他有～：彼は～を持っている、ある」という所有構文が使われているが、この文脈では不自然であり、(32b) のように「脸上：顔に」や「身上：体に」といった場所化された要素を主語に立て、物理的な位置に焦点が当てられた「場所 + 有 + 存在物」という構文を取る必要がある。一方で、(33) にあるように、複雑な修飾語が追加されることで、「他有～：彼は～を持っている、ある」という構文を許容する。つまり、「傷」に「とても大きな」という修飾語を加えることで、その傷の大きさや深刻さが強調され、特定の状況（たとえば、警察が犯人を捜している際の特徴の説明等）において成立するという特徴がある。

さらに、身体部分の例で、「存在物 (Y)」が自然発生的に表れる場合（「しわ」や「あざ」）でも、意図的に入れた場合（「印」や「タトゥー」）も「C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)」の構文で表される。

(34) 他的 {额头 上・ 脑门儿 上} 有 { 几 条 很 深 的 皱纹・一个 很 大 的 痣}。

彼-の {ひたい -の上 おでこ -の上} ある {いくつか CL とても深い -の しわ 1 CL とても大きい -の あざ }

「彼の {ひたい・おでこ} には {いくつかの深いしわ・大きなあざ} がある。」

(35) 他的 {胳膊上・脖子上} 有 {一个标志・一块纹身}。

彼の {腕 -の表面 首 -の表面} ある { 1 CL 印 1 CL タトゥー }

「彼の {腕・首} には {印・タトゥー} がある。」

しかし、身体部分であっても、X と Y の分離可能性は高い、つまり「コンタクト、イヤリング」のように容易に取り外しができる場合は、「C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)」では表せないことが分かる。また、述語を「動詞+了 (PRF)」或いは「動詞+着 (DUR)」とすると自然な文として成立する。つまり、動作の完了と継続状態を示すために、「戴了：付けた」や「戴着：付けている」といった動詞の表現とすることで、自然な文となる。

(36) a. ?他(的) {眼睛上/里・ 耳朵 上} 有 {隐形眼镜・耳环}。

彼の {目-の表面/-の中 耳 -の表面} ある {コンタクト イヤリング}

「彼の {目・耳} には {コンタクト・イヤリング} がある。」

b. 他 ((的) {眼睛 上/里 ・ 耳朵 上 }) 戴了 {隐形眼镜・耳环}。

彼 ((-の) {目 ~の上/~の中 耳 ~の表面}) つける-PRF {コンタクト イヤリング}

「彼の {目・耳} には {コンタクト・イヤリング} が {入っている・付いている} 。」

c. 他 ((的) {眼睛 上/里 ・ 耳朵 上 }) 戴着 {隐形眼镜・耳环}。

彼 ((-の) {目 ~の上/~の中 耳 ~の表面}) つける-DUR {コンタクト イヤリング}

「彼は {目・耳} に {コンタクト・イヤリング} を {入れてある・付けてある} 。」

また、物体の部分としての表現は次のようになる。壁やガラスにある「ひび」の存在について、「C2. 場所 (X) + 有 + 存在物 (Y)」構文で表現している。それに対して、中国語の場合、「壁」と「ガラス」が所者として、「C1. 所有者 (X) + 有 + 所有物 (Y)」となる構文も許容する。

(37) a. {墙上 ・ 玻璃上} 有 一 道 裂缝。[存在文]

{壁 -の表面 ガラス -の表面} ある 1 CL ひび

b. {墙・玻璃} 有 一 道 裂缝。[所有文]

{壁 ガラス} ある 1 CL ひび

「{壁・ガラス} にはひびがある。」

また、典型的な存在文は、下記のようなになる。

(38) 桌子上 有 一本书。

机 -の上 ある 1 CL 本

「机の上に本がある。」

物体部分の例は、所有文と存在文の両方に跨る。物体部分の表現としての典型的な構文

は、存在文の (37a)「墙上有一道裂缝、玻璃上有一道裂缝」である。これは、物体の表面や一部に何かが存在するという空間的・視覚的な描写を行う文となる。一方、所有文の (37b)「墙有一道裂缝、玻璃有一道裂缝」は、派生的な用法であり、これは主語が「这个、那个：これ、あれ」等で特定化されるとより自然であり、「这个墙有一道裂缝，小心！：その壁にはひびが入っているから、気を付けて！」といった注意喚起表現とも親和性が高く、判断を表す文脈で使われる。

中国語のこれまでの議論について図にまとめると、下記のようなになる。

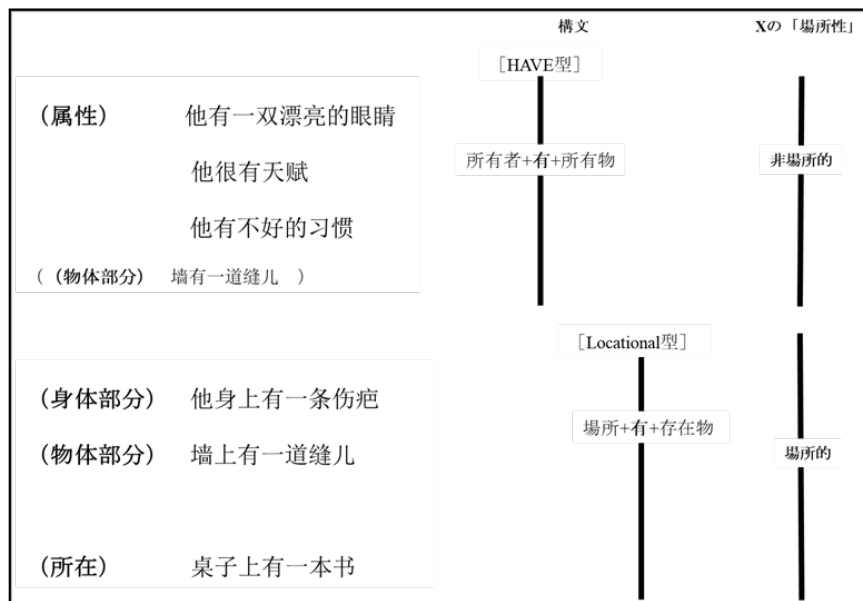


図8 中国語の全体部分関係と所在関係の体系

中国語の場合、Xの場所性という観点から、「非場所的」か「場所的」かという点で大きく分かれる。構文としては、「属性」が所有文、そして「身体部分」から「所在」を表す文までが存在文となることが明らかとなった。

おわりに

本研究の議論をまとめると次のようになる。日本語では、所有文は所在関係を表し、存在文は全体-部分関係を表す。この二つの構文は連続的な関係にあり、文の意味や構文は「場所性」や「主体の意図性」の違いに応じて段階的に変化し、それに伴って構文的・文法的にも異なる特徴が現れる。一方、中国語では、文法形式の有無によって存在文では主語が場所として機能し、所有文では主語が場所ではなくなるというように、両者は二分的に区別される。つまり、主語の「場所性」の有無が存在と所有の構文の分かれ目となっている。

ただし、本研究で示した場所性や意図性といった意味的要素が、他の構文タイプにどのように関与しているのかを検討する必要がある。また、今回の考察は主に作例に基づいたものであり、今後、実際の言語使用データ（コーパス）による実証的な分析を行うことで、

記述の妥当性や汎用性を検証することも重要な課題である。

注

- 1) 出典を明示していない用例は、原則として筆者による作例である。ただし、中国語の例文については、言語的妥当性を担保するため、中国語を母語とする協力者 3 名（出身地：遼寧省、河北省、江蘇省、いずれも 30 代）による文法的妥当性及び自然な言語運用の適格性についての確認を受けている。
- 2) 中国語の「一＋量詞」は、日本語の「1 つの、1 個の」のような数量を表す機能にとどまらず、不定を表したり、新情報として名詞句を導入したりする等、一定の文法機能を担う要素である。

参考文献

- 張立波 (2019) 「存在を表す「有」・「在」構文における日本人学習者の誤用分析及び教授法への示唆」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』5、71-78 頁。
- 趙萍 (2011) 「「所有」と「存在」の意味を表す中国語の“有”構文一場所表現を使用するか否かの観点から一」『言語と文明』9、89-101 頁。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエー・ネットワーク。
- 影山太郎 (2004) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』くろしお出版、3-23 頁。
- 木村英樹 (2011) 「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特性」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』14:89-117。
- 岸本秀樹・影山太郎 (2011) 「存在と所有の表現」影山太郎（編）『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店、240-269 頁。
- 刘月华・潘文娛・故驊 (2001) 《实用现代汉语语法 增订本》商务印书馆。
- 西山佑司 (2021) 「日本語の所有文に対する二つのアプローチ」『日本語文法』21 卷 2 号、869-102 頁。
- 大西克也 (2011) 「所有から存在へ — 上古中国語における「有」の拡張 —」『汉语与汉语教学研究』第 2 期、16-31 頁。
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版。
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版。
- 朱德熙(1982) 《语法讲义》商务印书馆。
- Aikhenvald, A. Y.(2013) Possession and Ownership: A Cross Linguistic Perspective. In: A. Y. Aikhenvald, A. Y.& R. M. W. Dixon (eds.) *Possession and Ownership*, Oxford: Oxford University Press, pp.1-64.
- Dryer, Matthew S. (2007) Clause types. In: Timothy Shopen (eds.), *Language Typology and Syntactic Description*, Vol 1: *Clause Structures*, Second Edition, Cambridge: Cambridge University Press, pp.224-275.

- Heine, B.(1997) *Possession*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker,R.W (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lyons, J.(1967) *Semantics*, vol. 2. London: Cambridge University Press.
- Stassen,L (2009) *Predicative Possession*, New York: Oxford University Press.
- Taylor, J. R. (1996) *Possessive in English*, Oxford University Press.

The System of Possessive and Existential Construction in Japanese and Chinese: A Construction-Semantic Analysis Based on Continuity and Binarity

FUKUDA, Sho ZHANG, Zheng

Abstract

This study investigates how the concepts of possession and existence are linguistically encoded in Japanese and Chinese. Focusing in particular on the Japanese existential constructions using *aru/iru* and the Chinese constructions with *yǒu* (*aru/iru/motteiru*), the paper provides a contrastive analysis of the syntactic and semantic mechanisms underlying these expressions in both languages. In Japanese, existential sentences primarily express the *locative relationship* of entities, while possessive constructions tend to reflect *whole-part relationships*. These two types of constructions form a continuum influenced by factors such as locativity and intentionality of the subject, indicating a gradual shift in meaning and syntactic structure. In contrast, Chinese clearly distinguishes between existential and possessive sentences based on the grammatical form of the *yǒu* construction. Specifically, in existential sentences, the subject functions as a location, whereas in possessive sentences, the subject does not. The presence or absence of locativity in the subject serves as a key indicator in differentiating the two. Through this comparative analysis, the study aims to elucidate the systematic relationship between meaning construction and syntactic choice in language, offering insights for both contrastive linguistics and language education.

Keywords : Existential construction, Possessive construction, *aru/iru*, *yǒu*, Japanese-Chinese contrastive

夏目漱石『草枕』における「逸民」の表象 —陶淵明『桃花源記』との比較を中心に—

許 娜（武漢理工大学大学院生）、周 堂波（武漢理工大学）

要旨

本稿では、那古井の「逸民」像と桃花源の「逸民」像を比較して考察し、「桃源郷」を求める人、出世間の人、出世間に戻る人の三つのタイプに分け、そこから類似点を探り、特徴を分析した。自然に親しみ順応し、高潔な品格を持ち、精神的な悠然の境地を追求する「逸民」の特徴は淵明と漱石が共に推奨する理想的な逸民の品格である。『草枕』執筆前後の漱石の心境や思想などを参照すれば、漱石の「非人情」思想が淵明の隠逸思想から生まれたのは言うまでもない。精神的に俗世の腐敗に堕ちないように努力し、高尚さを追求することこそ「非人情」が推奨する境地である。隠逸思想から「非人情」へと現れる美しさは、理想的な「逸民」像の中に含まれているものとして興味深いものがある。

キーワード： 『草枕』、「逸民」像、陶淵明、隠逸思想、「非人情」

はじめに

夏目漱石は幼い時から漢学を学び、やがて漢詩の世界に入っていく、中国古代の隠逸詩人である陶淵明の「悠然見南山」という詩境に共鳴し、東洋的な隠逸の境地への憧憬を示した。その延長線上に生まれたのが小説『草枕』である。『草枕』は東京から出てきた一人の画家が出世間の那古井へ向う道のりの描写から書き起こされている。ここには淵明の『桃花源記』の冒頭に出てくる「吞気な扁舟を泛べてこの桃源に遡る」という記述に暗示されているように「桃源郷」¹⁾のトポスが下敷きにされている。これと同様に漱石初期の小説『ロンドン塔』でも『桃花源記』をまねて、現実社会から隔絶された幻想的な物語の舞台が作られている。また、漱石は『文学論ノート』の中で使った「悠然見南山」を『草枕』の第一章でも繰り返し引用している。

『草枕』が淵明の『桃花源記』の世界を彷彿させるのは言うまでもないことである。漱石と淵明の繋がりについての先行研究はすでに膨大な蓄積があるが、『草枕』と『桃花源記』を直接比較した研究はまだ少ない。前田愛と佐々木充は陶淵明の存在に目を向けず、画家の旅においてなぜ往路が山道で復路が水路なのかという漱石の意図の解明にのみ焦点を合わせている。また、範淑文も『草枕』と『桃花源記』における空間や物の配置などの比較

に終始している。人物に関する研究では、春日井幹三と門脇広文が『桃花源記』に三回出てくる「外人」の定義を究明しようとしているものの、人物像に対する分析に欠けている。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、画家、那美と武陵漁者、桃源郷民などの登場人物の言動、特質に焦点を据え、両作品における「逸民」像を比較して考察し、『草枕』執筆前後の漱石の心境や思想などを参照しながら、夏目漱石の「非人情」の境地を解明していきたい。

1. 「逸民」特質の種類

『新世紀日漢双解大辞典』（2009）には、「逸民」とは世俗を逃れて隠れ住んでいる人と官職につかず気楽に暮らす人とあり、二つの意味が内包されている。『草枕』と『桃花源記』の舞台は俗世間から離れた山奥の古い孤村のため、こうした「逸民」特質を持つ登場人物が多く登場する。彼らは大きく「桃源郷」を求める人、出世間の人、出世間に戻る人の三つのタイプに分けられる。『草枕』の登場人物は多数いるため、ここでは代表的な特質を持つ人物に絞って挙げて分析する。

1.1 「桃源郷」を求める人

「桃源郷」を求める人とは、禄利から離れ、自ら退讓の精神により高踏的な道を求めている者を指す。『草枕』と『桃花源記』の物語の舞台は塵界を離れ、複雑な山路を抜けてこそ辿り着ける別世界である。文明社会を出て桃源郷を求める人は俗世間と出世間を結ぶ橋となる。これらの人物自体は俗世間の人であり、文明社会に残る跡は消せないものの、俗世間に身を置きながら「逸民」の心を持ち続け、「隠逸」の境地に憧れている。

『草枕』の主人公である画家は現代社会から逃避し、しばらく山奥の村に隠居することを願っている。「文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付け様とする」²⁾として現代文明を憎み、「淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、少しの間でも非人情の天地に逍遥したい」と、淵明の詩境に共鳴している。彼がわざわざ山奥における那古井を訪ねたのは、隠逸の境地に憧れ、「逸民」になりたかったためである。すなわち、偶然桃花源に迷い込んだ漁師と違い、彼は意図的に「出世間」へと辿り着いたのである。

また、彼は画家の使命を忘れず、芸術家として常に那古井で「非人情」の美を探し続けている。彼はいつでもどこでも自らの心に従い、日常の流れによって美を発見するのである。そして、春宵の花影に詩趣を喚起され、那美の悲しみを帯びた物語と振袖の美しい姿からその絵を描いている。あるいは、茶店の御婆さん、大徹和尚など村の逸民と語り合うことで「非人情」の境地を繰り返し吟味している。物語の最後に、画家は久一を見送って現代の都市へと戻るが、そこでついに描きたかった「非人情」的美しさの具現を発見する。それは、那美が俗世間にもがく元夫と顔を見合わせた瞬間、顔に浮かんだ「憐れ」である。

『桃花源記』にもこの画家と同じように隠逸の天地に憧れ、自ら桃花源を追い求める人物がいる。それは淵明と時代を同じくする南陽人の劉子驥である。劉は画家と似た品性の立派な「高尚の士なり」³⁾として浮世離れした人物であり、『桃花源記』において唯一名前が明らかになっている人物でもある。『晋書』⁴⁾に出てくる劉が仙薬を探す伝説は『桃花源記』で語られた物語と似ている。劉は桃源のありかを見つけることができず、結局病死してしまった。

1.2 出世間の人

出世間の人とは、古くは権力から遠ざかって山谷江海のほとりに逃れ、自ら労働して耐乏的な平和な暮らしをする者を指す。『桃花源記』の村人たちの場合、乱世から逃れるということが大きな動機となっており、その生活は彼ら自身が選んだものである。彼らは数百年前に戦乱を避けるために絶境に来て、現実社会とのすべてのつながりを断ち切った。そして、農耕で自給自足し、老若男女がお互いに思い遣りを持ち、調和的で満たされた生活を送っている。しかし、彼らは外の世界とのつながりを拒んでいるわけではない。ある場面で村人たちは熱心に酒食で外人（よそ者）である漁師をもてなし、数日泊めてやり、桃花源の全てを語り尽くしている。

桃花源の村人は明らかな隔世傾向を有している。彼らは現実社会で起きた王朝崩壊のことを少しも知らず、「皆歎惋す」と徹底的な他人の視点から感嘆している。漁師が去る前にも、「外人の為に道ふに足らざるなり」と念を押しており、外の世界といささかの接触も持ちたくないわけではない。

漱石が描いた那古井は桃源郷に近い理想の世界であった。『草枕』において現実社会から遠ざかる村人といえば、画家が最初に出会った村人、すなわち茶店の御婆さんが印象的であろう。彼女は一人で茶店を経営し、自力で団子の粉を挽き、織物を作り、貧しくとも素朴な生活を送っている。また、善良かつ親切で、雨宿りの画家を招き、彼にお菓子とお茶を出し、火を焚いてあげている。金銭には淡泊で、画家が払ったお茶代が多すぎるとまで述べている。桃花源の村人と同じように彼女は素朴で誠実で、俗世社会の利害損得に身を落とすことはない。

観海寺の大徹和尚も代表的な「逸民」である。画家の視点からは、和尚の僧人としての仏性や誇りといった一面はあまり見られない。和尚はいつでも親切で、外の世界からの客を喜んで接待し、何年も山を出ていないにもかかわらず、常に文明社会に興味を抱いている。また、那古井の主人と文明社会で作られた磁器を賞玩し、俗世の悲劇に心を傷つけられた那美に仏法を窮理している。そして、あまり知らなくても喜んで画家や博士と東京の模様を語っている。すなわち、和尚は俗世間の標準を気にせず、万物を開豁に賞美するのである。そのため、画家から見れば、和尚は万能の知恵者でも、上品な芸術家でもなく、

「彼の心は底のない袋の様に行き抜けである。何にも停滞しておらん。随処に動き去り、任意に作し去って、些の塵滓の腹部に沈澱する景色がない」という理想的な境地に辿り着いた「逸民」となる。

1.3 出世間に戻る人

武陵漁者は桃花源への再訪を強く望んでいたことが窺える。「既出、得其船、便扶向路、处处誌之」という記述は、彼が桃花源を離れる際にすでに再訪を意図していたことを示している。しかしながら、「尋向所誌、遂迷不復得路」という結果に至り、結局その願いは叶わなかった。このことから、武陵漁者を「出世間に戻る人」のカテゴリーに含めることは適切ではないと考えられる。さらに注目すべき点は、桃花源の村人から「不足為外人道也。」と明言されていたにもかかわらず、彼が「及郡下詣太守、説如此」という行動を選択した点である。この行為は明らかに約束を破るものであり、「逸民」という概念が内包する倫理観と根本的に相容れない性質のものであったと言える。

武陵漁者が桃源郷に戻るができなかったのと違い、那美は那古井に戻ることに成功した。彼女の「戻る」には二つの意味がある。一つは、淵明によって形作られた桃源郷と区別することであり、もう一つは、漱石の描いた那古井が、逸民の境地の人々が精神的にアクセスできる「非人情」的な境界を示していることである。『草枕』のヒロインとも言える那美は文明社会の典型である、賑やかな東京へ嫁いだが、俗世間の悲劇に傷つけられ、実家の那古井に逃避してくる。那美の身を襲った悲劇とその優美な姿、独特の気質に惹かれ、画家はそこに「非人情」の境地を見出し、彼女の身に「非人情」美学の具現を探し続ける。那美は俗世の道徳と伝統に反発し、性格は大胆かつ奔放で、俗人から見ると「気狂」となる。親に無理強いされて嫁入りした夫の銀行が倒産した際、那美は夫婦の情分を顧みず、夫と離婚して実家に戻る。しかも、自分に心を傾けた和尚に「仏様の前で、一所に寐よう」と大胆に頼んだ上に、絵を描いてほしいと男である画家と一緒に風呂にまで入っている。いずれにしても当時の女性像からすれば不潔な行為である。

しかし、画家から見ると、心を傾けた京都の少年と結婚することができず、東京の金持ちとの結婚を無理強いされ、不幸な婚姻に堕ちた那美はまさしく美しくも哀切なオフィリア⁵⁾のようである。結局、那美が俗世間にもがく元夫と顔を見合わせ、「憐れ」を顔に浮かべた瞬間、画家はついに「非人情」の美しさの具現を見つけたのであったのである。

2. 夏目漱石と陶淵明が憧れる理想的な「逸民」像

漱石は淵明の「採菊東籬下、悠然見南山」などの詩境に共鳴していると思われる。これらの詩には「超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる」、あるいは「別乾坤」を「建立して居る」といった理想的な逸民境地、すなわち「隠逸」が含まれている。『草枕』における画家の「非人情」も、「利害は棚へ上げ」、「俗念を放棄して」、「塵界を離

れた」心持ちが肝心なのであり、こうした境地の真髓を示している。それでは、『桃花源記』と『草枕』の人物像から見た理想的な逸民境地とはどのようなものであろうか。

2.1 自然への憧れ

俗世間から離れ、自然の中に身を置くことは、「逸民」の基本的な思想である。しかし、隠逸思想が推奨する境地とは、単に自然環境の中に身を置くことにとどまらず、自然の魅力を愛でることにある。ここで言う「自然」とは、単なる「都市とは異なる自然環境」を指すだけでなく、「自然の中に身を置き、さらに心身が健康であること」も意味している。このように、「自然」は物理的な環境にとどまらず、精神的・身体的な健全さを包含した広義の概念として捉えるべきである。

『桃花源記』では俗人である漁師が、桃林の「中に雑樹無し、芳草鮮美、落英繽紛たり」といった美しさに思わず惹かれて奥山に入り込み、そこで桃花村に辿り着く。漁師のこの行動自体は、いかに俗世の生活に慣れていても、自然に親しみ、自然に回帰したがる傾向を持つ人間の天性を思わせる。同じように、『草枕』では「逸民」の心を持つ画家がいつまでも那古井の自然の美しさを愛で、「孤村の温泉、春宵の花影、月前の低誦、臘夜の姿——どれもこれも芸術家の好題目である」と、儚くも美しい風物を感じ、詩を作ったり、絵を描いたりしている。

漱石と淵明から見れば、自然における天地の美しさは愛でべきもので、自然に対する憧憬こそ人間の本質的な特性の一つである。また、自然の美しさは人の心を癒し、社会生活の悩みを解消させられる。淵明は「結廬在人境廬、而無車馬喧」、「採菊東籬下、悠然見南山」と有名な詩で田園生活の楽しみを歌っている。漱石も『草枕』で「只菜の花を遠く望んだときに眼が覚める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する」と自然が人間にもたらす魂への癒しを語っている。

前述のように、漱石と淵明の自然への希求は自然環境の魅力だけでなく、自然で健康的な生活状態もさす。『桃花源記』の村人は素朴な農耕生活を送り、畑を耕し、桑を植え、魚を養殖し、「良田・美池・桑竹の属有り」とある。『草枕』では、茶店の御婆さんも、自ら小麦粉を挽いたり、織物を作ったりしている。俗人から見れば、このような生活は素朴で退屈となっている。しかし、漱石と淵明から見れば、自らの両手で労作し、機械や道具に頼らない生活こそが最も自然的で健康な生活状態といえるのである。淵明自身がまさに農耕労作生活の実践者であり、「歡言酌春酒、摘我園中蔬」、「盥濯息簷下、斗酒散襟顏」と労作の楽しみを歌っている。

漱石と淵明はいずれも思わぬ論調に反し、自然的であり、健康的であり、さらに命の力を持つ流儀と文学を推奨している。淵明は当時士大夫の派手で気取った流儀に嫌悪感を抱き、「終日馳車走、不見所問津」、すなわち「彼らが一日中言っていることは少しも役に立たない」と厳しく指摘した。そして、「何則、質性自然、非矯勵所得」と逸民生

活を選ぶことが自然の天性に順応するものである点を強調している。

夏目漱石は、島崎藤村の『破戒』を、批判しすぎることなく、自然で健康的、かつ生命力に満ちた小説として高く評価している。漱石は『三四郎』において、「文学は人生である」という文学観を提示しており、これは文学が自然な人間性に順応し、命の力を内包すべきであるという考え方を示している。この観点に基づき、彼は文学が過度に装飾的であったり、派手であるべきではないとした。さらに、『草枕』において、那美の美しさが「常に芝居をしている」「自然に芝居をしている」と表現されている点も、漱石のこの文学観を反映したものであると考えられる。

2.2 高潔な品格

漱石と淵明は共に『論語』、『孟子』など儒教思想の薫陶を受けたため、極めて高い道徳感を備え、人間性の中でも「正、義、直」の品格を重視し、低劣で卑俗な人間を軽蔑する傾向にある。

この高潔さも彼らが作った人物の人格から伝わってくる。淳良で親切な桃花源の村人は美食と酒で漁師をもてなす。那古井外の茶店の御婆さんは雨宿りの画家をもてなし、お茶とお菓子のほか、火まで焚いてくれている。大徹和尚は観海寺に來た人々と常に親しく話している。

漱石は『文芸の哲学的基礎』で真、善、美、莊嚴の四つの文芸理想を提起した。これはまさに文芸が伝えるべき理想と信念であり、文芸作品の正しい姿勢でもある。この理想を作中人物を通して伝えようとしているのがわかる。淵明はさらに高潔で、梁啓超はその品格の立脚点が孟子の「不屑不潔」に近いと主張する。淵明はまた真摯で多情でもある。「農務各自歸、閑暇輒相思、相思則披衣、言笑無厭時」といった詩で表した友人との楽しみは、桃花源の「黄髮垂髫すいてう、並びに怡然として自ら楽しむ」という平和的情景を思い起こさせる。

2.3 悠然とした精神的な境地

夏目漱石は『草枕』の冒頭において、画家の口を借りて次のように感嘆を述べている。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」この言葉は、混乱した社会情勢に対する漱石の深い洞察を反映しており、社会の不安定さと人間関係の複雑さを強調している。漱石と陶淵明は共に「隱逸」の詩境へと至った。すなわち、彼らは「人の世が住みにくいからこそ、文芸は世俗を超脱しなければならない」と考えたのである。この考え方は、現実の物質的な側面を超えて、精神的な領域におけるより高い境地を追求することを意味している。彼らが描いた「逸民」は、まさに俗世の暗闇を超越し、精神的自由を希求している姿を象徴している。

淵明にとって、俗世がもたらした最大の苦痛は官界の腐敗と墮落にほかならない。東晋

時代、士大夫の気風は派手で放蕩であり、考え方も打算的で、利己的で、腐敗しており、破廉恥であった。淵明は自分一人の力ではこうした気風を向上させることができず、同じ穴の貉になりたくないため、ついに官職を辞めて田園生活に回帰することを選んだ。桃花源の存在を聞いた太守が急いで探しに来たことから、『桃花源記』の世界の官界もいかに功利が混濁しているかがわかる。「高尚の士」である劉子驥もこのような社会風紀に慣れず、消えた桃花源を諦めずに求め続けたのだと考えられる。漱石は淵明の影響を受け、「世俗を超脱し、精神的に悠然とした境地を追求する」という隠逸思想を形成した。仮に人間がどうしても現実社会を離れることができないのであれば、現実の束縛を超え、精神的自由を追求するとよいと考えられる。漱石が経験した時代はまさしく『草枕』の画家が嫌悪した文明社会を背景としていた。満州の戦場に赴かざるを得なかった久一のように、戦争は人々の正常な生活を蝕み続けた。西洋文明が人々の個性を「踏み付けようとする」時代であり、現実社会は「しつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴で埋って」いたのである。

「逸民」になることによって、個人は精神的な余裕を持ち、悠然とした境地に達することができる。この精神的境地は、まず放心し、実情に満足し、慌てずに人生を送る態度に根ざしている。陶淵明は、人生の志向を「聊乘化以歸盡 樂夫天命復奚疑」という言葉で表現している。この詩は、彼が詩と酒に囲まれた生活を送り、死ぬ直前まで和やかに自己分析の詩『自挽』を創作することができたことを示している。彼の生き方は、精神的な余裕と安定を象徴している。

また、夏目漱石も「余裕」の文学的主張を提唱し、『草枕』において、画家の口を借りて「放心と無邪気とは余裕を示す」と述べている。漱石が描いた大徹和尚は、常に心にわだかまりを持たず、自由気ままに話し、万物を無邪気な視点で見ている。この姿こそが、逸民の「余裕」であり、精神的な自由を象徴している。また、こうした精神的境地には、自己の利害を棚に上げ、傍観者として俗世の出来事を冷静に見守る態度が含まれている。

『草枕』において、漱石は「憐れは神の知らぬ情で、しかも神に最も近き人間の情である」と述べている。これは、漱石が描いた那美と、『桃花源記』の村人たちが示す姿勢にも通じる。那美と村人たちは、何気なく俗世間の人々に対してその余裕の表情を見せるが、この時、彼らはすでに俗世を超越し、この世の利害を棚に上げ、悠然とした神に近い精神的境地に達しているのである。

3. 「逸民」像と「非人情」

『草枕』では、画家自らが希求する芸術や思想の境地を「非人情」と述べた。漱石の「非人情」思想が淵明の隠逸思想から生まれたのは言うまでもない。その要となるものは隠逸思想と同じで、「利害は棚へ上げ」、「俗念を放棄して」、「塵界を離れた」心持ちを含んだものであり、そこには独自の解釈もある。次に、夏目漱石の「非人情」という概念の意味に

について検討する。

3.1 俗世からの超脱

ここでいう「超脱」には二つの意味が含まれている。一つは、陶淵明が腐敗した官界や社会の慣習を嫌悪し、物質的欲望を捨てることに示されるように、真摯で善良な高潔な品質を追求する姿勢である。これは、西洋文明の侵入によってもたらされた拝金主義や享楽主義など、腐敗した思想を拒絶し、混沌とした時代背景の中で民衆の精神的墮落や焦燥に抵抗する態度に関連している。そして、できる限り「放心」し、悠然とした境地に至ることが理想とされる。これにより、利害にとらわれることなく、「利害は棚に上げる」という無欲な態度で人生を送ることが目指される。

もう一つの意味は、文明の個性に対する抑圧に反発し、個人主義を追求するという立場である。ここでいう「文明」には三つの側面が含まれており、一つ目は人間の個性を抑圧する伝統的な道德観であり、二つ目は植民地主義や帝国主義といった西洋の風潮によって改造された民衆思想であり、三つ目は個人の意志を無視する国家の意志である。「文明」は外部社会から押し付けられた「人情」とも受け取れる。古い道德観を持つ人々からの批判を浴びるが、那美はこれら外部から与えられた「人情」を無視し続け、マイペースの生活を送っている。「非人情」とはまさしく「人情」を個人への束縛から引き離し、自らの思想と行為は自らで決めることを意味する。

『草枕』第1章において、「芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げている」と述べられているように、漱石は文芸思想における「利害の棚上げ」を「非人情」の前提として位置づけている。この関係性は、画家の言動に明確に表れており、例えば、彼が「世間的の人情を鼓舞するようなもの」ではなく、「俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩」を求める姿勢に顕著である。しかし、現実の人情から完全に離脱することは困難であり、那美との関わりにおいて画家は「利害の棚上げ」の限界に直面する。『草枕』において、画家は那美の身の上話を聞くことを拒否しようとするが、最終的にはその情動に動揺させられる。この描写は、「非人情」という理念が現実の人間関係においていかに脆弱であるかを示唆している。換言すれば、漱石の提唱する「非人情」とは、単なる感情の否定ではなく、現実の人間関係において避けがたく生起する人情的な情動と一定の距離を保ちつつ、巻き込まれることを避けながら観照的な態度を維持しようとする試みであり、動的な美的態度として解釈すべきである。この観点から分析すると、画家の「非人情」実践は、那美との相互作用の関係性において顕著な変容を示すことが確認される。具体的には、那美の「憐れ」という情動的表出が、画家の「非人情」理念に対して認識論的相対化を引き起こし、結果として美的認識の深化と概念的再構成を通じて、「非人情」概念そのものの動態的変容がもたらされるのである。

3.2 自然への憧れ

ここでいう自然への追求には二つの側面が含まれている。一つ目は、自然環境に親しみ、その美を鑑賞することである。二つ目は、自然の純粋な状態への追求である。「非人情」理念は隠逸思想から生まれたが、その中の「塵世を超脱する」真髓を吸収したほか、純粋さを追求し、自然に順応する部分も吸収している。淵明が田舎に戻ったのは本性に順応したもので、耕作の後に酒を飲んだり詩を作ったりするのはすべて気ままで、わざとしているのではない。このような純粋さはまさに「非人情」における重要な内包の一つである。画家の場合は、現代裸体画を「肉を覆えない」のに工夫するのはまさにいじくりすぎで、「服をつけた人間の常態」に順応しておらず、美とは言えないとしている。

3.3 美の探究

淵明の隠逸思想を一種の哲学観や人生への態度と言うのであれば、「非人情」は芸術の面をより強調し、漱石が文芸創作者として提起した芸術観である。まず、『草枕』は終始「美の探究」をテーマに展開されている。そして、主人公の芸術創作者である画家が那古井に向かう目的は俗世から遠ざかるだけでなく、「俗世を超える美」を探して創作するものでもある。そこで画家は自然の風物の中で美を見つけ、「逸民」の生活の中でも美を探し続けた。画家から見れば、俗世の道德観念と合わない那美こそ「非人情」美の象徴に適していたのである。「芝居」、「裸体画」、「憐れ」など、画家の「非人情」に対する発見、悟り、昇華はすべて那美と関わっている。漱石は淵明の隠逸思想に美の内包を与えたのである。

当時の文壇で主流を占めていた自然主義文学は、生活の中での「真実」を追求することを重視していた。しかし、そのアプローチは本能を掘り起こし、自己を暴露することに過度に焦点を当てるあまり、虚無主義や無理想、解決策の欠如といった消極的な要素をもたらした。これに対して、夏目漱石は芸術は生活よりも高い境地に位置し、美を追求すべきだと考えていた。そのため、彼が推奨した「非人情」の理念は、当時日本で流行していた自然主義文学とは異なっている。『草枕』においても、夏目漱石は自然主義に対して批判的な立場を示しており、「肉体は隠さねば卑しくなる」と述べ、自然主義が追求する過度な自己暴露を否定している。

3.4 精神世界の追求

厳密に言えば、那古井の人々は真の「逸民」ではなく、ただ精神的に逸民の境地に達していたに過ぎない。すなわち、漱石が打ち出した「非人情」は、俗世間と繋がりを絶った田舎生活を送ることで辿り着ける境地ではない。通常、人が完全に俗世との繋がりを絶つことは不可能である。漱石本人も淵明のように仕事を辞め、田舎で農業に従事するという形で逸民になることはできなかった。そこで漱石は審美的な感受、精神的な境地を追求す

ることとしたのである。

したがって、「非人情」は決して世を捨てるという消極的な姿勢ではない。むしろ真正面から受けながら、それに左右されず、心が動かないという積極性を備えた姿勢である。人々が現実から逃避することを奨励するのではなく、虚しく墮落した思想と同化せず、清高な品格と純粋な心を維持するよう呼びかけている。

もし淵明が俗人のたどらない桃花源を借りて現実社会への失望と理想郷の遙遠を語ったとするのであれば、漱石は「非人情」の境地を求めることで、誰もが自分の心に属する精神的な理想郷に辿り着けると指摘したのだと考えられる。

おわりに

本稿では、那古井の「逸民」と桃花源の「逸民」の特徴と品格を列挙し、両地の「逸民」の類似点と特徴を分析した。自然に親しんで順応し、高潔な品格を持ち、精神的な悠然の境地を追求するという三つの「逸民」特徴は漱石と淵明が共に推奨する理想的な逸民の品格である。また、漱石が提起した「非人情」、すなわち隠逸思想の延長線から生まれた漱石独自の解釈を検討してきた。漱石が推奨するのは淵明のように自らの身を持って文明社会を離れて田園に回帰することではない。人間がすべてを捨てて物理的に社会から脱出するのは非現実的である。精神的に俗世の腐敗に堕ちないように努力し、高尚さを追求することこそが「非人情」が推奨する境地であると考えられる。

漱石の「非人情」思想は淵明の隠逸思想から生まれたが、戻ることができない「桃源郷」とは異なり、漱石が創作した那古井には高潔な逸民らが行き来できる空間がある。隠逸思想から「非人情」への美は、理想的な「逸民」像と響き合う姿勢を示しており、これは「逸民」像の中に含まれるものとして興味深い。

注

- 1) 陶淵明の『桃花源記』を源とし、俗界を離れた別世界、仙境、理想郷を指す。
- 2) 本稿における『草枕』の本文はすべて『草枕』（新潮社、2005年改版）による。
- 3) 本稿における陶淵明の作品の原文と訳文はすべて『陶淵明集』（岩波書店、1982年版）による。
- 4) 『晋書』（しんじょ、繁体字中国語：晋書）は、中国晋朝（西晋・東晋）について書かれた歴史書。「隠逸」巻では劉驎之が衡山で仙薬を探そうとする物語が述べられた。
- 5) オフィーリア（英語：Ophelia）は、ウィリアム・シェイクスピアの戯曲『ハムレット』に登場する稀代の美人。父親が恋人に殺された後狂気に陥り、小川に落ちて溺死する。

参考文献

小森陽一（2010）『漱石論—21世紀を生き抜くために』岩波書店。

- 森三樹三郎（1992）『無為自然の思想—老莊と道教・仏教』人文書院。
- 磯田光一（1986）『漱石文芸論集』岩波書店。
- 梁啓超（2018）『陶淵明』中華書局。
- 李玉双（2013）『瘋狂与信仰：夏目漱石研究』中国社会科学出版社。
- 小尾郊一（1988）『中国の隠遁思想—陶淵明の心の軌跡』中央公論新社。
- 春日井幹三（2003）「『桃花源記』の「外人」について」『KOTONOHA』（7）
- 斉金英（2018）「夏目漱石『草枕』における「逸民」表象」『超域文化科学紀要』23、57-75 頁。
- 中谷由郁（2001）「『草枕』論：那美さんをめぐる「隣れ」と「非人情」」『大妻国文』32、115-130 頁。
- 范淑文（2007）「漱石の「桃源郷」とは—『草枕』を例にして」『台大日本語文研究』14、48-74 頁。
- 蔡樂其（2013）「『草枕』那古井与桃花源之比較」『青年文学家』36、24 頁。
- 尹相仁（1997）「近代日本文学における『桃源郷』モチーフ—夏目漱石と村上春樹の場合」『国際シンポジウム』10、147-152 頁。

The Reclusive Images in Natsume Sōseki's *Kusamakura* A Comparative Study with Tao Yuanming's *Peach Blossom Spring*

XU, Na ZHOU, Tangbo

Abstract

This paper examines three types of reclusive hermits: seekers of the Peach Blossom Land, those who enter the transcendent realm, and those who return to it. Through this analysis, we identify their shared characteristics and distinctive traits. The ideal hermit, as advocated by both Tao Yuanming and Natsume Sōseki, embodies a deep affinity with nature, moral integrity, and a pursuit of spiritual serenity. By examining Sōseki's state of mind and philosophical views before and after writing *Kusamakura*, it becomes evident that his concept of "non-emotionality" was profoundly influenced by Tao Yuanming's reclusive philosophy. At its core, "non-emotionality" promotes an elevated state of mind, resisting the corruption of the mundane world while striving for moral nobility. The aesthetic transition from reclusive thought to Sōseki's "non-emotionality" reveals an intriguing dimension within the idealized image of the hermit—one that harmonizes detachment with an enduring pursuit of spiritual beauty.

Keywords : Kusamakura, Reclusive Images, Tao Yuanming, implicit thoughts, non-emotionality

新文科構築における理工系大学の日本語専攻の課題と展望 —「日本語＋」複合型人材育成モデルの実践—

蔡 少峰（武漢理工大学大学院生），周 堂波（武漢理工大学）

要旨

本稿では、中国の理工系大学における日本語専攻教育の現状、直面する課題を詳細に分析してきた。新たな文系教育の構築と新質生産力の発展という背景のもと、理工系大学の日本語専攻教育を最適化・革新し、新時代の要請に応える高い素養を備えた複合型人材を育成する方策を模索した。理工系大学の日本語専攻の今後の発展においては、教育の根本任務である「立德樹人」（人を育て、徳を立てる）を堅持することを前提に、国家戦略の需要や市場動向と密接に連携し、教育モデルの転換とアップグレードを推進しなければならない。

キーワード： 理工系大学、日本語＋、日本語専攻、複合型人材

はじめに

「日本語＋」複合型人材と新文系の概念が打ち出されて以来、全国の日本語分野の専門家は積極的な模索を行っている。また一部の専攻特化型大学は、新質生産力の発展のニーズに合致する「日本語＋」複合型人材教育の発展の道を探っている。この中で大学の日本語教育は外国語教育の重要な構成要素をなしている。『日本語学習と研究』¹⁾によれば、現在までに日本語学科を設置している大学は中国全国で525校に達しており、基本的にほとんどの大学で日本語教育が行われている。日本語学科の「日本語＋」複合型人材育成と新文系建設の過程では、外国語系の大学や師範系、総合大学で顕著な成果を収めている。しかし、全国的な視点から見ると、多くの理工系大学の日本語学科の場合、発展の速度は比較的遅い。こうした大学のほとんどに日本語学科が設置され、その範囲は広いものの、関連した研究はいまだ脆弱である。そのため、「日本語＋」複合型人材と新文系概念の発展という背景の下、理工系大学の日本語学科の発展に適した「日本語＋」の道筋を模索・実践し、中国の理工系大学の日本語学科の人材育成モデルを革新・改善することは、理工系大学の日本語学科の発展にとって重要な役割を果たすと考えられる。

1. 非理工系日本語専攻の現状

AI 技術の発展に伴い、日本語を代表とする英語以外の専攻は大きなリスクと挑戦に直面している。このような状況下で、大学、特に理工系大学の日本語専攻は「新文科」の概念を背景に、自校の理工系専攻資源に基づいて、新質生産力の発展のニーズに合致する「日本語＋」複合型人材をいかに育成するかが重要なテーマとなっている。しかしながら、現在の国際情勢や国家戦略的発展ニーズにおいて、中国の大学における日本語教育は、以下のように、積極的な傾向を呈している。

1.1 高等教育体系における日本語学習者の人数

中日両国は古くから経済貿易や文化交流の分野で幅広い協力を行っている。特に経済グローバル化という現状の下、中国国内の多くの大学は社会からの日本語専門人材の需要に応えるため、日本語専攻を設置している。日本国際交流基金が提供するデータによると（詳細は表 1 参照）、現在、中国の日本語学習者の総数は 105 万 7 千人に達しており、2018 年の統計データに比べて約 5 万 2 千人増加している。これらの学習者の中で、高等教育段階の学習者数は 55 万 7 千人余りで、日本語学習者の総人数の約 52.6% を占めている。このデータは、中国の高等教育分野における日本語学習者数の大きさを示している。また、ここ数年は人工知能の普及に伴い、オンライン教育のプラットフォームが日本語学習者に好まれる傾向にある。Duolingo²⁾ の『言語学習報告』によると、この 3 年間、オンラインプラットフォームの日本語学習者、特に高等教育段階の学習者数は増加しており、このうち AI 駆動の機能（例えば音声認識、適応型学習）は「学習を続けるための重要な要素」として学習者に選ばれている。しかしながら、AI 技術の影響により翻訳ツールが進化・普及し、一部の高等教育段階の日本語学習者には「AI を使って学習を代行する」傾向があり、初級段階の学習者数が減少していることも注目に値する。一方で、これにより上級学習者（例えば日本語能力試験の N1 などに合格した者）の日本語ビジネス、学術分野に対するニーズも喚起されている。AI を活用した学習支援ツール、例えば LingoDeer³⁾ などは、AI による文法解析やインタラクティブな練習を通じて日本語の独学効率を高め、日本のゲームや漫画を愛好する興味駆動型の学習者を増やしている。教育段階の分布変化を見ると、英語以外の大学入試政策の影響により、中等教育段階の学習者数は 2018 年の 9 万 109 人から 33 万 5 千 876 人へと急増した。これにより、過去数年間、高等教育段階で日本語を主専攻または第二外国語として選択する人数が増加したことが分かる。

表 1 教育段階別に見る日本語学習者の比率

(単位：人)

中国本土	学習者の教育段階の構成			
	初等教育	中等教育	高等教育	学校教育以外
	3, 442	335, 876	557, 153	160, 827

(著者が国際交流基金 2021 年度東アジアの日本語教育状況の統計データに基づき作成) ⁴⁾

1.2 カリキュラム設定の段階的多様化と「日本語+」モードの模索と実践

現在、中国で日本語専攻を開設している大学は多数存在し、そこには総合大学、師範系大学、外国語系大学、理工系大学などが含まれる。異なるタイプの高等教育機関は、日本語専門人材の育成モデルと特色において、それぞれ独自の教育的な取り組みをしている。例えば、師範系大学の日本語専攻では、師範教育の優位性に基づき、専門的な日本語教師養成コースを開設している。また、東部沿海地域や経済発達地域の総合大学では、その強力な総合力を武器としている。日本語専攻の発展速度は速く、大学の数も多く、募集規模も比較的安定している。これら沿海地域の大学では、地理的な利点を活かして、地域の経済発展のニーズに合致する日本語専門人材を積極的に育成しており、カリキュラム設定は多様化と現代化の傾向を示している。伝統的な日本語言語文学に加え、ビジネス日本語、観光日本語、科学技術日本語、日本語通訳・翻訳などの専門分野も開設されている。また、北方の一部総合大学の日本語専攻では、日本語と国際法、外交日本語などのコースも追加されており、学生の総合的な能力を全面的に高め、社会の異なる分野に対する日本語人材の需要を満たしている。さらに、情報技術の応用、例えばオンライン学習プラットフォームやマルチメディア教育ツールも、教育成果を挙げている。グローバル化と学科の相互融合という現在の大きな流れの下、理工系大学の日本語専攻の発展は新たな機運を迎えている。すなわち、従来の文法、語彙、読解を中心としたカリキュラム体系から徐々に拡大し、科学技術日本語翻訳、日本語学術論文の執筆などの実用性の高い新しいコースが取り入れられており、これは時代の要求に対する積極的な対応だと言える。教育方法においても、教師による一方的な講義から対話型や実践型へと転換し、現代の情報技術を利用して没入型の言語学習環境を作り出すよう努めている。これらの現代化と多様化された措置は、日本語専攻の教育に新たな活力を注入するだけでなく、その後の学生の能力育成における基礎を築き、新しい局面を切り開いている。

1.3 豊富な教育資源と専門実践の融合レベルの向上

教材について見ると、豊富な種類の日本語教材が巷間にあふれ、絶えず更新・改善されており、異なるレベルや専攻のニーズを満たしている。一部の高等教育機関では自らの教育的特色に基づき、独自に教材を編纂し、教育の効果を高めている。ここ 3 年間で多くの

優れた日本語教材が登場し、現在の日本語学習者が急務とする分野の穴が埋められてきた。例えば『簡明古典日本語入門教程』『日本語作文のスコアアップ攻略』『日本語の流行語と日中相互翻訳ハンドブック』などは、現在の専門学習者の異なるニーズに応え、資格取得や日本語の大学院入試における日本語学習者、特に日本語専攻の学習者がこれまで不足していた部分を補っている。

教育施設を見ると、多くの高等教育機関でマルチメディア教室、音声室などの現代的な教育施設を備えており、一部の公共機関はさらに日本語実験室を建設し、教育活動に優れたハードウェア的なサポートを提供している。同時に、図書館の日本語蔵書や電子資源も増えており、学生の学習や研究活動の便に供している。実践教育基地においては、多くの高等教育機関が企業や公共機関と積極的に提携関係を築き、学外の実践教育基地を設置し、学生に実習や訓練の機会を提供し、その実践技能と職業的素養を高めるよう努めている。

しかし、ここでもまた日本語専攻は大きな試練に直面している。人工知能翻訳技術の進歩や世界情勢の激しい変化、特に中日関係の展開次第で、言語専門人材の需要は影響を受けるため、一部の大学では外国語専攻を廃止する動きもある。日本語専攻も例外ではなく、新文系発展の背景の下、引き続き教育プログラムを調整し、社会における将来的な新質生産力人材の需要に適應することが求められている。

2. 理工系大学の日本語専攻の発展の現状

中国における新質生産力の発展に対する切迫したニーズと、中日両国が経済と技術分野で緊密に協力していることに鑑み、理工系の専門分野における日本語能力人材の需要は高まっている。しかし、伝統的な外国語系や師範系の大学が設ける日本語専攻と比較すると、中国の理工系大学の日本語専攻は、現段階において次のような多くの問題と矛盾を抱えている。

2.1 需要に対する量的・質的不足

理工系大学の日本語専攻の学生は、技術と言語の融合において潜在的な優位性を備えているものの、言語実践の機会が限られており、言語応用能力と理工系知識の融合度が不十分であることは否めない。

2.2 カリキュラム体系と教育資源の制約

多くの理工系大学では、日本語のカリキュラム設定が基礎言語技能の習得に偏りすぎている。そのため、専門的な日本語知識の伝授、異文化コミュニケーション能力の育成、または自校の優位な学科を基にした「日本語＋」学科融合に対する重視度が不十分となる。さらに、日本の大学との密接な協力関係が欠如しており、学生が直接日本文化に触れる機会が得られないことも多く、これが異文化コミュニケーション能力の向上を制限している。

と考えられる。

2.3 専門教育の目標の不明確さ

多くの理工系大学は、学際的な能力を備えた日本語専門人材を育成するという理念を打ち出しているものの、理工系大学の特色ある専門分野と優勢な学科を基にした深層的な交流との融合は必ずしもうまく行われていない。華中地域のある理工系大学を例にとると、同校の教育計画における目標は「日本語専攻は、広い国際視野、しっかりとした日本語の専門知識と能力、時代に合わせた人工知能素養、そして強い異文化コミュニケーション能力を備え、適応能力、実践精神、革新意識が強く、国家の外交戦略と社会の発展ニーズに合致し、科学技術の最前線、産業の革新、地域の発展に貢献できる多様な日本語専門人材を育成することを目指す」となっている。

総合的な分析から、理工系の高等教育機関の日本語専攻は、教育目標、カリキュラム体系の構築、教育資源の配置、就職市場における競争力など、複数の側面で試練に直面していることが明らかになっている。これらの試練に効果的に対応するため、高等教育機関は日本語専攻のカリキュラム体系を見直し、最適化する必要がある。その上で、日本の高等教育機関との学術交流と協力を強化し、学生の実践的な言語応用能力と異文化交流能力を高めることで、市場の需要に合致する高い素養を備えた日本語専門人材をより多く育成することが求められる。

3. 理工系大学の日本語専攻の直面する課題

2020年11月、第4回地域包括的経済連携協定（RCEP）が施行された。これにより、中日両国間の相互協力と経済的な相補性は一層強まり、中日両言語を自在に操って業務が行える、または両国の文化的背景を熟知した「日本語+」複合型人材の需要も同様に高まっている。しかしながら、2023年、日本で福島原発処理水の海洋排出を発表したことで、中国の日本語教育は大きなダメージを受けた。ただし、国際情勢の新たな変化、新文系教育改革の推進、新質生産力の発展要求の提起に伴い、中国社会全体の変化も新時代の日本語教育に新たなチャレンジと機会をもたらしている。

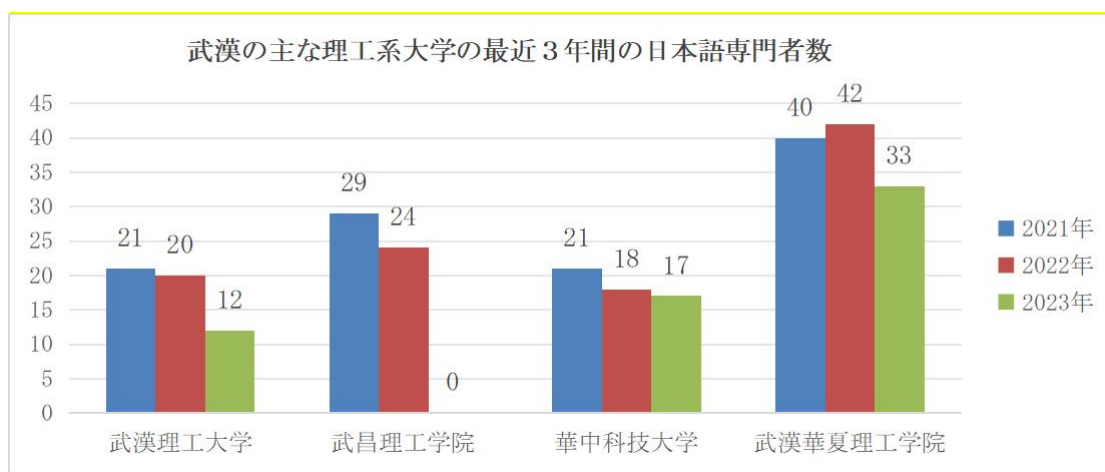
3.1 日本語専攻の学生募集における問題

この問題は、専攻自体の存続と発展だけでなく、大学の学科構成の合理性や人材育成の包括性にも大きな影響を与えている。特に理工系大学では、毎年専攻振り分けという制度によって不本意ながら日本語専攻に入ってくる学生の数が無視できないほど多い。入学後、日本語を引き続き学ぶ学生の数も著しく影響を受けている（図1参照）。まず、学生や保護者の視点から見ると、理工系大学の強みは理工系の専攻にあると通常は考えるため、日本語専攻の教育的質、教師陣の力量、専攻の特色に対して疑念が抱かれることになる。こ

のため、理工系大学の日本語専攻は学生募集での信頼において危機に直面し、入学者の質量ともにマイナスの影響を受けている。また、一般的に言語系の専攻は人工知能翻訳技術に取って代われ、日本語専攻の就職の場は大幅に減少すると考えられている。ちなみに現在、一部の理工系大学の日本語専攻では大類募集という方式を採用している。これは、学生募集時に関連する専攻をまとめて「外国語文学類」として、学生は入学後、一定期間の基礎科目の学習を経て、興味と成績に基づいて具体的な専攻コースを選択するというものである。理工系大学における文系学部・学科の点数は相対的に低いため、就職に有利な理工系大学に入るために、一部の学生はまず比較的低い点数で入学できる外国語文学の大類に入り、1年間の学習の後、留年などの形で他の優位な理工系専攻に転専攻する例が少なくない。これは、すでに専攻分類を行っている日本語専攻にとって、さらに入学者数を減らす要因となっている。

図1 武漢の主な理工系大学における最近3年間の日本語専攻者数

（単位：人）



（著者が電話インタビューと面談を基に作成）

3.2 理工系専攻が加味されていないカリキュラム設定

武漢にある3つのトップレベルの理工系大学の日本語専攻の人材育成計画を見ると、カリキュラム設定は主に基礎日本語、日本語言語学、文化・文学などの核心科目を中心に展開されていることがわかる。選択科目の面では、主に人文社会科学の領域に傾いている。しかし、これらの開講はしばしば教師の専門や学生の選択傾向に依存するため、カリキュラムの配置には大きなランダム性があり、多くの不確定要素が存在する。このようなやり方は、専攻コースの科目体系の系統性を欠如させ、理工系の専攻と明確に結びついた複合型人材育成の特色と結びついていない。武漢理工大学を例にとると、同校は材料科学、デザイン学、マルクス主義理論などの学科領域において顕著な優位性を持っている。しかし、日本語専攻の育成計画を立てる際（図3参照）、自身の優勢学科の資源を十分に活用して

いるとは言えない。文系に偏重するマルクス主義理論やデザイン学などの専攻でさえ、明らかな学際的融合の試みが見られないため、材料科学など理工系の看板学科の領域における深層的なクロスオーバーはもちろん無きに等しい。また、「日本語+複合型人材」の育成目標の定義には明確さが欠けており、他の人文社会科学系や言語系の大学の育成モードと比較して、明確な差別化の特徴が見られない。したがって、「日本語+理工系人材」の要求からはいまだ一定の隔たりがある。

表2 武漢理工大学日本語専攻のカリキュラム

課程分類	一般教養課程	学科基礎課程	専攻課程	個性課程	集中性実践教学サイクル	課外単位数	総単位数
必修課	30	27	47	/	25	10	175
選修課	9	/	21	6	/		

(筆者が武漢理工大学 2024 年度版日本語専攻養成方案に基づき作成)

これは武漢にのみ言えることではなく、「985」⁵⁾の理工系大学である大連理工大学も、現在の日本語専攻の人材育成計画において、学際的な複合育成の傾向は見られない。「日本語+」複合型人材育成の先駆者として、「彼らは機械製造及びその他の自動化、金属材料工学、コンピュータサイエンスとテクノロジー、ソフトウェアエンジニアリングなどの専攻に対し、日本語強化の科目を専門に設け、多くの専攻では学修期間を1年延長することを要求している」。大連理工大学は理工系の優勢専攻において、日本語との複合人材育成を積極的に模索しているものの、日本語専攻において「日本語+」と理工系のカリキュラム設定を行っていない。確かに、言語系の専攻で理工系の知識を学ぶには大量の基礎理論や知識を必要とするものの、人工知能の急速な発展に伴い、今後数年間で、日本語専攻の学生や教師が AI 技術を利用して理工系とのさらなる複合を行う可能性は否定できない。

表3 大連理工大学日本語専攻のカリキュラム

課程分類	公共基礎と通識教育課程	大類、專業基礎類と專業類課程	創新創業教育	專業実践と卒業設計	課外単位数	総単位数
必修課	35	93	/	24	15	160
選修課	6	7	2	/		

(筆者が大連理工大学 2022 年度版日本語専攻養成方案に基づき作成)

なお、人材育成計画において理工系の専攻との複合はまだ行われていないものの、大連理工大学は「日本語+」のアイデアを中心に学生の「ソフトスキル」を育成している。例

えば、毎年日本語の吹き替えや演劇公演、スピーチとディベート、科学技術分野の翻訳実習、通訳実習などのプロジェクトを設け、学生の個人能力を高めようと努めている。これは、将来の日本語専攻の学生のキャリアプランニングや、個人の潜在能力の模索において重要な意義を持ち、現在の「日本語＋」初期段階の発展的試みとして発揚し、参考にする価値がある。

同じく「211」⁶⁾の理工系大学である南京理工大学は、異なる複合化の道を切り開いている。同校の日本語専攻の人材育成計画は、上述の2つの理工系大学と大きな違いはないものの、独自の複合化育成の考え方を持っている。同校は専門教育の選択科目に10単位を設定しており、その中でクロスオーバー融合単位数は4単位以上であることが条件となっている。総単位数に占める割合は多くはないものの、同校が積極的に日本語専攻の学生に日本語/言語学の枠を超え、他の学科に挑戦することを推奨していることが伺える。同大学の人材育成計画には、クロスオーバー融合学科がそれぞれ哲学、世界史、中国語文学、報道学であることも明示されている。上述の専攻はすべて文系の専攻であり、他大学同様、日本語と自学の優勢な理工系専攻を複合化してはいないものの、学科のクロスオーバー融合の道は着実に進んでいる。

3.3 新興生産力に対応した複合型日本語人材の育成

現在、理工系大学の日本語専攻のカリキュラム体系には構造的な問題が存在する。それは、技能訓練系の科目が占める割合が65%から75%に達しており、「普通高等学校本科専攻類教育質量国家基準」における「専攻核心科目の占める割合は50%を超えてはならない」という要求との間に大きなギャップが生じている点である。このような「技能重視、素養軽視」のカリキュラム構成は、2つの現実的な要因によるものと考えられる。1つ目は、ゼロからの学生の言語習得ニーズが客観的に選択科目のスペースを圧縮している点である。2つ目は、専攻教師の専門分野の同質性が学際的な科目開発能力を低下させている点である。エリート型人材は、地に足のついた言語力と言語技能だけでなく、豊富な思想理論による導きが必要である。思想の衝突を引き起こし、問題意識と革新意識を刺激することで、時代のニーズに適応できるエリート人材を育成する可能性がある。このようなカリキュラム構成は、学術的なレベルでは学生の方法論的な訓練の欠如を招きやすい。ここ3年間の武漢理工大学大学院入試合格者を見ると、研究の方向性が曖昧で、学術的な思考力が弱いといった問題を有する学生が増加している。学科建設に関しては、外国語学部が自校の理工系学部との間に「学術の孤島」を形成しており、日本の科学技術文献の読解、技術文書の翻訳などの特色ある科目の開発が遅れているという二重の危機を引き起こしている。

3.4 就職市場における異質な競争

理工系大学の日本語専攻の学生は、就職市場において激しい異質な競争に直面している。

こうした大学はその理工系の特色ゆえに、日本語専攻の卒業生にとって、キャンパスリクルートの際の専攻の適合率が外国語系の大学よりも低い。このような就職における困難は、二重の圧迫効果に由来する。第一に、中国における日系企業数のである。過去に比べて増加しているものの、多くの日系企業の中国支店は、日本での留学経験を持つ中国人学生（両国の文化を熟知している）を採用するか、あるいは直接日本の現地従業員を雇用する傾向にある。そのため、伝統的な就職ルートは狭まっているのが現状と言える。また、慕課(MOOC)⁷⁾などのオンライン授業プラットフォームにより、非専攻日本語学習者も生まれており、N2以上の日本語能力資格を見ると、その割合は増加している。

4. 理工系大学の日本語専攻の発展モデル

現在、日本語専攻は次のような多くの問題に直面している。第一に、日本語専攻の専門性をどのように再定義し、新しい内容を加えていくべきかという点である。純粋に日本語学習を主とする学生にとって、プロジェクトクラスや文理融合の状況を除外した前提でどのように力を与えるかは、重要な問題となる。時には、日本語が単なる道具に陥る場合を懸念する声もある。第二に、教師の位置づけとプレッシャーの問題も早急に解決する必要がある。新しい状況に直面した際、日本語専攻は文系も理系も含め他の学科とどのようにして相互補完を形成するのか、また現在の地域・国別研究のブームにどのように溶け込むかを考える必要がある。

4.1 一部の中国の大学の日本語学科の特色戦略

この重要な転換と発展期に、中国の高等教育機関、特に大学の日本語専攻は重要な変革を経てきた。2024年9月に開催された第一回中国大学日本語専攻卒業生の就職先に関するセミナー⁸⁾では、中国各地の高等教育機関の代表者が一堂に会し、日本語専攻の卒業生の就職動向と未来の展望について検討した。これはそれぞれの大学独自の教育的特色と強みを際立たせることを目的としている。日本語専攻の分野で日増しに激化する競争の中で優位に立ち、持続可能な発展の道筋を模索するためである。

表4 中国の大学の特色あるモデル

大学	日本語+モデル	X 学科	具体的なモデル
浙江大学	日本語文書の図書館建設	コーパス	日本語コーパス構築
南開大学	通用専攻と人文社会科学専攻の複合型の国際化人材育成プロジェクト	法学、国際政治、公共管理、中国語国際教育、工商管理、世界史、経済系、金融系、保険、政治学	1-2年次：日本語基礎 3年次：専門科目+学際基礎 4年次：人文社科実習

復旦大学	コア能力＋自主 発展	専門発展プログラム・優等 生課程・学際教育・副専攻・ 起業家教育	2＋X 制度：日本語 44 単位 ＋ X プログラム 34 単位 人文×AI 融合 :AI 活用言語分 析・習得課程
中国人民大学	涉外法治実験ク ラス、グローバル ガバナンスと国 際事務実験クラ ス	涉外法務分野、グローバル ガバナンス・国際問題関連 分野をはじめとする人文 社会科学系専門領域	日本語＋ダブルディグリー
浙江外国語学 院	日本語＋クロス ボーダー電子商 取引、日本語 ＋ 教育	ビジネス日本語・EC 関連科 目」および「教育学基礎・ 日本語教授法科目」を開講 し、複合型スキルを育成。	学内 EC シミュレーションプ ラットフォームによる実践訓 練を提供。日本語教育実習や 教育機関での実地研修を実 施。
杭州師範大学	日本語＋ビジネ ス、日本語＋教育	ビジネス日本語と教育学	ビジネス日本語能力の育成＋ 教育課程を活用した中学校教 員養成
北京大学	外国語＋人文社 科／自然科学／ 情報科学	人文社会科学／コンピュ ータ科学／自然科学系専 門分野	日本語専攻＋情報科目ビジネ ス課程日本語、法学複合人材 育成

4.2 トップ大学における「日本語＋」教育モデルの実践的取り組み

4.2.1 南開大学の特色モデル

南開大学では非通用言語種と人文社会科学専攻を結合した複合型の国際化人材育成計画を実施しており、FAS と呼ばれている。このプロジェクトは 2017 年に始動し、学内の優位な人文学科と社会科学の深い融合促進を目的とし、中国の特色と南開大学の特色を備えた非通用言語種の複合型人材育成を目指している。これまでに、すでに 8 つの学院、15 の専攻がこのプロジェクトに参加している。日本語専攻の学生は個人の興味に基づいて自由に参加を選択することができる。特に注目すべきは、このプロジェクトには臨選メカニズム（例えば、学生が経済類学科を複合した場合、数学類の試験を合格しなければならない。）が設けられており、学生が複合専攻を選択する相応の能力を備えているかどうかを評価するために用いられている。FAS プロジェクトが成功を収めた後、南開大学は 2024 年に FSE プロジェクトを始動させた。FSE プロジェクトとは、同校の重要な言語種と理工系専攻の複合型卓越イノベーション人材プロジェクトであり、英語以外の言語を専攻する学生が理工系専攻と複合的に育成される可能性があることを強調している。南開大学の多くの国家ダブル一流重点建設学科の学部や専攻がこのような複合型人材育成プロジェクトに参加している。

4.2.2 中国人民大学の特色モデル

中国人民大学は日本語と法学・国際関係などの優勢的学科とを結合させ、特色が際立つデモンストレーション効果を発揮している。高等教育の変革という背景の下、新文系建設の推進と地域・国別学の台頭は、すでに顕著な発展の傾向となっている。中国人民大学は積極的にこの時代のニーズに応え、涉外法治実験クラス、グローバルガバナンスと国際事務実験クラスを設置し、「日本語+」のダブル学位プロジェクトを打ち出し、複合型人材育成モデルを実現している。これらの措置は新文系建設のニーズを満たすだけでなく、新時代の発展に適応する高い素養を備えた人材を育成する助けとなっている。中国の物語を有効に伝えることは、重要な時代的使命である。しかし、人工知能翻訳技術の急速な発展に伴い、伝統的な言語専攻は新たな試練に直面している。中国人民大学の模索は、学生により広い発展のスペースとより多くの就職機会を提供しているだけでなく、有効に中国の物語を伝え、中日の交流と協力を促進するためにも積極的な貢献をしていると言える。

4.2.3 復旦大学の特色モデル

復旦大学は2020年以来、積極的に「2+X」の複合型人材育成モデルを模索し、実践してきた。この人材育成モデルにおいて、日本語は核心能力の一つとして設定されており、大学は学生個人の自主的な発展と総合的な素質の向上を重視している。新質生産力の発展のニーズに鑑み、人材育成は確かな言語力とイノベーション精神を備えているだけでなく、堅実で広範な科学技術と人文知識の基礎を持つことが求められる。復旦大学の教育体系は専攻の高度化、荣誉プロジェクト、学際教育、副専攻学位、起業・イノベーションなど、複数の面を広くカバーしている。特筆すべきは、同校が打ち出した「2+X」育成体系である。これに必要な単位は78単位で、このうち日本語専攻は44単位を占め、X育成体系は34単位となる。これは、ほぼ日本語専攻の単位数と同等になっており、「2+X」の全体的な教育体系における日本語の重要な地位を示しているだけでなく、X育成専攻を重視していることも示している。これに加えて、復旦大学では人文科学と人工知能技術の深い融合を推進しており、「AIが力を与える言語分析と言語習得」などの最先端の授業を開講している。これらの措置は新時代のニーズに適応する高い素養を備えた日本語専攻人材を育成するための新たな道を開くだけでなく、新時代下の高等教育におけるイノベーションの発展にも寄与している。

以上の通り、中国国内の多くの高等教育機関は学科のクロスオーバー融合と複合型人材育成を言語系の学科、特に日本語学科の発展を高める重要な戦略と見なしている。新時代の到来に伴い、特に新文系発展戦略の提起により、トップ大学は迅速に新文系戦略を策定し、実施している。例えば、清華大学は文系の名誉教授制度を樹立し、学術の継承、伝統の発揚、後進の奨励、イノベーションを提唱する人材体系と発展メカニズムを構築することを目的としている。浙江大学は学科クロスオーバー予備研究専門プロジェクトを設立し、

一級学科を跨ぐ、特に文理間の大きなクロスオーバー研究を奨励している。これにより「多
学科クロスオーバー博士研究生育成専門計画」を推進し、イノベーションチーム、例えば
「ビッグデータ＋日本語」イノベーションチームを育成・支援し、脳科学と人工知能の会
集研究などを展開している。これらの措置はトップ大学における学科のクロスオーバー融
合と複合型人材育成戦略発展の考え方を示しており、戦略的に優位なポジションを占めよ
うとしていることがわかる。

4.3 理工系大学の「日本語＋」の転換と発展

4.3.1 教育方法改革の重要性

各理工系大学の専攻特色と実際の状況、そして地方の人材市場のニーズおよび動員可能
な資源に基づき、理工系大学の日本語専攻の教育方針の位置付けと育成目標を科学的に策
定する必要がある。また、人材育成目標の設定においては、学生の個人差を考慮し、多層
化を実現することが重要であり、一律化のモデルを避ける必要がある。

理工系分野における日本語教育資源は比較的乏しい。理工系の専攻は多数のサブ領域と
方向をカバーしているため、このようなチャレンジに対し、大学は多様化した教育資源を
導入する必要がある。例えば、ネットワーク学習プラットフォームを利用したり、専門の
教員との直接的な交流を図ったりする必要がある。まず、理工系の専攻に対する日本語教
育の具体的なニーズに基づき、基礎語彙と対応する理工系専攻の初歩的な理解から着手し、
大学は授業資源を提供し、関連する課題を出すことで、学生の自主的な学習を促進する。
グローバルな情報化と AI 技術の急速な発展という背景の下、多くの高等教育機関では AI
教育戦略を導入し始め、マルチメディア技術を利用してその教育効果を高めている。しか
し、教員の情報技術の応用能力が不均一であることから、一部の教員は新しいメディア資
源を有効に利用できず、AI 技術との融合教育が十分に発揮されていない。そのため、日本
語専攻と理工系専攻の教師による自主的学習能力の強化は切迫した課題となっている。日
本語専攻の教師グループは主に文系出身である。年齢的要素も相まって、理工系の専門知
識を習得する上では一定の壁があることは否めない。それでも、新たな時代を迎えるにあ
たり、積極的に関連する理工系分野への理解に努め、教育内容の豊かさを促進していくこ
とが必要である。

4.3.2 AI 融合型デジタルリソース

日本は世界的な科学技術強国の一つであり、理工学科の研究分野において世界の先頭集
団を走っている。理工系の専門コーパス及び教材ライブラリの構築を実施することで、日
本語の専門文献や専門の機器装置をより効率的に学習・応用することが可能となる。

AI 時代の到来に伴い、従来の紙の本では現在のハイスピードな学習生活に対応できなく
なりつつある。そのため、日本語と理工系に対応する専門書および教材を電子書籍化する

必要がある。独自に開発したアプリを用いて日本語と理工系を結合した参考資料を構築することは、現在の理工系大学が自らのデジタル化、情報化資源に基づいて行う実施可能な措置である。社会は日進月歩で発展しており、伝統的な紙の本と比較した場合、人工知能と組み合わせることができる理工系の日本語アプリに含まれる参考資料は、いつでもどこでもバックエンドから更新できる。これは紙の本にはない優位性であり、理工系大学の強力な専門的強みを十分に発揮する措置でもある。その他にも、アプリやウェブサイトを通じて構築されたコーパスの形式で、常用語彙や理工系の専門資料の索引などの機能を追加すれば、日本語と理工系に対応する参考書庫及び専門コーパスが完成し、理工系大学における「日本語+理工系専攻」の複合能力を備えた人材を育成する際の効率と実用性を大幅に向上させることができる。また、教育補助ツールとしても、理工学科の教師と日本語の教師が理工系の専門知識と日本語に関連する知識を教える際に力強い後ろ盾となる。

4.4 武漢理工大学での取り組み案

武漢理工大学での授業設計においては、基礎段階（一年生と二年生）は日本語の言語技能を中核とし、「科学技術日本語基礎」「理工系文献の読解」などの授業を新設し、材料、自動車などの分野の入門知識を取り入れる。専門段階（三年生と四年生）では理工モジュールと実践モジュールを同時進行させ、「材料科学概論（日本語授業）」「自動車エンジニアリングの日本語用語と翻訳」「交通エンジニアリングのケース分析」などの学際的な授業を開講する。また大学の材料複合新技術国家重点実験室では「中日科学技術協力プロジェクトの模擬実践訓練」を行い、選択科目のモードにおいて、能力のある学生が理工系の第二学位を副専攻とすることを支援し、単位数の相互認定を実現する。国際交流や協力の面では、長崎外国語大学、広島大学との交換協力プログラムに加え、大阪大学や神戸大学などとの外国語・文学分野での連携を基盤として、国際文化、経済学、法学、工学等の分野における協力関係を推進する。⁹⁾

実践のレベルでは、一般企業などと協力して、「科学技術日本語翻訳ワークショップ」を設立し、自動車、材料分野の技術文書翻訳プロジェクトを請け負う。また、理工系の国際会議の同時通訳の仕事に参加し、実戦経験を積む。さらに、国際的に優秀な学生を選び出し、日本の協力大学に派遣して「1+1」の共同育成を行うこともできる。最初の一年間は日本語と人文の授業を学び、次の一年間で理工系の専門授業を選択するなどが考えられる。実習基地を設立し、日系企業（及び中日合資企業）と共同で実習基地を設置し、学生に技術的なコミュニケーション、プロジェクト管理などのポジションでの実習に参加させることも、「日本語+理工」を実施するために欠かせない手段だと言える。

注目すべきは、このモデルではその実施中に多重の試練に直面することである。第一に、学際的な授業の高負荷は学生が不安に陥りやすいため、「双指導教師制度」を整備し、「学業指導教師+心理カウンセリング」の双介入メカニズムを通じて、ストレス管理を最適化

する必要がある。第二に、理工系の教師の外国語教育への参加度が不足しているため、「共同授業準備制度」と「学科クロスオーバーワークショップ」を通じた教師資源の協同を促進することである。同時に、日本語教師の場合も定期的に理工系の専門講義に参加させ、学際的な教育能力を向上させる。授業選抜前には「理工基礎能力テスト」を設定し、日本語学習者が学際的に理工系を学ぶ能力を備えているかどうかを評価し、基準を満たさない者は副専攻または単科の選択科目といった選択をすることができる。

上述の「日本語＋理工」の複合型人材育成モデルは、理工学科の知識の移転を通じて日本語専攻の内涵を再構築することを目的としている。実践を通じて、日系の科学技術関連の企業への卒業生の就職率を向上させ、外国語学科を「道具的な位置付け」から「戦略的な支点」へと転換させ、地域・国別研究と科学技術外交のためにクロスフィールドな人材を蓄積することが望ましい。将来は、人工知能による個別化学習の道をさらに模索する必要があるが、こうした試みは一大学に止まらず、他の理工系大学の日本語学科にも拡大することが望ましい。技術革新が言語教育に与える深層的なインパクトに対応するためには、目に見える改革が急務となる。

おわりに

現在、中国の理工系大学では日本語の複合型人材を育成する際、「日本語＋」の発展を重視し、段階的に「日本語＋」複合型人材体系を構築することが求められている。文系専攻の教育には独自の法則があり、日本語専攻は主に言語・文化と社会科学を研究するが、その研究対象は複雑で多様な人間文化と社会である。その認識と発展の法則は理工系の専攻とは必ずしも一致しないため、すべての専攻が「日本語＋」と組み合わせるのに適しているわけではない。これを無理に特色化・地域化を追求すれば、日本語専攻の育成基準の質を満たさなくなる可能性がある。これでは、複合型人材の育成どころではなく、結果的に日本語専攻の発展にマイナスの影響を与えることとなる。「日本語＋」複合型人材の育成は長期的かつ段階的なプロセスであり、短期間で達成できるものではない。特に注目すべきは、理工系専攻の学生の育成効果の顕在的な特徴とは異なり、文系専攻の学生の育成の質は長期的なプロセスを経なければ有効なフィードバックを得ることはできない。そのため、「日本語＋」の構築を推進する過程で、理工系の大学は着実に進歩するための戦略を持たなければならない。特色のある教育を推進する過程で、学科間のクロスオーバー融合は強調されているものの、この過程が堅実な科学的基盤の上に築かれていることは保障しなければならない。また、「日本語＋」の構築を追求するためだけに無理にこうした複合型人材を育成したり、政策の方向性に合わせて学生の個性差を無視したりすることは避けなければならない。

注

- 1) 『日本語学習と研究』は中国を代表する日本語学術誌の一つで、日本語教育学・日本文化研究・言語学を専門とする査読付き学術雑誌である。年4回発行され、中国と海外の大学研究者や日本語教師の重要な研究発表プラットフォームとなっている。
- 2) Duolingo は無料で楽しく学べる言語学習アプリである。ゲームのような感覚で、英語・日本語・フランス語など40言語以上を勉強できる。
- 3) LingoDeer はアジア言語学習に特化した言語学習アプリケーションである。日本語、中国語、韓国語などを中心に、体系的で分かりやすいカリキュラムが特徴である。
- 4) “2021 年度海外日本語教育機関調査”、国際交流基金
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html> (参照 2025-05-14)
- 5) 「985 工程」は、中国教育部が 1998 年 5 月に策定した高等教育重点整備政策である。本政策の主目的は、世界トップクラス大学の育成にあり、選定対象校に対して国家レベルでの重点財政支援および政策的優遇措置が講じられた。
- 6) 「211 工程」は、1995 年に中国教育部が開始した国家重点大学建設プロジェクトである。21 世紀に向けて、約 100 校の高等教育機関を重点的に支援し、国際競争力のある一流大学の育成を目的としている。
- 7) MOOC (Massive Open Online Course) はインターネットを通じて誰でも無料または低価格で受講できる高等教育講座である。
- 8) 浙江大学外国語学部が主催し、同校日本語言語文化研究所が後援した第 1 回大学日本語専攻学部生募集・卒業生進路に関するセミナーがオンラインで成功裏に開催された。学部生募集、卒業生の進路、専攻の強み、現在直面している困難などのテーマを巡り、新文系下の日本語専攻の建設と発展について深く議論された。
- 9) 武漢理工大学国際交流課
https://news.whut.edu.cn/zhxw/202505/t20250506_1327911.shtml (参照 2025-05-14)

参考文献

- 王升遠・張鵬・孫成志・費曉東・劉件福 (2023) 「問題意識、対話意識と時代感覚—日本語言語と日本語教育研究の観念更新と方法革新」『日本語学習と研究』2023(6)、1-9 頁。
- 許晴・董麗娜 (2022) 「日本語専攻学習者の動機再構築に関する実証研究」『日本語学習と研究』2022(6)、115-125 頁。
- 王升遠・修剛・王忻・張威・李運博・母育新・孫穎・毛文偉・鄭詠滄 (2021) 「中国における日本語言語研究：現状の課題、挑戦と展望」『日本語学習と研究』2021(05)、1-20 頁。
- 修剛 (2018) 「新時代における中国の専門日本語教育の転換と発展」『日本語学習と研究』2018(01)、75-79 頁。
- 周佑勇 (2017) 「理工系大学における「一流文科」の構築方法」『中国高等教育』2017(23)、40-41 頁。

王升遠・黄彩霞（2017）「弊害と突破：「日本語言語文学」という学科の名と実態」『探索与争鳴』2017（05）、83-90 頁。

Challenges and Prospects for Japanese Language Majors in Technology Universities in the Construction of New Liberal Arts

CAI, Shaofeng ZHOU, Tangbo

Abstract

In this paper, we have conducted a detailed analysis of the current state and challenges faced by Japanese language major education in technology universities in China. Against the backdrop of constructing new liberal arts education and developing new quality productivity, we explored strategies to optimize and innovate Japanese language major education in science and engineering universities, aiming to cultivate high-quality interdisciplinary talents that meet the demands of the new era. For the future development of Japanese language majors in science and engineering universities, it is essential to adhere to the fundamental educational mission of "fostering virtue and nurturing talents", closely align with national strategic needs and market trends, and promote the transformation and upgrading of educational models.

Keywords : University of technology, Japanese+, Japanese major, Multidisciplinary talent

近代中国の作文教育における「写生」の受容と展開

林 子愉（浙大寧波理工学院）

要旨

日本近代写生文は「五四運動」前後に中国へ紹介され、文学創作のみならず作文教育にも深く影響を与えた。本研究では、教育雑誌・教科書・作文論などの一次資料をもとに、「写生」が近代中国の作文教育においてどのように受容され、実践されたのかを分析した。その結果、「写生」は単なる文体模倣にとどまらず、観察力や生活実感の重視といった教育理念と結びつき、新たな作文指導法として導入されていたことが明らかとなった。また、「写生」は日本の作文教育理論を参照した教授法として、中国における作文教育の近代化に一定の役割を果たした。本研究は、日本の教育概念が中国の作文教育においてどのように受容・変容されたかを明らかにすることで、近代中国における作文教育の方法論的変遷を理解するための視座を提示した。

キーワード： 写生文、写生作文、『教育雑誌』、近代中国作文教育

はじめに

「写生」(sketch)は本来絵画の概念であるが、近代¹⁾日本においては文学における「写生」が広く議論され、その結果、写生文は成熟した文体へと発展した。

『日本近代文学大事典』では、「写生文」という概念の使用が高浜虚子主宰の雑誌『ホトトギス』の影響を通じて日本文学史上注目されるようになったことが明確に示されている。この概念の起源は、正岡子規による俳句革新における写生精神および彼が「叙事文」に発表した文章観に求められる。²⁾ 邱雅芬は『日本小説発展史』において、写生文運動の時代的背景を概説する中で、次のように指摘している。「正岡子規は俳句や短歌の領域において写生論を実践し、それが後に散文の領域にも波及した。明治30年代前期に現れた写生文運動は、簡明な『言文一致』の文体を提唱し、自然主義と並行して展開されたが、その性質は異なる。写生文は俳句の創作手法を散文に応用することを主張し、自然や人事に対する深い観察を重視するとともに、文章の余情や趣きも強調した」。³⁾ ここでは、俳句の創作手法が写生文創作の方法と見なされており、写生文の文体は言文一致体であるとされている。

以上のように、「写生」をめぐる議論は主に正岡子規の俳句時代、すなわち写生文運動の初期段階に焦点を当てていることが明らかとなる。注目すべきは、写生文はまた、執筆法

としても議論されている。柳田国男は写生文を文章作成の手段として評価し、「文章は元来、思想を発表する手段である（中略）写生文を読んでからは、この意味がよく分った。文章は気をもつて貫くなど、いふのも、つまりは、作者の気分をもつて文を行くことで（中略）自分の気をよく養つて、その上は唯だ、見た事、聞いた事、思ふ事、感じたことを、有りの儘にさへ書けばよいのである。」⁴⁾と述べ、写生文が従来の表現方法を打破したことを指摘している。久保田淳らによって編纂された『岩波講座 日本文学史』では、「写生」に関する詳細な考察が行われており、第2章「短詩形文学の発展」では「写生一方法の近代」⁵⁾という節を設け、俳句の発展を写生という方法の観点から論じている。

また、文学界の影響を受けて、写生文は日本近代の作文教育の分野にも現れるようになった。作文は「写生」という思潮の影響を受け、「ありのままに書くべきだ」といった作文理念として具体化された。大正初期には、「写生」の主張が日本教育界で活発に展開された。たとえば、芦田恵之助の随意選題論や五味義武と駒村徳寿の写生主義作文教授法には、写生文および写生主義作文への言及が見られる。

筆者は、上述のような日本近代における写生文という概念が、中国近代文学の領域においても確認される点に注目した。日本の写生文が俳句革新を起点として展開されたように、近代中国における日本写生文への認識も、正岡子規の俳句に由来している。顧偉良は、1921年から1923年にかけて展開された「小詩運動」が、日本の短詩や写生文、ギリシャの短詩の影響を受けており、それが散文体裁にも波及したことを指摘している。

小詩運動は、主として日本の短詩および写生文、そしてギリシャの短詩を手がかりとして散文運動を推進しようとしたものである。その成否はさておき、この運動は散文という文体の交替を意味するものであり、極めて重要な意義を有していた。周作人が追求した短詩的形式は、芸術と生活における一種の「美意識」に根ざしており、俳諧文とも密接に関連している。日本の写生文はまさに俳諧文から派生したものであり、長い歴史的沿革をもつ。周作人が写生文を重視したのは、彼の卓越した美的感受性によるものであり、それはまた彼の文学的趣味や文体とも深く関係している。⁶⁾

小詩運動は短命に終わり、写生俳句的な文学スタイルは継承されることがなかった。しかしながら、日本近代の写生文の影響はそれにとどまらず、中国近代の作文教育の文脈にもその姿を見出すことができる。

日本の近代写生文は「五四運動」前後に中国に翻訳・紹介され、中国の作家たちは単に日本の写生文を翻訳するにとどまらず、自らの文学創作にも応用した。特に注目すべきは、文学分野における写生文が中国の作文教育にも浸透し、近代中国作文教育において「写生」が一つの指導方法として提唱された点である。本稿では、日本の写生文が近代中国の作文教育に与えた影響に焦点を当て、「写生」がどのように受容され、作文教育に取り入れられ

ていったのかを具体的に考察する。こうした分析を通じて、近代中国における作文教育の方法論的変遷を理解するための視座を提示することを目的とする。

1. 「写生」理論の源流：日本写生文から日本写生作文へ

文学における「写生」を論じる際、まず日本近代文学の誕生期に遡る必要がある。日本近代の写生文は、初めは文体としての概念であったが、その定義は文学史において曖昧であった。写生文の起源は、正岡子規が西洋の絵画理論を俳句改革に取り入れた新しい試みであり、これが散文や小説の創作にも影響を与え、さらには写生文運動へと発展した。写生文運動の創作実践は、正岡子規を中心とする「山会」や『ホトトギス』を主催した高浜虚子らの同人、さらには夏目漱石を中心とする「文章会（木曜会）」の間で行われ、各作家はそれぞれの理解と試みを行った。夏目漱石の『吾輩は猫である』、寒川鼠骨の『新囚人』、寺田寅彦の『団栗』、鈴木三重吉の『千鳥』などの作品は、写生文の傑作として位置づけられている。

日本の近代写生文の影響は、文学分野にとどまらず、明治後期を超えて大正時代から昭和初期の児童作文教育にも浸透した。芦田恵之助の随意選題論や五味義武と駒村徳寿の写生主義作文教授法、児童雑誌『赤い鳥』の写生作文指導がその一例である。

『赤い鳥』のモットーによれば、『募集作文』のコラムはすべての子供と、子供の教養を引受けてゐる人々と、その他のすべての国民とに向って、真個の作文の活例を教へる機関である」とされている。写生文の影響力は明治時代の写生文運動にとどまらず、鈴木三重吉の作文教育実践にも見られ、『赤い鳥』における写生作文教育は写生文運動の延長線上にあると考えられる。「写生」は方法論的な意味で、一般的な文芸表現形式となっている。

写生文は、さまざまな文章作法に関する読本や教科書にも取り入れられ、作文の模範例としても活用された。例えば、『明治時代文範』（博文館、1907年）、『師範学校・中学校・高等女学校入学予習作文』（育成会、1910年）、『文章作法：新式速成』（報文館、1911年）、『文章作法講話』（目黒書店、1912年）、『文章速達法』（実業之世界社、1915年）、『新文章及文学講義』（文化普及学会、1924年）、『叙事抒情文作法』（松陽堂、1925年）、『文章作法及文範』（教文社、1925年）、『作文新編備考』（光風館書店、1928年）などの著作において、写生文は広く紹介され、具体的な例文が収録されている。

総じて、「写生」という概念は改めて再考されるべき課題であり、日本近代文学史における写生文の発展と変遷の過程を再検討する必要がある。写生文は、その成立当初、新たな文学表現として、文学における写実のあり方を探求するものであった。写生文を論じる際、仮に写生文運動が展開された短期間の動向のみを基準とすれば、その全体像は曖昧となり、その実態を正確に把握することは困難である。しかし、日本近代文学の歴史的展開の中に写生文を位置づけることで、その影響が明治後期の写生文運動の枠を超え、文学の領域にとどまらず、大正期から昭和初期にかけての児童作文教育にも及んでいることが明らかと

なる。その典型的な例として、児童雑誌『赤い鳥』による作文指導が挙げられる。特に注目すべきは、「写生作文」が写生文の発展に与えた影響について、従来の研究において十分に論じられてこなかった点である。児童作文における「写生作文」の問題を看過すれば、近代日本における写生文の議論は不完全なものとならざるを得ない。

2. 近代中国作文論再考：「写生」への関心と導入

近代中国における日本の「写生」理念の受容は、明確な足跡を残しているにもかかわらず、これまで研究者によって十分に注目されてこなかった。中国における写生文は主に文章作成指導や学生の作文教育の領域で見られ、例えば、1922年に胡懷琛が著した『中等簡易作文法』（崇文書局、1922）では「対物写生法」という作文指導法が議論されている。近代中国の文脈で写生文を再考することにより、写生文が中国に紹介された後の新たな展開や可能性が浮かび上がる。特に注目すべきは、「写生」が中国の作文教育に広く応用され、その方法論が教育現場で定着していった点である。それでは、「写生」という新しい作文教育法は、どのようにして中国において作文指導の一環として定着したのかを検討する。

2.1 『教育雑誌』の場合

「五四運動」前後は、中国国語教育改革の重要な時期であり、海外に関する作文理論は『教育雑誌』⁷⁾を通じて中国に紹介された。『教育雑誌』は近代中国において最も長期間にわたり発行され、広く普及した定期刊行の教育雑誌である。この時期の作文教育法は、教師たちの実践的な指導経験の総括に加え、国外の作文教育に関する研究も参考にされている。この雑誌は、国外のさまざまな教育理論や教授法の紹介と普及において重要な貢献を果たし、「先駆者」として教育理論の普及に大きな一歩を踏み出したといえる。特に、「新刊紹介」というコーナーでは、「最近の英米・日本の主要教育雑誌要目一覧」（図1・2）を定期的に掲載し、国外から最新の教育理論を導入していた。このようにして、中国が西洋の先進的な教育理論を学ぶための貴重な資料を提供していた。

「写生」の作文教育理論もまた、『教育雑誌』を通じて中国に紹介された。「写生主義之作文教授」（第7巻第7号、1915年）、「綴法教授之根本研究」（第11巻第2・4・5号、1919年）、さらに「关于写生文之考察」（第13巻第2号、1921年）などの文章において、写生文が中国の小学校作文教育の改良策として導入されることが提案されている。これらの文章は、「写生」の理念が中国近代作文教育に具体的にどのように結びついていったのかを示す重要な証拠となる。

A. 英美各種主要教育雜誌表

雜誌名目	月刊回数	每年定價并郵稅		發行所	摘要
		外幣	墨金		
Educational Review	一年十册	美金3.00	7.50	Doubleday, Page & Co., Garden City, New York.	外資如欲寄訂由上海商務印書館發行所開代書訂
Teachers College Record	一年五册	美金1.75 (GS)	4.38	Columbia University New York City	
Times Educational Supplement	每週一張	英金1.50 (£)	9.00	The Times, London	
Educational Review (教育季報)	每季一册		未詳	上海崑山花園中國基督教教育會	
Normal Instruction Primary Plans	一年十册	美金2.00	5.00	F. A. Owen Publishing Co., Dansville, New York	
School	每週一册	美金3.00	7.50	The School News Co., 156 Fifth Avenue New York	
School and Home	每月一册	美金1.12	2.80	School and Home Publishing Company, Lithonia, Ga., and Atlanta Ga.	
School and Society	每週一册	美金6.00	15.00	American Book Company, New York	
School Life	每月一册	美金0.55	1.38	Department of the Interior, Washington, D.C.	
Educational Foundations	一年六册	美金1.62	4.05	Educational Magazine Publishing Company, Cooperstown, N. Y.	
Education	一年十册	美金4.40	11.00	The Palmer Company 120 Bogeston Street Boston, Mass	
Philippine Education	每月一册	美金1.50	3.75	Philippine Education Co. Manila P. I.	
School News and Practical Education	每月一册	美金1.88	4.70	Parker Publishing Co. Taylorville, Illinois	

圖1 英美各種主要教育雜誌表

(『教育雜誌』1922年第14卷第1号より)

1915年に発行された『教育雜誌』第7巻第7号には、「写生主義之作文教授」という天民による署名記事が掲載されている。この記事は、写生主義作文法を紹介し、教育者に対する参考資料を提供することを目的としており、「作文指導の主要な方法として、写生主義を必ず採用すべきである。」(作文指導之主要方法, 必当采取写生主义。)⁸⁾と提唱している。ここで述べられる「写生」とは、絵画と文章の両方に関連し、「写生とは、客観的な事物が人の感覚を通じて心情に反映され、それを絵画として描写したり、文章として記述することである。」(写生云者、乃客观的之事物经过吾人之感官而映于心情。吾人或描绘为图画或记述为文章以发表之之谓也。)⁹⁾と定義されている。さらに、「写生によって得られた文章は写生文である。」(由于写生而得之文是为写生文。))とも述べられている。また、天民は「写生の素材は、客観的な物やそれに対する心情、そして両者を結びつける感覚から生まれるものである。」(而其材料, 则由客观物与对待而居之心情及联结二者之感官而产出者。)¹⁰⁾と指摘している。筆者の研究により、この記事で述べられている「写生」に関する作文観は、中国近代の作文教育における議論において初めて登場したことが明らかになった。

B. 日本各種主要教育雑誌表					
雑誌名称	月刊回数	毎年定価并郵税		発行所	摘要
		日金	墨金		
教育學術界	毎月一冊	6.50	6.695	東京大日本學術協會	外代訂 如欲訂購左列各種雜誌可先寄書費郵費由上海商務印書館發行所
帝國教育	毎月一冊	3.00	3.090	東京帝國教育會	
教育研究	毎月一冊	4.70	4.841	東京大日本圖書株式社	
教育時論	毎月三冊	5.75	5.922	東京開發社	
小學校	毎月二冊	5.60	5.768	東京同文館	
兒童教育	毎月一冊	4.80	4.944	東京寶文館	
現代教育	毎月一冊	1.00	1.030	東京現代教育社	
教育界	毎月一冊	5.82	5.935	東京明治教育社	
兒童研究	毎月一冊	3.50	3.605	東京兒童研究發行所	
教材研究	毎月一冊	3.40	3.502	東京寶文館	
内外教育評論	毎月一冊	4.40	4.532	東京内外教育評論社	
教育實驗界	毎月一冊	2.40	2.47	東京教育實驗社	
國語教育	毎月一冊	4.30	4.423	東京目黒書店	
集團教育研究錄	毎月一冊	6.60	6.798	東京教育學研究所	

図2 日本各種主要教育雑誌表
 (『教育雑誌』1922年第14巻第1号より)

その後、范祥善は1919年に『教育雑誌』に「綴法教授之根本研究」を三部（『教育雑誌』1919年第11巻第2、4、5号）にわたって連載し、これは中国における初期の体系的な作文教育論文の一つとされている。この連載論文においても「写生」の問題が取り上げられており、写生主義の作文教育に関する理論的な基盤を形成する重要な役割を果たした。范祥善の考察は、写生文が教育現場でどのように具体化され、実践されるべきかを示す指針を提供している。

近代中国初期の作文教育を考察する際、作文に関する表現として、日本語の「綴法」という語と「作文」という語の両方が使用されていることに気付く。この背後には、日本の影響を受けた中国近代作文という学科の歴史的背景が関わっている。

日本において、「綴方」という語はすなわち「作文」を指す。1900年、日本文部省は小學校令において「作文」科の名称を「綴方」へと改めたが、戦後には再び「作文」の名称に戻している。清末民初の中国では、魯迅や周作人に代表される多くの中国人留学生が日本に渡り、教育や文学などを学んだことにより、日本の影響を強く受けた。このような影響のもと、日本の教育用語や作文概念が中国にも導入されるようになった。その一例として、中国の作文教育において、広東では作文を「綴方」、北京では「綴法」と称するなど、

地域によって異なる呼称が用いられた。例えば、1903 年に編纂された『国語教授法』（両広初級師範簡易科館編）では、作文を「綴方」と記しており、また、范祥善の作文法に関する論考の題名も「綴法」とされている。ここでは、黎錦熙の『国語の「作文」教学法』（1924）における記述を引用し、「綴法」と「作文」という語の関係を整理する。

黎錦熙は文章の冒頭で「綴法」と「作文」の使用歴を論じ、次のように述べている。

小学校国語科において、「作文」は従来「綴法」と称されていた。（北京の各小学校課程ではこの名称が多く用いられており、これはもともと日本の尋常小学校課程から継承されたものである。しかし、「綴文」という語はすでに漢書にも見られるように、古くから用いられてきた……）しかし、法令上は旧学制の国民学校令において「作法」と称されていた。（この名称は、日本では修身科の「作法」と混同されることを避けるために用いられなかった。中国においても、当初、学校課程を定める際に、修身科の「作法」を「礼儀」と改称し、さらに『礼記』の篇名に基づいて「少儀」と呼ぶ者もいたため、国語科の「綴法」を「作法」と改称したのである。）しかし、新学制の小学校国語課程綱要草案では、「作文」と表記されている。総合的に考えると、「綴法」「綴文」「作法」「作文」の四つの名称のうち、「綴法」という名称が最も適切である。なぜなら、「綴（つづ）る」「作（つく）る」ことは、初学年において必ずしも文字を用いた「文章」に限定されるものではなく、その大部分は「言語活動」に属するためである。したがって、「文」という字を表記せず、「綴法」と称することで、その名称が初学年における言語活動を広く包含することが可能となり、また、「作文」と表記した場合に生じる「必ず筆を執って文章を作らねばならない」という誤解も避けることができる。したがって、「作文」という名称は端的で分かりやすいが、従来から使用されてきた「綴法」の方が、より理論的に正当性を持つのである。

（在小学校国語科，“作文”向来称“綴法”，（北京各小学校课程多用此称，实在是当初从日本寻常小学课程中沿袭而来的。可是“綴文”一词，其来已久，如汉书……）但在法令上，如旧学制国民学校令则称“作法”，（这个名称，在日本是怕与修身科的作法相混，所以不用；中国当初定学校课程时，将修身课的作法改为“礼仪”，——有人又根据礼记的篇名改称为“少仪”，——于是就把国文科的綴法改称为作法了。）而新学制小学国語课程纲要草案则称“作文”。综合来说，綴法、綴文、作法、作文四个名称，还是綴法这个名称好些。因为所綴所作，在初年级并不尽是用符号标记出来的“文”，大部分还只是“语言的活动”，故不将“文”字表著出来表述出来，而只称“綴法”，可以使这名称的界说多包容初年级的那一部分，而且称用时可以减少那一定要执笔为文的误会。所以“作文”这个名称虽然觉得直截了当，但不如向来沿用的“綴法”义正严词。）

近代日本の語学教育において、「綴方」という語は主に学校教育の場で用いられ、国語教育の科目と密接に結びついていた。「綴方」は「読む」「書く」「聞く」「話す」といった言語技能の分科とともに成立した概念である。一方、近代中国における「綴法」という概念も、日本の学科分類の影響を受けたものであり、国語教育改革の一環として導入された。そこでは、「綴法」は単なる「文章作成」ではなく、学生の「言語活動」を重視する概念として位置づけられ、「文章」よりも広範な意味を持つと考えられた。そのため、「綴法」は学生が文章を書く試みに取り組む上で、有効な指導概念となり得たのである。

また、1921年、『教育雑誌』の主編である朱元善は、筆名「太玄」を用いて『教育雑誌』に「关于写生文之考察」という文章を掲載した。この文章では、「外国の作文改良運動が写生文に基づいているとし、中国の小学校における作文改良の方法も写生文であるべきだ」と主張している。朱元善は、文章の冒頭で写生文の種類と基準について論じることを目的としていると述べている。

「小学校における作文の方法は、徐々にどのような形式へと改良されるべきか？作文方法の中での写生文は、どのようなものであるべきか？これが本稿の議題である。しかし、作文方法の根本的な問題については、様々な議論があり、一概に決定することはできない。今ここでいわゆる写生文とはいかなるものであるかについて論ずるにあたり、まずは写生文の種類およびその基準について考察するものである。」

（小学校之綴法，渐次改良为如何之形式乎？綴法中之写生文，当为如何者乎？此本篇所欲讨论之问题也。然对于綴法之根本问题，凡有种种之议论，自不能一概决定。今所云写生文当如何者，乃就写生文之种类及其标准而考察之。）¹²⁾

この文章は、写生文が中国の作文教育において果たす役割とその理論的背景を探求する重要な一歩となった。更にこの文章では、文学における写実主義と自然主義の違いについても言及されている。「写実主義は自然を描写するものであり、自然主義は自然に同化した描写である。写実主義は形式に属し、自然主義は主観に属する。写実主義は次第に技巧主義へと流れ、自然主義は空想主義に陥る。」（写实主义乃描写自然，而自然主义则为同化于自然之描写。写实主义自属形式，自然主义为主观。写实主义渐次流于技巧主义，自然主义陷于空想主义。）¹³⁾と述べている。そして、写生文の研究が作文領域にも波及していると述べ、「このような文学的傾向が次第に作文方法の研究者の頭脳に浸透し、最近では写生文の研究が行われるようになった」（此等文学上之倾向，渐次浸润于研究綴法者之头脑中，近时遂有所谓写生文之研究焉。）¹⁴⁾としている。このように、朱元善の考察は、文学理論と作文教育の相互関係を明らかにし、写生文が中国の作文教育に与える影響を示す重要な役割を果たしている。

朱元善は、写生文に関する多くの議論の中で、自らの定義も示している。「写生文につい

での定義には様々な議論があり、創作力の練習を重視するものや、思想力の発達を重視するものがある。しかし、小学校における写生文は、誇張や虚偽を排し、事実を誠実に描写することを唯一の原則とすべきである。」(世人关于写生文之定义议论颇多,或谓以练习创作力为主,或谓以发达思想力为主。然课于小学校之写生文,要当以不夸张不虚伪诚实描写事实之记述为唯一主义也。)¹⁵⁾と述べている。また、説明文とは異なり、写生文は客観的な態度を採るべきであるとし、「自己が感動した事物やその状態を描写し、自らの考察を加えずに、事物の状態をただ直に書くことで、他者にも自らと同じ感動を与えることが写生文である。」(描写自己被其感动之事物及其状态……在不加自己之考想而唯直书事物之状态,欲使他人一如己之被其感动焉,此即写生文也。)¹⁶⁾と説明している。この観念は、日本の写生文運動で流行していた理念と一致している。

以上のように、近代中国における写生文及び写生作文法に関する初期の議論を通じて、日本の作文教育理論の影響と、中国の作文教育実践に基づいた考察が見られ、作文教育に関心のある学者や教師にとっての貴重な参考資料となっていることは明らかにした。

2.2 陳望道の場合

陳望道は中国の言語学者、教育者であり、「共産党宣言」を中国語に翻訳した人として知られる。1921年から1922年にかけて、陳望道は『民国日報・覚悟』という新聞に『作文法講義』を連載した。この時期、白話文の興起に伴い、学生が作文を書く方法についての議論が教育界で急速に進展したため、作文の形式や描写に関する問題を解決するための専門教科書が切実に求められていた。

陳望道は『作文法講義・小序』において、「男女学生の需要に応えるため、この本を編纂した。」(我是为了满足男女同学们底需要,编了这一册书。)&述べており、この本は作文についての理論的な説明を、文章の構造、体制、美質という三つの側面から行っている。また、執筆において「真実を追求する」ことを基本的な態度とし、技巧主義や感情主義を排除することを提唱している。この「真実を追求する」という態度は、日本の写生文が重視する事実への忠実な描写と一致している。このように、陳望道の『作文法講義』は、近代中国における作文教育の重要な出発点となり、写生文の影響を受けた教育理念を具体化したものと言える。

特に注目すべきは、陳望道による中国近代の文章形式の議論が、外国の文学理論を十分に参照して形成された点である。彼が翻訳した加藤朝鳥の『文芸上各种主义』¹⁷⁾や、夏目漱石の『文章概観』¹⁸⁾などがその一例であり、後者は夏目漱石初期の文章論として、写生と描写などについて論じ、中国に日本の写生文を紹介する重要な資料であった。このように、陳望道の活動は中国近代文学教育において、日本の文学理論と実践を融合させる役割を果たし、作文教育に新たな視点をもたらした。

3. 近代中国作文教育における「写生」の教授法

「写生」の作文理念は教育実践において実際に応用されてきた。「写生」の教授法は近代中国作文教育の現場において重要な役割を果たしていたことが明らかである。

1919 年、『小学校』誌第 11 号に掲載された「綴法教授概要」¹⁹⁾ は、江蘇省立第二女子師範附属小学校における国語科の作文教育の概要を示しており、「写生」が記述文の一部として整理されている。この概要では、同校の作文指導における文体の分類が紹介され、特に写生が記述文の一種として位置づけられている。また、同校では「聴写」「視写」「暗写」の三つの指導法が採用されており、学年に応じてその比重が調整される。この教育方法およびカリキュラム配置は、日本の近代尋常小学校における作文教育の指導内容を模倣していると考えられる。1915 年に『教育雑誌』に掲載された「小学校作文教授法（続）」²⁰⁾ では、当時の日本の尋常小学校の教育モデルが紹介されており、提案された「聴写」「視写」「暗写」の指導法は、江蘇省立第二女子師範附属小学校のカリキュラム設定とほぼ一致している。

一年目			学 年
文の構成			基 準
三	二	一	学 期
学習面 八 日常見聞 四	学習面 六 日常見聞 三	学習面 十二 日常見聞 五	教 材
視写法 聴写法 暗写法 直観描写法 自作法	視写法 聴写法 暗写法 直観描写法	視写法 暗写法 聴写法	教 授 法

表 1 江蘇省立第二女子師範附属小学校国語科教学配置
(『小学校』1919 年 第 11 号 第 23 頁に基づき整理)

1922 年、胡懷琛の『中等簡易作文法』では、「対物写生法」と呼ばれる作文の執筆方法について論じられている。しかし、胡懷琛が参考にしたのは西洋絵画の手法であった。「西洋の画家には写生の方法があり、すなわち実物を手本として模写するものである。さらに一歩進めば、野外写生となり、自然の山水を画稿とするのである。私は、絵画においてそうであるならば、文章においてもまた然るべきである」と考える。初めは学習者に興味深い

実物を描写させ、次第に野外写生へと進めるのがよい」(西洋画家有写生之法, 即以实物为范本而摹写之者也, 更进一步, 则为野外写生, 即以天然之山水为画稿也。余谓于画如是于文亦宜如是。最初可令学者描写有趣之实物, 其后亦可野外写生)²¹⁾と述べている。このように、教室を出て自然の中で写生を行う作文の手法は、教育家である錢畊莘にも支持されていた。錢畊莘は「耿僊」という筆名で、『民国日報・覚悟』に「谈话: 作文也须举行“野外写生”」(「谈话: 作文もまた『野外写生』を実施すべきである」)²²⁾を發表し、「絵画には野外写生というものがあり、それは絵画固有のもののように思われるが、私の考えは違う。作文においても野外写生を実施すべきである」(图画有举行“野外写生”这件事, “野外写生”似乎是图画所固有的了, 我底意思确实不然, 就是作文也须举行“野外写生”)と述べている。錢畊莘は、教室内で目にするものや触れるものは変化に乏しく、作文の学習は「郊外を最良の教室とすべきである」(以郊外为良教室)と主張した。

その後、葉聖陶は1924年に『作文論』を出版し、「絵画の手法を用いて描写すること」(用绘画的方法去描写)や「脚本を書くように登場人物の動作を明記する」(像编作剧本一样注明人物的动作)ことを提案した。また、素材の選択に関しては「真実で深みのあるものを用い、信頼性のない軽薄な表現は排除すべきである」(要是真实的、深厚的, 不说那些不可征验、浮游无着的话)²³⁾と強調している。1932年には、葉聖陶が編纂した教科書『開明国語教科書』が出版され、この教科書における「生活と作文の関連性に対する重要性」の見方は、日本近代の作文教育理念や鈴木三重吉が編集した雑誌『赤い鳥』における写生作文教育理念と類似している。さらに、葉聖陶は1935年に『作文概説』を出版し、生活と作文の結びつきをさらに強調した。この本の第一章では「作文即生活」という問題について論じており、これは日本の大正時代における児童作文教育が「生活」を重視し、「生活作文運動」として知られる民間教育運動の発展と深く関連している。

「写生」を基盤とした作文指導法は、20世紀40年代まで継続して用いられていた。1946年に創刊された『重光教育月刊』には、「写生法作文教学」²⁴⁾という題名の文章が掲載され、教師の龔占鶴が小学校一年生を対象に行った写生作文指導の実践例が詳述されている。この文章では、写生の具体的なステップとして、取景・観察・構想・執筆・修正が紹介され、「日常的に学生に敏感な目を使い、自然を観察させること」(日常也要训练学生用敏慧的眼光, 观察自然的一切)などの具体的なアドバイスが提供されている。この文章からは、写生による作文指導が観察力や構想力を育成する教育手法として広く取り入れられていたことが確認できる。さらに、『岡中校友通信』1949年第7期には、「小学校作文『写生法』」(《小学作文“写生法”》)²⁵⁾という文章が掲載されており、教師と学生との対話形式で一回の授業写生が記録されている。

おわりに

近代中国の作文教育において、「写生」の影響が顕著に見受けられ、その主な内容は「写

生」に関する作文論の議論と教育の実践成果にある。「写生」作文の理論的探究においては、日本の作文指導理論や教育制度が大きな参考となった可能性が高い。「五四」新文化運動は幅広い教育改革を推進し、その一環として作文教育の改革も重要な役割を果たしていた。当時の中国では、政府による統一的な学制やカリキュラムが確立されていなかったため、民間や地方の教育者たちは自発的に新たな教育理念やモデルを模索し、外国の教育雑誌や作文指導書は作文教育における貴重な参考資料として広く活用された。教育者や文学者による作文指導理念や文章観の提唱は、教育実践に大きな影響を与えた。

作文教育では、「何を教えるか」「どのように教えるか」という教育的問題に加え、「何を書くか」「どのように書くか」という文学的課題も同時に考える必要がある。日本から導入された「写生」は、新しい作文指導法として、中国近代の作文教育に方法論的な指針を提供した。「写生」は、作文の「表現内容」と「表現方法」に具体的かつ実践可能な枠組みを与え、従来の模倣に基づいた作文モデルを打破する助けとなった。こうして、「写生」に基づく作文は、その内容がより豊かで真実性を備え、中国の作文教育に新たな視点をもたらした。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本稿では、現時点で入手可能な資料のみに基づいて検討を行っており、資料の範囲には一定の制約がある。今後は、日中両国の近代教科書や作文教育理論、教育実践に関する資料の一層の収集と整理を通じて、両国における作文教育の理論的枠組みおよび実践的展開の過程を、より立体的かつ精緻に明らかにしていくことが求められる。とりわけ、比較教育的視座から両国の教育制度や文化的背景を照射することにより、両国に固有の教育的特性および共通点を把握し、今後の研究の深化につなげていくことが期待される。

注

- 1) 本論文における「近代」の範囲は、日本文学においては明治維新（1868 年）から太平洋戦争終結（1945 年）まで、中国文学においては五四運動（1919 年）から中華人民共和国成立（1949 年）までの時期を指すものとする。
- 2) 日本近代文学館、小田切進編（1977）『日本近代文学大事典（第四巻）』講談社、185-186 頁。
- 3) 邱雅芬（2021）『日本小説発展史』浙江工商大学出版社、121 頁。本文中にある中国語原文の日本語訳は全て筆者によるものである。
- 4) 柳田国男（1907）「写生と論文」『文章世界』2(3)、30-32 頁。
- 5) 久保田淳[ほか]編（1996）「写生—方法の近代」『岩波講座 日本文学史 第 13 巻』岩波書店、34-38 頁。
- 6) 顧偉良（2019）「反时代的考察：一场被忘却了的小诗运动的夭折（上）——从写生文、《古诗今译》等谈周作人的散文精神」『绍兴鲁迅研究』2019、263 頁。
- 7) 『教育雑誌』は、上海で発刊された月刊誌で、1909 年 1 月から 1948 年 12 月まで全 33 巻が

刊行された。編集は教育雑誌社が担当し、発行は商務印書館による。この雑誌は教育を研究し、学務の改良を目的とした教育系雑誌であり、教育における改善点や施策を提唱し、学術研究や教育者の経験談を翻訳・紹介している。また、教育法令や著名な教育家の伝記も掲載されている。

- 8) 天民（1915）「写生主義之作文教授」『教育雑誌』7(7)、109 頁。
- 9) 同上、109 頁。
- 10) 同上、110 頁。
- 11) 黎錦熙（1924）「国語の『作文』教学法」『教育雑誌』16(1)、1-27 頁。
- 12) 太玄（1921）「写生文之考察」『教育雑誌』13(2)、1 頁。
- 13) 同上、2 頁。
- 14) 同上、2 頁。
- 15) 同上、7 頁。
- 16) 同上、8 頁
- 17) 加藤朝鳥著、陳望道訳（1920）「文芸上各种主义」『民国日報・覚悟』第四版、1920 年 10 月 28 日。
- 18) 曉風、天底訳（1921）「文章概観」『民国日報・覚悟』、1921 年 6 月 10、12、13 日。夏目漱石（1906）「文章一口話」『ホトトギス』10（2）。
- 19) 江蘇省立第二女師範附属小学校国語科研究部（1919）「綴法教授概要」『小学校』11、17-35 頁。
- 20) 費攬澄（1915）「小学校作文教授法（続）」『教育雑誌』7（8）、49-53 頁。
- 21) 胡懷琛（1922）『中等簡易作文法』崇文書局、44 頁。
- 22) 錢耕莘（1922）『民国日報・覚悟』4（25）。
- 23) 葉聖陶（1980）「作文論」（中央教育科学研究所『葉聖陶語文教育論文集』教育科学出版社）、358-359 頁。
- 24) 龔占鶴（1946）「写生法作文教学」『重光教育月刊』、15-17 頁。
- 25) 陳晴川（1949）「小学校作文『写生法』」『岡中校友通信』7、9-10 頁。

参考文献

- 教育杂志社編（1909-1948）《教育杂志》商务印书馆。
- 叶圣陶（1980）《叶圣陶语文教育论文集》教育科学出版社。
- 方明生（2002）《日本生活作文教育研究》上海教育出版社。
- 臧佩红（2010）《日本近现代教育史》世界知识出版社。
- 鄭谷心（2017）『近代中国における国語教育改革 激動の時代に形成された資質・能力とは』日本標準。
- 川本皓嗣（2001）「子規の「写生」—理論的再評価の試み」『俳句』（大特集：子規再発見—百回忌のいま）50（10）、118-123 頁。

武藤清吾（2019）『『赤い鳥』とその時代』『フランス文学』32、42-51 頁。

郑梦娟（2019）《日本国语教育政策研究：历史与现状》《江汉学术》38、98-105 頁。

The Reception and Development of "*Shasei*" in Modern Chinese Composition Education

LIN, Ziyu

Abstract

The concept of modern Japanese *shaseibun*, was introduced to China around the time of the May Fourth Movement and exerted a notable influence not only on literary creation but also on composition education. This study investigates the reception and development of "*shasei*" within the context of modern Chinese composition education, drawing on primary sources such as educational journals, textbooks, and composition treatises. The analysis reveals that "*shasei*" was not merely replicated as a literary style but was appropriated as a pedagogical method emphasizing concrete observation and the expression of lived experience. As a method grounded in Japanese composition theory, "*shasei*" contributed to the modernization of composition instruction in China. By tracing how this educational concept was received, adapted, and localized, the study sheds light on the methodological transformation of composition education during China's modern period.

Keywords : *Shaseibun*, *shasei* composition, *Education Journal*, modern Chinese composition education

学会役員

<顧問>

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

山泉進（明治大学・名誉教授）

<会長・理事>

李東哲（山東外事職業大学・教授）

<副会長・理事>

安達義弘（日韓言語文化交流センター・
副代表）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・名誉教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

鄭亨奎（日本大学・特任教授）

李東軍（蘇州大学・教授）

<常任理事>

李昌玟（韓国外国語大学校・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

金珽実（商丘師範学院・副教授）

崔肅京（富士大学・教授）

施暉（蘇州大学・教授）

李慶国（追手門学院大学・名誉教授）

李先瑞（寧波理工大学・教授）

李東輝（大連外国語大学・教授）

<一般理事>

安勇花（延辺大学・副教授）

飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）

伊月知子（愛媛大学・准教授）

岩野(吉川)佳英子（愛知工業大学・教授）

加藤三保子（豊橋技術科学大学・名誉教
授）

倪璋（常葉大学・教授）

崔玉花（延辺大学・副教授）

周堂波（武漢理工大学・副教授）

徐瑛（延辺大学・副教授）

宋曉凱（曲阜師範大学・教授）

張維薇（四川大学・副教授）

中川良雄（なにわ国際学院・学院長）

仲矢信介（東京国際大学・准教授）

娜荷芽（内蒙古大学・教授）

任星（厦門大学・副教授）

白曉光（西安外国語大学・副教授）

彭広陸（北京理工大学・教授）

堀江薫（新潟県立大学・名誉教授）

宮脇弘幸（宮城学院女子大学・客員研究
員）

宮崎聖子（福岡女子大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

<事務局>

事務局長

金珽実（商丘師範学院・副教授）

副事務局長

力丸美和（九州大学・助教）

事務局助手

于心（成都東軟学院・副教授）

南明世（北海学園大学・講師）

学会動向

◆「第7回 東アジア日本学研究国際シンポジウム」が中国で開催

2025年8月15日（金）から17日（日）にかけて、中国延吉市の延辺大学において国際シンポジウムが開催されました。シンポジウムには、広東外語外貿大学・陳多友教授、千葉大学・三宅晶子名誉教授、日本大学・井上優教授、海南大学・金山教授、黒竜江大学・許宗華教授の基調講演をはじめ、126名が参加し、114組による研究発表が行われました。シンポジウムは盛況のうちに終了し、各発表に対して活発な議論が交わされました。

◆第6、7回 東アジア日本学研究学会役員会がオンラインで開催

東アジア日本学研究学会 2025年度第6回理事会が6月13日（金）、第7回理事会が7月28日（月）に、李東哲会長の司会でオンライン開催されました。会議では、次期会長選挙やシンポジウム準備の進捗状況、学会誌や新入会員に関する報告が担当理事より行われ、情報の共有がなされました。

◆新ホームページ開設

南明世事務局助手により新ホームページが開設されました。会員の皆様にご活用いただければ幸いです。

◆学会誌第15号への投稿募集

2026年3月発行予定の『東アジア日本学研究』第15号への投稿を募集中です。会員の皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは9月8日（月）の北京時間24:00です。

東アジア日本学研究学会事務局

会員消息

◆新入会員（3名）

張民花（富士大学・大学院生）、蔡少峰（武漢理工大学・大学院生）、李強楠（関西大学・大学院生）

◆会員の所属・職位変更

中川良雄 京都外国語大学・特任教授 → なにわ国際学院学院長
辻本桜子 甲南大学・特任講師 → 大阪教育大学・特任講師

◆学位取得

薛鳴（大阪大学人文学研究科 博士（文学）2025年3月25日）
黄少安（韓国国立全北大学 文学博士学位 2025年8月22日）

◆書籍出版

薛鳴（著）『「関係」の呼称の言語学』ひつじ書房、2024年2月
李広志（著）『日本遣唐使研究』浙江大学出版社、2025年5月

※上記の情報は2025年4月1日以降、2025年9月30日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会事務局

東アジア日本学研究学会会則

<名称>

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

<目的>

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をととして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをととして、学問の進歩及び当該地域の平和的發展に寄与することを目的とする。

<事業>

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

<会員>

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

<入会・退会>

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

<会費>

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員	5,000 円
学 生	3,000 円
賛助会員	50,000（1口） 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（秋季号・春季号）の刊行を原則とする。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。

（例）2026年度年会費分の秋季号は2026年4月1日締め切り・9月発行、春季号は2026年のシンポジウム後締め切り・2027年3月発行予定
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは以下の者および編集委員会で承認した者とする。
 - ・秋季号
筆頭著者：会員のみ
共著者：会員のほか、非会員も可
 - ・春季号
筆頭著者：会員およびシンポジウムで発表した非会員
共著者：上記の者のほか、シンポジウムで発表していない非会員も可
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。投稿者が非会員の場合は、投稿料として会員の年会費相当額を、投稿本数分事務局に納入することとする。（いずれの場合も、筆頭著者だけでなく共著者も同様とする。）
- 5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による投稿承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとする。また、一人が一回に投稿できる本数は以下の通りとする。
 - ・筆頭著者2本以上…不可
 - ・筆頭著者1本のみ…可
 - ・筆頭著者1本、第二著者以下1本…可
 - ・筆頭著者1本、第二著者以下2本以上…不可
 - ・筆頭著者0本、第二著者以下2本まで…可
 - ・筆頭著者0本、第二著者以下3本以上…不可

- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は別添の所定の様式で提出すること。
- 12) 「完成原稿と論文要旨」「投稿票」「投稿承諾書」は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則として MS-Word とする。ファイル名はそれぞれ次のようにすること。

	ファイル名	例
完成原稿と論文要旨	1. 論文・要旨（氏名）	1. 論文・要旨（山田太郎）
投稿票	2. 投稿票（氏名）	2. 投稿票（山田太郎）
投稿承諾書	3. 投稿承諾書（氏名）	3. 投稿承諾書（山田太郎）

採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者2名による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブチェックを受けること。
- 15) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

2018年9月30日 制定

2019年9月20日 改正

2021年4月20日 改正

2023年1月20日 改正

2025年8月16日 改正

投 稿 票		
投稿日：20 年 月 日		
氏名		
所属・職位	(例) ○○大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生	
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
種類（該当を残す）	秋季号 / 春季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す。 複数回答可）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史 5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特になければ記載不要です。		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚(注・図表・参考文献を含む)、秋季号論文は10～15枚(注・図表・参考文献を含む)とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号は1.、2.、3. …とし、その下の款項には1.1、1.2、1.3…を用いる。さらにその下の項には1.1.1、1.1.2、1.1.3…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい(番号は付けない)。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする(欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く)。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号(m kg など)を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名(発行年)『書名一副題』出版社。(MS 明朝 9P)

(日中韓語の雑誌論文) 著者名(発行年)「論文名一副題」『雑誌名』巻数(号数)、〇-〇頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名(発行年)「論文名一副題」(編者名『書名一副題』出版社)、〇-〇頁。

(日中韓訳書) 編著者名(発行年)『書名一副題』(訳者名、原著は〇年発行)出版社。

(欧文の書籍) 編著者名(発行年) 書名: 副題, 発行地: 出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名(発行年) “論文名: 副題,” 雑誌名, 巻数(号数), pp. 〇-〇。

(欧文の書籍中の論文) 著者名(発行年) “論文名: 副題,” 編者名 ed., 書名: 副題, 発行地: 出版社, pp.

〇-〇。

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

（春季号）シンポジウム終了後3週間以内とする。

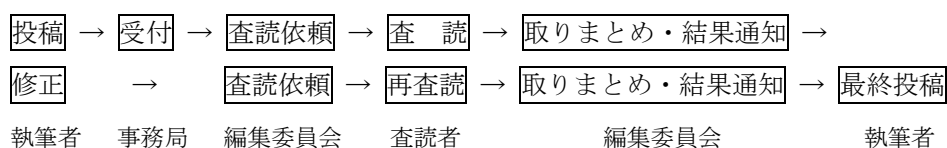
（秋季号）毎号4月1日（北京時間24：00）とする。

・投稿先：東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

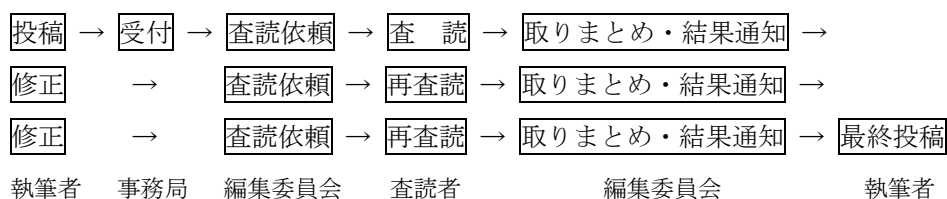
（春季号）査読は2回までとする。

（2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）



（秋季号）査読は3回までとする。

（3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が2週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。

- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

＜総合判定ガイドライン＞

(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)

採用 : ◎◎ (6点)

条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)

再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)

不採用 : ×× (0点)

- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には13本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用10本、不採用2本、不受理1本という結果になりました。投稿前には必ずネイティブチェックを受けるようにしてください。また、書式は遵守するようにしてください。

副編集委員長 加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）

論文を執筆する際、文章の生成や翻訳にAIツール等を利用した時は、該当部分の正確性と論理性を執筆者自身がしっかり確認する必要があります。また、母語以外の言語で執筆する場合、完成原稿のネイティブチェックは必須です。

編集委員 加藤恵梨（愛知教育大学准教授）

本号にも多くの優れた論文をご投稿いただき、誠にありがとうございました。掲載された論文が国内外の研究者に広く読まれ、それをもとに問題意識が芽生え、新たな研究へとつながるなど、読者の研究に活かされることを願っております。

編集委員 金光林（新潟産業大学教授）

私は数年以上編集委員を担当しながら、『東アジア日本学研究』誌に投稿されたいろんなテーマの論文を読ませていただきました。査読する過程もいい勉強でありました。『東アジア日本学研究』誌に引き続きたくさんの論文が投稿されることを期待致します。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

投稿された論文に興味深く読ませていただきました。どのようなテーマで研究しているのか、どのような構成でそれを論じるのかなど、毎回楽しみです。研究内容はぜひわかりやすく表現してください。次年度も多くの論文が寄せられることを期待しています。

編集委員 李東軍（蘇州大学教授）

この度、楽しく査読させていただきました。論文の視点や論点がかなり新鮮であり、こちらに刺激を与えてくれたと同時に、とても勉強になりました。また、従来より論文の研究分野も幅が広くなり、論述の質も向上しつつあるという印象でした。

編集委員 安勇花（延辺大学副教授）

今回二編の論文を査読させていただきましたが、最終的には一編が採用決定となりました。残念ながら採用されなかった論文については、今後の修正を通じてさらなる完成度向上が期待できるものでした。今回も査読を通してたいへん勉強になりました。

事務局（学会誌受付担当） 力丸美和（九州大学助教）

第14号は、多くの語学・言語教育に関する論文をご投稿いただきました。ご投稿くださった会員の皆様、誠にありがとうございました。次号以降は、文学や文化、歴史や哲学等の論文のご投稿もお待ちしています。

事務局（学会誌編集補佐担当） 南明世（北海学園大学講師）

本号も興味深い論文をご投稿いただきありがとうございました。着想や構成の工夫には毎回新たな発見があり、楽しく拝読いたしました。今後も読み手に伝わりやすい形での研究成果の発信を期待しております。次号でも多くのご投稿をお待ちしております。

〔本号の査読者〕（50音順）

安勇花（延辺大学副教授）、加藤恵梨（愛知教育大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）、金光林（新潟産業大学教授）、金斑実（商丘師範学院副教授）、権裕羅（秋田大学助教）、胡蘇紅（神戸市外国語大学客員研究員）、中川良雄（なにわ国際学院学院長）、任星（厦門大学副教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、彭広陸（北京理工大学教授）、南明世（北海学園大学講師）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（山東外事職業大学教授）

東アジア日本学研究 第14号
Japanese Studies in East Asia No.14

2025年9月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com（一般）

eaja20172@163.com（学会誌専用）

住所：〒143-0012 東京都大田区大森東 1-36-8-218

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
